

樽味遺跡 III

—— 樽味遺跡 3 次調査報告 ——



愛媛大学埋蔵文化財調査室

1997

樽味遺跡 III

——樽味遺跡3次調査報告——

愛媛大学埋蔵文化財調査室

1997

巻頭図版1



愛媛大学構味・北吉井団地（1994年8月25日撮影、1/4,000、松山市提供）

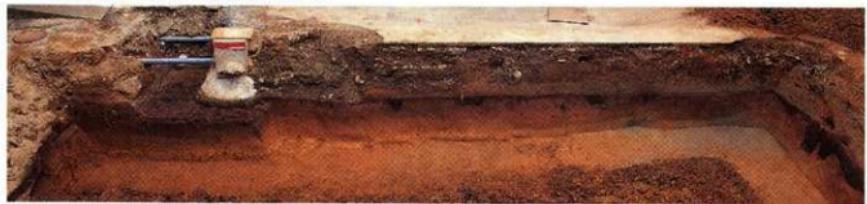
巻頭図版 2



愛媛大学樽味団地と 3次調査地点（1947年4月5日米極東空軍撮影、約1/12,000、国土地理院提供）



1. 榛味遺跡 3次調査区完掘状況（南から）



2. 調査区南壁土層



3. 調査区西壁土層

序 文

愛媛大学は、松山市および愛媛県内各所に大小のキャンパスをもち、敷地総面積は464ヘクタールにおよぶ。その中で、本部事務局と4つの学部を抱える城北地区、農学部と附属農業高等学校がある樽味地区など多くのキャンパスでは、埋蔵文化財が分布することが知られている。こうした大学構内の埋蔵文化財については、1987年に愛媛大学埋蔵文化財調査委員会の指導に基づき設立された埋蔵文化財調査室が、発掘調査を実施するなどの保護処理を講じている。

本書は、平成5年度に実施した樽味キャンパスに所在する樽味遺跡3次調査の成果をまとめたものである。樽味キャンパスでは、これまで、1987年の大学院連合農学研究科新設工事に伴う1次調査、1992年の農学部研究実験棟新設工事に伴う2次調査が行われ、方形の区画溝に囲まれた14～15世紀の中世村落の姿が明らかにされている。また、周辺でも、松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センターによって、1987年から試掘調査や本格調査が続き、弥生時代～古墳時代の集落遺跡が断続的に営まれていることが知られてきた。

今回の調査でも、古墳時代の5世紀後半から6世紀にいたる集落遺跡を調査している。調査範囲が狭い割りに、7棟もの竪穴式住居跡や2棟の掘立柱建物などの数多くの遺構が発見され、竈を造り付けた竪穴式住居跡などの調査を通じて、当時の生活の一端を明らかにすることができた。

ところが、発掘調査を平成5年10月に終了し、調査成果を公開するため、ただちに整理作業に入ったが、平成6年度以降、城北キャンパスでの文京遺跡12・13次調査や構内各所で行われる小規模工事に伴う調査が続き、整理作業は大きく沈滞した。ようやく、平成8年度に調査体制が充実され、3年越して報告書の刊行に向けて整理作業を再開することができたようになつた。こうした調査成果の公開が遅れたことは、今後の愛媛大学の解決すべき課題として残されている。

発掘調査から記録・遺物類の整理、そして報告書の刊行にいたるまでには、多くの方々から協力を得た。それらの方々に深く感謝するとともに、本書が多くの人々に利用・活用されることを祈念します。

平成9年2月1日

愛媛大学埋蔵文化財調査室長
下條信行

例　　言

- 1.本書は、愛媛大学埋蔵文化財調査室が1993(平成5)年度に実施した愛媛県松山市樽味町3丁目5番7号地の愛媛大学附属図書館農学部分館増築工事に伴う樽味遺跡3次調査の報告書であり、愛媛大学埋蔵文化財調査報告VIにあたる。
- 2.本書報告の遺構には、1からの通しの遺構番号を与え、種別を、掘立柱建物：S B、竪穴式住居跡：S C、溝：S D、炉跡・竈：S F、土壙：S K、柱穴・小穴：S P、その他の遺構：S Xの記号を冠して表している。
- 3.本書での方位・標高数値はすべて平面直角座標IV系にしたがっている。
- 4.原則として、遺構図は1/50と1/25を併用し、土壙は1/30、遺物実測図は基本的には1/4としている。
- 5.土色・遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(1996)に準拠したが、本文中ではマンセル記号は省略した。
- 6.本書に使用した遺構・遺物実測図は、田崎博之・宮崎直栄が作成し、浮写を行った。
- 7.本書で使用した遺構・遺物写真は田崎が撮影した。
- 8.土壤学的な調査を愛媛大学の吉永長則名誉教授に依頼し、玉稿をいただいた。
- 9.本書の執筆はI章を宮崎、IV章を吉永長則、他を田崎が執筆した。
- 10.註は各章ごとにまとめて章末に記載した。
- 11.本書の編集は、下條信行の指導のもとに田崎が行った。
- 12.本書に報告した樽味遺跡3次調査に係わる記録類・出土遺物は、愛媛大学埋蔵文化財調査室において保管されている。

目 次

序 説	1
1 調査にいたる経緯と調査組織・体制.....	1
2 調査・整理作業の経過.....	2
3 調査・整理の方法と遺物・記録類の保管.....	5
I 位置と環境.....	7
II 調査の概要.....	15
1 基本層序.....	15
2 遺構と遺物.....	16
III 遺構・遺物の調査記録.....	17
1 竪穴式住居跡.....	17
2号竪穴式住居跡 (17) 4号竪穴式住居跡 (27)	
5号竪穴式住居跡 (38) 6号竪穴式住居跡 (40)	
7号竪穴式住居跡 (44) 9号竪穴式住居跡 (46)	
12号竪穴式住居跡 (48)	
2 堀立柱建物.....	51
19号堀立柱建物 (51) 20号堀立柱建物 (53)	
3 溝	54
1・3号溝 (54)	
4 土壌.....	57
8号土壌 (57) 10号土壌 (57)	
13号土壌 (59) 14号土壌 (62)	
16号土壌 (62) 17号土壌 (62)	
21号土壌 (62) 27号土壌 (62)	
5 その他の遺構と遺物.....	66
15号遺構 (66) 18号遺構 (66)	
立柱痕跡をもつ柱穴および小穴 (67) III層出土の遺物 (70)	
IV 土壤学的調査の記録.....	72
V 調査のまとめ.....	74
調査抄録.....	80

挿 図 目 次

図.1 調査地点位置図 (縮尺 1/2,500)	4
図.2 3次調査区割図 (縮尺 1/300)	5
図.3 松山市周辺の主要遺跡分布図	8
図.4 松山市周辺の地質	9
図.5 松山市北東部周辺主要遺跡分布図 （縮尺 1/25,000）	11
図.6 主要遺構配置図 (縮尺 1/100) （折り込み）	16-17
図.7 SC-02実測図 (縮尺 1/50)	18
図.8 SC-02遺物出土状況 (縮尺 1/50)	19
図.9 SC-02内 SK-25土層断面図 （縮尺 1/25）	20
図.10 SC-02内 SF-23実測図 (縮尺 1/25)	21
図.11 SC-02出土遺物実測図 1 （縮尺 1/3）	22
図.12 SC-02出土遺物実測図 2 （縮尺 1/3）	24
図.13 SC-02出土遺物実測図 3 （縮尺 1/3・2/3）	26
図.14 SC-04実測図 (縮尺 1/25・1/50)	28
図.15 SC-04遺物出土状況 (縮尺 1/50)	30
図.16 SC-04東西土層断面図 （縮尺 1/25）	31
図.17 SC-04内 SF-24(竪)実測図 （縮尺 1/25）	32
図.18 SC-04出土遺物実測図 1 （縮尺 1/3）	32
図.19 SC-04出土遺物実測図 2 （縮尺 1/3）	34
図.20 SC-04出土遺物実測図 3 （縮尺 1/3・2/3）	36
図.21 SC-04出土遺物実測図 4 （縮尺 1/3）	37
図.22 SC-05実測図 (縮尺 1/50)	39
図.23 SC-05出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	40
図.24 SC-06実測図および 出土遺物実測図 (縮尺 1/50・1/3)	41
図.25 SC-07実測図 (縮尺 1/50・1/25)	43
図.26 SC-07土層断面図 (縮尺 1/25)	44
図.27 SC-07出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	45
図.28 SC-09実測図 (縮尺 1/50)	46
図.29 SC-09土層断面図 (縮尺 1/25)	47
図.30 SC-09出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	47
図.31 SC-12実測図 (縮尺 1/50)	48
図.32 SC-12出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	49
図.33 SB-19実測図・出土遺物実測図 （縮尺 1/50・1/3）	51
図.34 SB-20実測図・出土遺物実測図 （縮尺 1/50・1/3）	53
図.35 SD-01・03実測図 (縮尺 1/80・1/25)	55
図.36 SD-01・03出土遺物実測図 （縮尺 1/3）	56
図.37 SK-08・27実測図 (縮尺 1/30)	56
図.38 SK-10実測図 (縮尺 1/30)	58
図.39 SK-10出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	59
図.40 SK-13実測図 (縮尺 1/30)	60
図.41 SK-13出土遺物実測図 （縮尺 1/3・1/2）	61
図.42 SK-14実測図・出土遺物実測図 （縮尺 1/30・1/3）	63
図.43 SK-16実測図・出土遺物実測図 （縮尺 1/30・1/3）	63
図.44 SK-17実測図・出土遺物実測図 （縮尺 1/30・1/3）	63
図.45 SK-21実測図 (縮尺 1/30)	65
図.46 SK-27出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	65

図.47 SX-18実測図・出土遺物実測図	遺物実測図 (縮尺 1/3).....	68
	(縮尺 1/30・1/3)	66
図.48 SP-202・211・212・213・214・216・222・ 244・245・251・258・263・268・273出土	III層出土遺物実測図 (縮尺 1/3・1/2)	70

本文写真目次

写真.1 遺構検出の作業状況	2
写真.2 現地説明会(1)	2
写真.3 現地説明会(2)	2
写真.4 遺構検出状況 (Ⅲ層除去後、南から).....	3
写真.5 整理作業風景	6
写真.6 灰色系の埋土をもつ土壙・小穴の 検出状況	16
写真.7 SK-326検出状況.....	16
写真.8 SC-02-04完掘状況(西から).....	20
写真.9 SC-02北東部遺物出土状況 (南から)	20
写真.10 SC-02南東部遺物出土状況 (西から)	20
写真.11 SC-02内SF-23(竪)検出状況 (南から)	21
写真.12 SC-02内SF-23(竪)土層断面 (南から)	21
写真.13 SC-02出土遺物	21
写真.14 SC-04完掘状況1(北から)	29
写真.15 SC-04完掘状況2(南から)	29
写真.16 SC-04東西土層断面(南から)	30
写真.17 SC-04西側土層断面(南から)	30
写真.18 SC-04内SK-22(北東から)	30
写真.19 SC-04竪検出状況(南から)	32
写真.20 SC-04竪土層断面(東から)	32
写真.21 SC-04出土遺物	37
写真.22 SC-05-06検出状況(南から)	38
写真.23 SC-05出土遺物	38
写真.24 SC-05完掘状況(東から)	39
写真.25 SC-06完掘状況(北東から)	41
写真.26 SC-07検出状況(北東から)	42
写真.27 SC-07完掘状況(南西から)	42
写真.28 SC-09検出状況(東から)	46
写真.29 SC-09完掘状況(東から)	46
写真.30 SC-12完掘状況(東から)	49
写真.31 SD-01-03検出状況(北東から)	54
写真.32 SK-10完掘状況(東から)	57
写真.33 SK-13土層断面(西から)	61
写真.34 SK-27出土遺物	65
写真.35 SK-265遺物出土状況(南から)	65
写真.36 SK-18完掘状況(南から)	66
写真.37 SX-26検出状況	66
写真.38 SP-214遺物出土状況(東から)	67
写真.39 Ⅲ層出土遺物	70

表 目 次

表.1 石手川扇状地上の遺跡の消長 … 12~13	表.11…9号竪穴式住居跡(SC-09)
表.2 榛味遺跡3次調査 主要遺構一覧 (折り込み)…16~17	出土遺物観察表……………47
表.3 2号竪穴式住居跡(SC-02) 出土遺物観察表(1)…23	表.12…12号竪穴式住居跡(SC-12) 出土遺物観察表……………50
表.4 2号竪穴式住居跡(SC-02) 出土遺物観察表(2)…25	表.13…19・20号掘立柱建物(SB-19・20) 出土遺物観察表……………52
表.5 2号竪穴式住居跡(SC-02) 出土遺物観察表(3)…27	表.14…1・3号溝(SD-01・03) 出土遺物観察表……………56
表.6 4号竪穴式住居跡(SC-04) 出土遺物観察表(1)…33	表.15…10号土塙(SX-10) 出土遺物観察表……………59
表.7 4号竪穴式住居跡(SC-04) 出土遺物観察表(2)…35	表.16 13・14・16・17・27号土塙、18号遺構 (SK-13・14・16・17・27、SX-18)出土 遺物観察表……………64
表.8 5号竪穴式住居跡(SC-05) 出土遺物観察表…40	表.17 柱穴・小穴出土遺物観察表 ………………69
表.9 6号竪穴式住居跡(SC-06) 出土遺物観察表…42	表.18 Ⅲ層出土遺物観察表……………71
表.10 7号竪穴式住居跡(SC-07) 出土遺物観察表…45	表.19 榛味遺跡3次調査柱穴・小穴 観察所見一覧表…76~79

卷頭図版目次

卷頭図版 1 愛媛大学榛味団地・北吉井団地 (1994年8月25日撮影、1/4,000、 松山市提供)	卷頭図版 3-1 榛味遺跡3次調査区完掘状況 (南から)
卷頭図版 2 愛媛大学榛味団地と3次調査地点 (1947年4月5日米極東空軍撮影、 約1/12,000、国土地理院提供)	2 調査区南壁土層 3 調査区西壁土層

付 図

付図1 榛味遺跡3次調査遺構配置図 (縮尺 1/50)

序　　説

1　調査にいたる経緯と調査組織・体制

愛媛大学埋蔵文化財調査室は、1987年4月に設置された愛媛大学埋蔵文化財調査委員会の指導に基づき設立され、大学構内の諸工事に際して発掘調査を実施している。

さて、農学部および農学部附属農業高等学校が所在する樽味団地構内では、1987年に愛媛大学大学院連合農学研究科の校舎新営工事に伴う樽味遺跡1次調査、1992年に農学部研究実験棟（農学部3号館）新営工事に伴う2次調査、団地周辺では松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センターにより1987年から試掘調査と本格調査が続き、弥生時代～古墳時代、中世の集落遺跡が断続的に當まれていることが確認され、遺跡の周知化が進んできた。

そうした中で、1992年7月、愛媛大学附属図書館農学部分館の増築計画が1993年度に実施計画されていることが埋蔵文化財調査室に提示された。既往の調査成果から、予定地には何らかの遺跡が分布していることが予想された。そこで、埋蔵文化財調査室は、1992年8月に事前試掘調査（調査番号：99203）を実施した。その結果、地表下1.35～1.5mで遺物を包含する黒褐色粘質土層があらわれ、下面で柱穴を確認した。試掘調査の成果を施設部に報告し、関係部局との協議を進め、建設に先立って工事予定地の全面を、樽味遺跡3次調査（調査番号：99304）として発掘することとなった。

発掘調査にかかる1993年度の埋蔵文化財調査委員会および調査体制は次のとおりである。

[調査委員会]

学長	福西 亮（委員長）
法文学部長	溝口焼一
教育学部長	河瀬計明
理学部長	山本哲朗
医学部長	鷲津 孝
工学部長	磯村滋宏
農学部長	立川 涼
教養部長	武田和昭
法文学部	下條信行（教授・人類考古学）
教養部	松原弘宣（教授・歴史学）
教育学部	川岡 勉（助教授・歴史学）
事務局長	森谷俊直
庶務部長	樋口史朗
経理部長	黄楊川英了
施設部長	須川公雄

[調査室長]

田崎博之（教養部・助教授・歴史学）

[専門委員]

松原弘宣
川岡勉
宮本一夫（法文学部・助教授・物質文化論）

[調査補助]

宮崎直栄・高原美保（施設部事務補佐員）

[調査事務]

渡辺弘志（施設部企画課企画課長）
兵頭幸男（施設部企画課企画課長）
梶谷志郎（施設部企画課企画課係）

2 調査・整理作業の経過

発掘調査は1993年8月23日から表土剥ぎを開始した。事前試掘調査の結果に基づき、遺物を包含する黒褐色土(後述のⅢ層、以下同じ)上面まで、表土層の造成土(Ⅰ層)、旧水田層である灰色土層(Ⅱ層)を重機を用いて掘削し、掘削土は搬出した。表土剥ぎ作業の途中で確認できた擾乱部分も、重機および人力で掘り下げた。

黒褐色土(Ⅲ層)上面で遺構検出を試みたが、旧水田層(Ⅱ層)と共に通する灰色土を埋土とする上壙や小穴を確認できたものの、他に明確な遺構は検出できなかった。そこで、黒褐色土層を人力で掘り下げ、下層のにぶい黄褐色土層(Ⅳ層)の上面で遺構を検出することとした。黒褐色土(Ⅲ層)中の遺物の取り上げや記録類の作成を行うために、農学部構内に設置された平面直角座標系基準点から調査区内に座標点を移動し、座標系に沿う5m方眼の調査区割りを設定した。

黒褐色土(Ⅲ層)を掘り下げると、にぶい黄褐色土層(Ⅳ層)を基盤として、古墳時代の竪穴式住居跡、溝、上壙、柱穴や小穴を確認することができた(写真.1・4)。この遺構検出状況を写真撮影するとともに、縮尺1/50の検出遺構の配置図を作成し、個別の遺構の調査を開始した。

調査も終盤にかかり、遺構の全体像が明確になった9月24日には、現地説明会を実施した。学内外から多くの見学者が訪れ(写真.2・3)、調査終了までの見学者は150名をこえる。10月6日には、すべての発掘作業を終了し、現場を撤収した。

発掘調査を終了後、1993年10月から遺物の洗浄と注記の整理作業を始めた。しかし、学内各所で実施される諸工事に伴う試掘調査や立会調

査、さらに1994年度から始まった工学部校舎Ⅰ期工事に伴う文京遺跡12次調査、地域共同研究センター建設に伴う文京遺跡13次調査によって、整理作業は寸断され、埋蔵文化財調査室の



写真.1 遺構検出の作業状況



写真.2 現地説明会(1)



写真.3 現地説明会(2)

体制が充実された1996年度になり、ようやく記録類の整理、遺物の実測・写真撮影を行うことができ、報告書刊行の準備にかかった。

1996年度における埋蔵文化財調査委員会および整理体制は次のとおりである。

[調査委員会]

学長 三木吉治（委員長）

法文学部長 溝口競一

教育学部長 向井康雄

理学部長 小松正幸

医学部長 植 三郎

工学部長 柳沼忠男

農学部長 西頭徳三

法文学部 下條信行（教授・先史考古学）
松原弘宣（教授・日本歴史交流論）

教育学部 川岡 勉（助教授・歴史学）

事務局長 小原孜郎（～1996年6月30日）

飛彈昌人（1996年7月1日～）

武智泰道

深谷英夫

施設部長 渡邊正雄（～1996年6月30日）

塙原克己（1996年7月1日～）

[調査室長] 下條信行

[調査員] 田崎博之（法文学部・助教授・埋蔵文化財論）

[専門委員] 松原弘宣、川岡勉、村上恭通（法文学部・助教授・物質文化論）

[整理補助] 宮崎直榮、橋本麻紀（施設部事務補佐員）

[事 務] 中岡一男（施設部企画課長）

兵頭幸男（施設部企画課企画係長）、城戸芳夫（施設部企画課企画係）



写真.4 遺構検出状況（Ⅲ層除去後、南から）



図.1 調査地点位置図（縮尺 1/2,500）

3 調査・整理の方法と遺物・記録類の保管

樽味遺跡3次調査では、以下の方法で、調査を進めながら、図面・写真などの記録を作成し、遺物の取り上げを行い、遺物・記録類の整理および保管を行っている。

①調査区割りの設定と呼称

農学部構内に設置されているNo 1とNo 2の2点の平面直角座標IV系基準点から、座標点を移動し、これを基準として座標系に沿った5m方眼の調査区割りを設定した(図.1・2)。各調査区割りには南東隅からA・B・C・・・・N・O・P区の呼称を与え、遺構の位置表示や、Ⅲ層の掘り下げに際する遺物の取り上げなどに利用している。

No 1 X = 92931.851
Y = -65209.582
H = 42.243

No 2 X = 92936.614

Y = -65083.907

H = 44.422

調査区内の座標点(K・L・O・P区の交点)

X = 92904

Y = -65334

H = 41.048

②遺構・遺物の登録番号と種別の表示

今次調査で確認した遺構は、表土層下の旧水田層(II層)と共通する灰色系の埋土をもつ土壙・小穴と、IV層上面で確認した黒褐色土を埋土にもつ竪穴式住居跡・溝・土壙・柱穴や小穴に大別できる。灰色系の埋土の遺構については301~378、黒褐色系の埋土の遺構の中で、竪穴式住居跡・掘立柱建物・土壙などの主要な遺構には1~27、柱穴および小穴には100~200台の通しの遺構番号を付した。

ただし、竪穴式住居跡や掘立柱建物は複数の土壙や柱穴から構成される。これらについても個々に遺構の登録番号を与えている。そのため、1軒の竪穴式住居跡が複数の登録番号をもつ遺構から構成されていることとなっている。遺構番号に加えて、遺構の種別を、

SB : 掘立柱建物

SC : 竪穴式住居跡

SD : 溝

SF : 炉跡・窓

SK : 土壙

SP : 柱穴・小穴

SX : その他

の略号を冠してあらわした。

今次調査で出土した遺物には、すべて1から



図.2 3次調査区割図(縮尺 1/300)

の通しの遺物登録番号を与えていた。遺物を包含する黒褐色土(Ⅲ層)の遺物は5m方眼の調査区割りごとに、遺構内の遺物については遺構単位、またはR-を冠した遺物番号を付して出土状況を遺物台帳に記入しながら取り上げた。

③調査記録類・遺物の整理と保管

発掘調査時の記録類には、遺構・土層の観察所見記録・実測図・写真がある。遺構の観察所見記録は、埋土の土質・色調やメモ類で、遺構台帳を作成し、個々の観察記録とした。調査区内のすべての遺構の全体図と、調査区壁の土層断面図は20分の1の縮尺で作成し、主要な遺構については20分の1、または10分の1の縮尺で個別図を作成した。これらの実測図には、0001から4桁の通し登録番号を付し、遺構実測図台帳に順次記録して整理・保管している。

個々の遺物には、樽味遺跡3次調査を表すEA-3と、出土遺構、遺物登録番号(Rを冠した5桁の番号)を注記して、遺物台帳に記録している。また、遺物は必要に応じて1分の1の実

測図を作図し、写真記録をとっている。遺物実測図には、001～の3桁の登録番号を与えて、順次、遺物台帳に記録した。また、遺物は、30リットル入りのコンテナ箱に収納している。コンテナ箱には、001～の3桁の登録番号を付して、遺物台帳に記入している。

調査および整理の際には、35mmモノクロ・カラースライド、6×7モノクロ・カラースライドによる写真記録をとっている。こうした写真類については、カットごとに検索用のカードを作成し、写真登録番号を与えて、台帳に記録している。各フィルムは、35mmモノクロに3桁+2桁(001-01～)、35mmカラースライドには3桁(001～)、6×7モノクロ・カラースライドには4桁(0001～)の通しの登録番号を付し、検索用カードと写真台帳に併記している。

以上の方法で記録類と遺物を整理・保管しているが、本書に掲載した遺物については、本文中の遺物観察一覧表に遺物登録番号・遺物実測図番号・コンテナ番号の項を設けて表記し、報告書から遺物の検索ができるようにしている。



写真.5 整理作業風景

(上段：遺物の復元、下段左：調査記録のパソコンへの入力、下段右：実測図の作成)

I 樽味遺跡の位置と環境

樽味遺跡の位置する道後平野は、四国山地北側の瀬戸内海に面した重信川や石手川などの大小の河川が形成する複合扇状地性の平野である。その中で、樽味遺跡の北を流れる石手川は、平野東北部の高縄山から西に流れ、平野を東西に横断する重信川と河口付近で合流する(図.3)。この石手川が形成した扇状地は、山麓部の正円寺・畠寺にかけての古期扇状地面、道後・中村・一番町に広がる新期扇状地面、そして石手川南岸東側の洪積世に段丘化した低位段丘面上に区分される⁽²¹⁾。こうした地形区分の中で、樽味遺跡は石手川南岸の新期扇状地面上に立地している(図.4)。

さて、現在、石手川扇状地の各所で行われている発掘調査で、いくつかの火山灰層が確認されている。その中で、約2.2~2.5万年前に降下した始良Tn火山灰(AT火山灰)が、樽味遺跡1次調査地点ではポケット状の窪みに堆積していた。また、樽味四反地遺跡1次調査地点では、火山灰層に角礫や砂粒が混合された2次堆積状態で検出されている⁽²²⁾。さらに、同じ新期扇状地面上の東本遺跡4次調査地点でも、下位から黄色細粒火山灰層、褐色火山灰層などで構成される成層したテフラ層が確認されている⁽²³⁾。こうした始良Tn火山灰層の堆積状況と、石手川が約2.0~1.8万年前まで扇状地北側の城北地区を通り堀江地区に流れていると推定されることにより、洪積世の最末期から完新世には、石手川の南岸は北岸と比べて相対的に安定した土地環境にあったと考えられている⁽²⁴⁾。

ここでは、上述の地形環境の中で営まれる遺跡の動態を、石手川北岸の愛媛大学城北団地の

文京遺跡に代表される道後城北遺跡群と、南岸の樽味遺跡などの遺跡群を対比させながら考えてみたい(図.5、表.1)。

まず、旧石器時代の遺物は、北岸の丘陵上では、祝谷アイリ遺跡近くの通称丸山遺跡で細石器・搔器などが13点、祝谷六丁場遺跡で石核が採集されている。南岸では、天山古墳群・東山古墳群でナイフ形石器・絆石山古墳で細石器、東本遺跡4次調査・北久米淨蓮寺遺跡3次調査・星岡登立遺跡2次調査・筋達遺跡F・H区でナイフ形石器・釜ノ口遺跡でナイフ形石器と有舌尖頭器が出土している。しかし、いずれも後世の遺構に混在した状態や表裏された遺物で、確実な遺構は確認されていない。

縄文時代草創期～中期の遺跡は、南岸の東本遺跡4次調査で鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah、約0.6万年前)の下位で早期の槍先形石器・石鏃・スクレイバー、北岸の文京遺跡4次調査で爪形文土器・船元I式土器と考えられる資料が出土しているが、遺跡数はごく少ない。ところが、後期～晩期になると、扇状地の各所で点々と遺跡が確認され始める。石手川南岸では、桑原田遺跡1次調査や三島神社古墳の客土中から後期土器が出土している。北岸では、文京遺跡11次調査で後期の炉跡、持田3丁目遺跡や道後今市遺跡10次調査では晩期の土壙、道後今市遺跡9次調査、道後櫛又遺跡2次調査、文京遺跡6・8次調査、松山北高等学校遺跡4次調査では東から西に向かって流れる旧河川が確認されている。また、土居の段遺跡、土居窯遺跡、文京遺跡9次調査、道後南海放送RNB遺跡、松山大学構内遺跡3次調査で黄褐色シルト層か



図.3 松山市周辺の主要遺跡分布図（国土地理院発行、1/50,000地形図「松山北部」「松山南部」「郡中」「三津浜」を利用して作成）

1. 櫛味遺跡
2. 湯築城
3. 文京遺跡
4. 祝谷六丁場遺跡
5. 祝谷アイリ遺跡
6. 若草町遺跡
7. 高月山古墳
8. 大淵遺跡
9. 船ヶ谷遺跡
10. 朝日谷古墳
11. 古照遺跡
12. 宮前川遺跡
13. 西古泉遺跡
14. 横田遺跡
15. 上三谷古墳群
16. 出作遺跡
17. 水満田遺跡
18. 积迦面山北遺跡
19. 大下田古墳群
20. 運動公園遺跡群
21. 来住庵寺跡
22. 福音小学校遺跡
23. 三島神社古墳
24. 経石山古墳

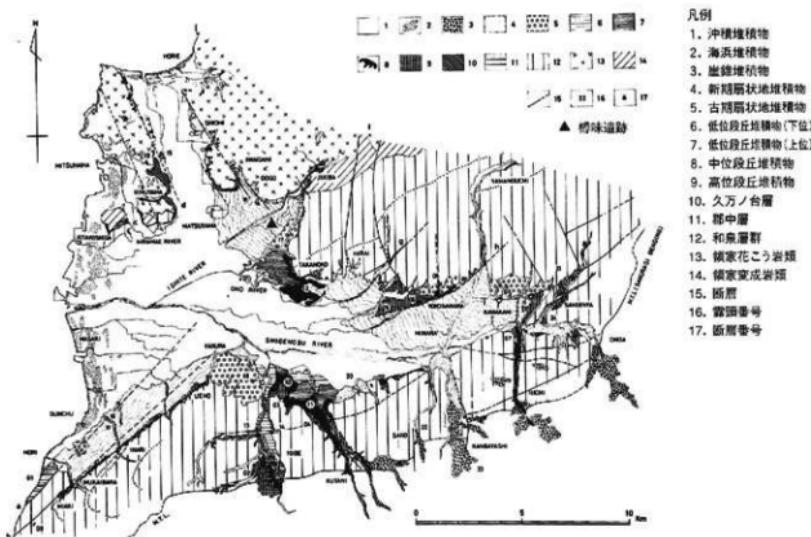


図.4 松山市周辺の地質（鹿島ほか1992に一部加筆）

ら後期の土器が出土している。

こうした点的に営まれる遺跡の様態は、弥生時代前期～中期中頃にも引き続きみられる。北岸の文京遺跡4次調査では前期の竪穴式住居跡、持田3丁目遺跡では前期の土壙墓と壺棺墓が縦列に配される墓地が知られている。しかし、中期後葉～後期になると、新期扇状地面や低位段丘面の各所に遺跡が営まれ始める。とくに、石手川北岸では、丘陵上の祝谷アリ遺跡、道後姫塚遺跡、道後湯築城跡で竪穴式住居跡、新期扇状地に営まれる文京遺跡や松山大学構内遺跡が分布する。とくに、文京遺跡では、竪穴式住居跡に加えて高床倉庫と考えられる掘立柱建物、炭化米を大量に出土した貯蔵穴などが密集して営まれる。さらに、3・7次調査地点では、柱間が2m近い梁間4間、桁行き4間以上の大規模掘立柱建物が複数確認されている。また、道

後公園山麓遺跡で3口、祝谷六丁場遺跡で1口、(伝)樋又銅劍出土地から8口、道後今市銅劍出土地からは10口の平形銅劍が集中して発見されている。文京遺跡10次調査でも中期末～後期前葉の包含層から船載の銅鏡片、周辺の調査地点から鋳造鉄斧が出土している。石手川北岸の道後城北遺跡群は、道後平野の中でも拠点的な集落遺跡といえる。

これに対して、石手川南岸の弥生時代中期後葉～後期の遺跡の様相は異なっている。樽味遺跡、樽味立派遺跡、桑原田中遺跡、東本遺跡、枝松遺跡、釜ノ口遺跡で竪穴式住居跡や土壙などが調査確認されているが、北岸の道後城北遺跡群と比べて、遺構の密度や出土遺物の量は少ない。これまでの調査成果と遺跡の分布から、1時期数棟の竪穴式住居跡群から構成される小規模な集落が数百m離れて点在する景観を想定

することができる。しかし、こうした散在的な集落が営まれる南岸地域でも、樽味立添遺跡では弥生～古墳時代の遺物包含層から貨泉が出土している。東本遺跡や釜ノ口遺跡では、弥生時代終末の竪穴式住居跡から、小型の内行花文鏡か方格規矩鏡と考えられる破鏡、鐵鑓・鐵刀子・鐵片が出土している。これらの遺物は、前述した道後城北遺跡群を介して入手されたと考えられる。

古墳時代にも、新期扇状地面上を中心として、集落遺跡が営まれる。古墳時代前期には遺跡の数は少ないが、中期～後期に増加する。石手川の北岸では、文京遺跡13・14次調査、松山大学構内遺跡3次調査、持田3丁目遺跡、祝谷アイリ遺跡で竪穴式住居跡や土壙が調査されている。とくに、文京遺跡14次調査では70棟以上の竪穴式住居跡が密集した状態で出土し、近接する13次調査地点からは鍛冶炉が発見されている。

石手川南岸では、新期扇状地北側の石手川沿いに集落遺跡が集合する傾向が読み取れる。樽味高木遺跡・樽味立添遺跡・樽味四反地遺跡では、中期～後期の竪穴式住居跡や掘立柱建物などが調査されており、今次調査で出土した竪穴式住居跡群も、こうした集落の一部である。

集落遺跡が新期扇状地面上に立地するのに対して、丘陵部や古期扇状地面上には中期～後期の古墳群が営まれる。南岸の場合、丘陵上で中期の桑原竹の谷古墳、中期～後期の東野お茶屋台古墳群など、南西に位置する独立丘陵の後期の天山・星岡・東山古墳が知られている。また、古期扇状地面上には、中期～後期の前方後円墳である経石山古墳や三島神社古墳が造られる。

古代の遺跡は調査例が少ない。北岸の中村松田遺跡と素鷲小学校遺跡で8世紀代の掘立柱建物、道後樋又遺跡2次調査で自然流路が、南岸

の北久米淨蓮寺遺跡3次調査で8世紀代の溝、樽味四反地遺跡1次調査で10世紀代の溝が調査され、石手寺近くの内代廃寺跡や湯の町廃寺跡からは白鳳期の瓦が出土している。

中世の遺跡としては、14世紀に道後平野を支配した河野氏が築いた湯築城跡が、北岸の独立丘陵周辺に位置している。湯築城跡では、二重に巡らされた堀、土塁、数棟の礎石建物など家臣団の居住区が確認されている。また、近接する道後市遺跡では掘立柱建物群が営まれるとともに、9次調査で10～14世紀代の水田跡が発見されている。岩崎遺跡でも11～15世紀の水田跡が調査され、湯築城跡を中心とする遺跡の動向が次第に明らかになりつつある。

南岸では、樽味遺跡1・2次調査で、14～16世紀の集落遺跡が確認されている。1次調査ではL字形の溝、2次調査では掘立柱建物群を溝や横列で囲む方形区画が調査されている。樽味遺跡は、石手川を挟み湯築城跡とは1kmほどの距離にあり、同時期に営まれた一般集落である。樽味遺跡の集落と湯築城跡周辺を対比させることで、道後平野における中世の地域像が浮かび上がってくるよう。

[註]

- 鹿島愛彦・高橋治郎 1980：四国松山平野の環境地質学的研究(1)、松山平野とその周辺の地質、愛媛大学教養部紀要、自然科学、9-1
- 平井幸弘 1989：麿子遺跡および樽味遺跡をとりまく地形環境、麿子・樽味遺跡、愛媛大学埋蔵文化財調査報告、I
- 古環境研究所 1996：火山灰分析、東本遺跡4次調査・枝松遺跡4次調査、松山市文化財調査報告書、54
- 平井幸弘 1991：石手川扇状地城北地区における沖積低地の地形発達と考古遺跡の立地環境、愛媛大学教育部紀要、9



図.5 松山市北東部周辺主要遺跡分布図（縮尺 1/25,000 国土地理院発行 1/25,000地形図を利用して作成）

表-1 石手川扇状地上の遺跡の消長

(実績は遺構が確認されている場合、感想は遺物のみの出土、遺跡名は、図-5の遺跡番号と対応。参考文献は13-14頁に掲載)

地図 No	遺跡名	時代	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	鎌倉	南北朝	室町	戦国	参考文献		
													23	11	
47	東野遺跡													4	4
	東野お茶屋古墳群1~5次													23	11
48	煩寺竹の谷古墳													11	11
49	櫛味立派遺跡													37	37
50	櫛味遺跡1~3次													4	4
51	櫛味高木遺跡1~3次													4-6	4-6
52	櫛味四反地遺跡1~4次													4-6	4-6
53	桑原小石原遺跡													55	55
	桑原西稻葉遺跡1~2次													43-53-60	43-53-60
石	桑原高井遺跡													43	43
54	枝松遺跡1~4次													14	14
55	枝松遺跡5次													4-6	4-6
56	桑原植葉遺跡													37	37
57	桑原田中遺跡1~2次													4-43	4-43
手	桑原本郷遺跡													52	52
60	絆石山古墳													43-55-60	43-55-60
61	三島神社古墳													11	11
62	東本遺跡1~4次													7	7
63	松末遺跡													39	39
64	福音小学校境内遺跡													34-38-42	34-38-42
川	北久米淨薙寺遺跡1~4次													38-56	38-56
	北久米常盤遺跡													10	10
66	星岡古墳群													27-32-40-41	27-32-40-41
67	東山古墳群													37	37
68	星岡登立遺跡													37-39-43-59	37-39-43-59
南	筋途遺跡C~E~J区													38-56-59	38-56-59
69	福音寺川付遺跡・筋途遺跡D区													56	56
70	天山古墳・天山北遺跡													30	30
71	土龜山弥生墳墓群													12-46	12-46
72	筋途A~B区													56	56
73	福音寺竹ノ下遺跡													37-39	37-39
74	西天山遺跡1~2次													41	41
75	桜田遺跡													39	39
76	拓南中学校遺跡・釜ノ口遺跡													37-38	37-38
77	中村桂田遺跡													46	46
78	七ノ坪遺跡													46	46
80	中村松田遺跡														
81	中村松田遺跡														
82	中村桂田遺跡・中村長正寺遺跡														
83	素麿小学校境内遺跡														
84	素麿寺社遺跡														
85	朝生田遺跡包含地														
86	西石井遺跡包含地														

[参考文献]

- 伊藤直子編 1995: 愛媛県立松山北高等学校遺跡埋蔵文化財調査報告書, 2. 埋蔵文化財発掘調査報告書, 55. 関愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 梅木謙一編 1991: 松山大学構内遺跡2次調査, 松山市文化財報告書, 20
- 梅木謙一編 1992a: 稲谷アイリ遺跡, 松山市文化財報告書, 25
- 梅木謙一編 1992b: 桑原地区的遺跡, 松山市文化財報告書, 26
- 梅木謙一・橋本雄一編 1994: 道後城遺跡群, II. 松山市文化財報告書, 37
- 梅木謙一・宮内慎一編 1994: 桑原地区的遺跡, II. 松山市文化財報告書, 46

7. 梅木謙一・武正良浩編 1995:福音小学校内遺跡―弥生時代。松山市文化財調査報告書, 50
8. 梅木寛・山本英二編 1989:祝谷大寺ヶ田・祝谷六丁場・丸山・長谷遺跡。一般県道「皆沢―松山線」埋蔵文化財報告書, I, 埋蔵文化財調査報告書, 33。伊愛媛県埋蔵文化財調査センター
9. 愛媛県教育委員会編 1981:愛媛県立松山北高等学校遺跡。愛媛県埋蔵文化財調査報告書
10. 愛媛県史編纂會編 1983:愛媛県史。原始・古代, I。
11. 愛媛県史編纂會編 1986:愛媛県史。資料編, 考古
12. 愛媛県埋蔵文化財包蔵地調査カード 1963年作成
13. 大山正風ほか1973:釜ノ口遺跡調査報告書。松山市文化財報告書, 5
14. 岡田敏彦編 1990:桑原植桑遺跡。埋蔵文化財調査報告書, 37。伊愛媛県埋蔵文化財調査センター
15. 岡田敏彦編・中島博文・小林一郎・谷若倫編 1985:道後今市遺跡。愛媛県教育委員会
16. 鹿島愛彦・高橋治郎 1980:四国松山平野の環境地質学的研究I)―松山平野とその周辺の地質。愛媛大学紀要・自然科学, IX-1
17. 川岡勉 1989:中世の道後平野と河野氏。愛媛大学埋蔵文化財調査報告, I
18. 斎田繁敏編 1992:文京遺跡―第2・3・5次調査。松山市文化財報告書, 28
19. 佐藤謙一・宮内慎一編 1992:道後城北遺跡群。松山市文化財報告書, 30
20. 斎田茂敏編 1993:影浦谷古墳。松山市文化財報告書, 33
21. 古代學協会四国支部 1988:松山道後城北の弥生遺跡をめぐって(シンポジウム資料)
22. 小林一郎・小原佐代子編 1990:丸山遺跡。一般県道「皆沢―松山線」埋蔵文化財調査報告, II, 埋蔵文化財発掘調査報告書, 34。伊愛媛県埋蔵文化財調査センター
23. 阪本安光編 1970:東野遺跡。埋蔵文化財調査報告書。愛媛県教育委員会
24. 阪本安光編 1992:道後姫坂遺跡。埋蔵文化財調査報告書。愛媛県教育委員会
25. 松重桂久 1992:石手川水系に於ける旧石器文化。桑原地区の遺跡。松山市文化財報告書, 26
26. 田崎博之編 1993:椿味遺跡II。愛媛大学埋蔵文化財調査報告書, IV
27. 田城武志・高尾と長嶺 1994:東山古墳群―第4・5次調査。松山市文化財報告書, 41
28. 多田仁・潤西一成・林奈美 1994:道後今市遺跡, X。埋蔵文化財調査報告書, 53。伊愛媛県埋蔵文化財調査センター
29. 中田歳男 1964:高磯山塊をめぐる河野氏の城砦。伊予史談, 171。伊予史談会
30. 長井数秋・大山正風ほか 1973:天山・桜谷古墳。松山市文化財報告書, 2
31. 名本二六雄 1967:愛媛県道後平野北部における弥生末期の様相。考古学研究, 15-1
32. 田迢昭三・西尾幸則・池田学編 1981:東山廬が森古墳調査報告書。松山市文化財報告書, 15
33. 西田栄 1957:道後土居宿弥生遺跡の発掘報告。伊予史談, 150。伊予史談会
34. 橋本雄一編 1994:北久米津遺跡・道跡。松山市文化財報告書, 42
35. 平井幸弘 1988:扇子遺跡および御嶽遺跡をとりく地形環境。愛媛大学埋蔵文化財調査報告, I
36. 平井幸弘 1991:石手川原状地域北地区における沖積低地の地形発達と考古遺跡の立地環境。愛媛大学教育学部紀要Ⅲ部, 9
37. 松山市教育委員会編 1987:松山市埋蔵文化財調査年報, I
38. 松山市教育委員会編 1988:松山市埋蔵文化財調査年報, II
39. 松山市教育委員会編 1991:松山市埋蔵文化財調査年報, III
40. 松山市教育委員会編 1992:松山市埋蔵文化財調査年報, IV
41. 松山市教育委員会編 1993:松山市埋蔵文化財調査年報, V
42. 松山市教育委員会編 1994:松山市埋蔵文化財調査年報, VI
43. 松山市教育委員会編 1995:松山市埋蔵文化財調査年報, VII
44. 松山市史料集編集委員会編 1987:松山市史料集, 第一巻, 考古編
45. 松山市史料集編集委員会編 1987:松山市史料集, 第二巻, 考古2, 古代~中世・近世・文化編
46. 松山市埋蔵文化財包蔵地図
47. 真鍋昭文編 1995:神津町3丁目遺跡。埋蔵文化財発掘調査報告書, 58。伊愛媛県埋蔵文化財調査センター
48. 宮崎泰好編 1991:祝谷六丁場遺跡。松山市文化財報告書, 24
49. 宮本一夫編 1989:扇子・御嶽遺跡。愛媛大学埋蔵文化財調査報告書, I
50. 宮本一夫編 1990:文京遺跡第8・9・11次調査。愛媛大学埋蔵文化財調査報告書, II
51. 宮本一夫編 1991:文京遺跡第10次調査。愛媛大学埋蔵文化財調査報告書, III
52. 森光晴・長井数秋ほか 1972:三島神社古墳。松山市文化財報告書, 1
53. 森光晴編 1975:埋蔵文化財発掘調査報告。松山市文化財報告書, 7
54. 森光晴・大山正風ほか 1976:文京遺跡。松山市文化財報告書, 11
55. 森光晴編 1980:浮穴・西石井覚堂室・東本II・III・桑原高井遺跡。松山市文化財報告書, 14
56. 森光晴編 1983:国道1号線ハイパーストア調査報告書。松山市文化財報告書, 17
57. 柴村啓二郎 1954:伊予考古遺物出土地名一覧―中予編。歴史学研究月報, 22・23。愛媛大学歴史学研究会
58. 宮内慎一編 1995:松山大学構内遺跡, II。松山市文化財調査報告書, 49
59. 梅木謙一編 1996:福音寺地区の遺跡。駒込C・D・F・G・H・I・川附。松山市文化財調査報告書, 52
60. 高尾と長嶺 1996:東本遺跡4次調査・枝松遺跡4次調査。松山市文化財調査報告書, 54

II 調査の概要

樽味遺跡3次調査の調査地点、調査面積、調査期間、整理期間はかは、以下のとおりである。

調査地点 松山市樽味3丁目5番7号
愛媛大学附属図書館農学部分館
増築予定地

調査面積	259m ²
試掘調査	1992年8月26日
調査期間	1993年8月23日～10月6日
調査番号	99304
整理期間	1993年10月～1994年3月
	1996年4年～1997年3月

1 基本層序

現在、樽味遺跡では、1987年の1次調査、1992年の2次調査、団地各所で実施されてきた営繕工事などに伴う試掘調査や立会調査の成果から、遺跡全体にわたる基本層序を上位からI～V層に大別している。同時に、調査地点ごとに、基本層序を構成する個々の土層群の細かな特徴や構成を記録している。各基本層序の特徴は以下のとおりである。

I層：表土層にあたる瓦礫を含む造成土。

II層：造成以前の灰色系の近世～近代の水田層。2次調査のII層と対応する。

III層：遺物を包含する黒色～黒褐色系の土層。2次調査のIV層と対応する。

IV層：黄褐色系のシルト層で、下部には疊が混じる。2次調査のV～IX層と対応。

V層：IV層下の花崗岩を主体とする砂礫ないし疊層。2次調査のX～XII層。

3次調査地点でも、上述の基本層序が確認されている。III層以下の土層群の特徴・構成は次のとおりである(巻頭図版3-2・3、付図1)。

遺物を包含するIV層は、黒褐色シルト層で、炭化物が多く含まれる。調査区の北側では層厚は薄く、南にいくにつれて次第に厚くなる。部

分的に少量の砂が混じる。古墳時代の遺構はIII層を掘り下げてIV層上面で確認した。

IV層は、暗褐色～黄褐色系の砂質シルト層群(IV-1～IV-8層)、にぶい黄褐色砂質シルト層(IV-9層)、黄褐色粘質シルト層群(IV-10・IV-11層)に区分できる。IV-1層の上部は粘性が強く、縮まっている。下部も縮まりがよい方であるが砂質が強くなる。基本的には、暗褐色シルト層であるが、上部にはIII層がしみ込み、やや茶色味を帯びる。下層のIV-2層へ漸移的に変化する。黒褐色シルトを含むIV-1層が部分的に見られる。IV-2層は、IV-1層と比べて砂質がより強い。上部の褐色から下部のにぶい黄褐色へ変化する。IV-3～IV-8層はIV-2層と土質は共通し、IV-8層が暗オリーブ褐色である以外、褐色なし暗褐色で黒褐色土や暗褐色土の塊が混じる。IV-9層は、にぶい黄褐色なし黄褐色の砂質シルトで、バサバサした質感をもつ。IV-10・IV-11層は、黄褐色粘質シルト層で、IV-11層は全体に暗色に変化し、粘性が強まる。

V層は調査区南壁の東側部分でみられる。掘り挙大の花崗岩の円疊が主体で、黄褐色粗砂が混じり、かなり縮まった疊層である。

2 遺構と遺物

今次調査で出土した遺構は、Ⅲ層の上面で確認した灰色系の埋土をもつ土壙・小穴(写真. 6・7)と、Ⅳ層上面で検出した黒褐色～暗褐色の埋土の竪穴式住居跡・掘立柱建物・溝・土壙・小穴に大別できる。前者からの出土遺物は、砥部焼きの碗・皿類や近代の瓦などがあり、近世～近代の遺構である。後者の遺構には、基本的には古墳時代5～6世紀の土器が伴っている。当該期の遺構と考えられる(図. 6)。この他、Ⅲ層からは、弥生時代前期・後期の土器や石廐丁、5～8世紀代の須恵器・土師器、中世の土師器が出土したが、5～6世紀の遺物がもっとも多い。

今次調査では、すべての遺構に遺構番号を与えており、たとえば、竪穴式住居跡を構成する土壙・竈・柱穴にも、それぞれ遺構番号を付している。これを整理すると、主要な遺構は以下のようになる(表. 2)。柱穴および小穴については、巻末の表. 20を参照されたい。

竪穴式住居跡 7棟

(SC-02・04・05・06・07・09・12)

掘立柱建物 2棟

(SB-19・20)

溝 1条

(SD-01・03)

土壙 7基

(SK-08・13・14・16・17・21・27)

その他の遺構

SX-15：風倒木痕

SX-18：自然の窪みか？

SP-213・214・257・273：立柱痕跡などを
もつ柱穴

SP-101～273：柱穴および小穴

これらの遺構は、古墳時代の遺構であるが、調査区壁でⅢ層の中位もしくは下位から掘り込まれていることが観察できた。Ⅲ層は黒褐色シルト層で、東へ100mほど離れた樽味遺跡2次調査地点でも共通した土層が堆積している。2次調査中、Ⅲ層に鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah、約0.6万年前)が含まれているのではとの指摘をうけた。そうなると、Ⅲ層と遺構との関係や、鬼界アカホヤ火山灰が降下した以降から弥生・古墳時代までの土地環境を考える上で、その堆積時期と原因が問題となってくる。そこで、土壤学的な分析を、愛媛大学農学部の吉永長則教授にお願いした。

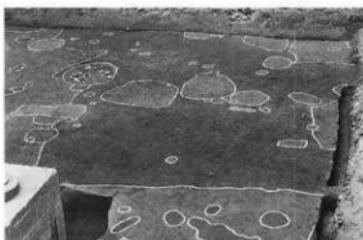


写真. 6 灰色系の埋土をもつ土壙・小穴の検出状況



写真. 7 SK-326検出状況

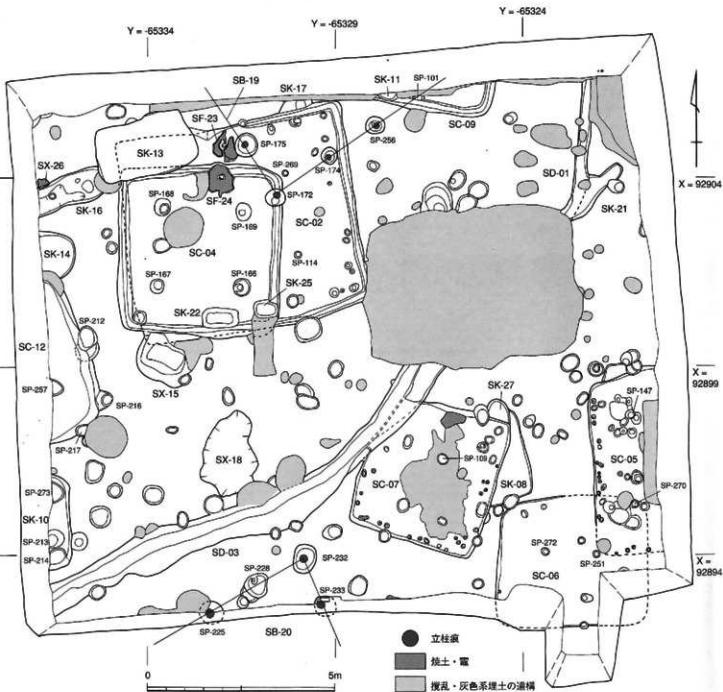


図.6 主要遺構配置図 (縮尺 1/100)

表.2 梅味遺跡 3次調査 主要遺構一覧

遺構	調査区割	切り合い関係・他の遺構との関係
SD 01	I・M	SD-03と同一の溝。SK-21を切る。
SC 02	J・K・N・O	SC-04、SK-13を切る。SK-25、主柱穴としてSP-114・269、支柱穴としてSP-117・156・158・162・170が伴う。北壁沿いに竈(SF-23)が付設される。
SD 03	C・D・F・G・H	SD-01と同一の溝。SC-07を切る。
SC 04	K・L・O・P	SC-02に切られ、SK-13を切る。SK-22、柱穴としてSP-166・167・168・169が伴う。北壁沿いに竈(SF-24)が付設される。
SC 05	E	SP-147・270を柱穴とし、SP-120・122～137・144・165・271が周溝杭痕跡として伴う。
SC 06	A・B・E・F	SP-251・272を柱穴とする。貼り床を確認。
SC 07	B・F	SD-03に切られる。SK-08・27を切る。SP-109が主柱穴? 周壁沿いに杭痕跡と考えられる小穴が伴う。
SK 08	E・F	SC-07・SK-27に切られる。
SC 09	N	SK-11が伴う。
SK 10	D・H	SP-213・214・273に切られる。
SK 11	N	SC-09に伴う。出入り口部分か?
SC 12	H・L	SP-212・216・217・257に切られる。貼り床を確認。
SK 13	L・O・P	SC-02・04に切られる。
SK 14	L	円形の小型の土壤。
SX 15	G・H・K・L	風倒木痕跡。
SK 16	L・P	SK-13との切り合い関係は不明。
SK 17	O	SC-02に切られる。
SX 18	G	底面は凸凹にとむ不整形の浅い遺構で、自然の塗み?
SB 19	K・N・O	SP-101・172・174・175・256で構成。SP-172はSC-04を切る。
SB 20	C・G	SP-225・228・232・233から構成される。
SK 21	I・M	SD-01に切られる。
SK 22	K	SC-04に伴う。竈対置の土壤。出入り口部分か?
SF 23	O	SC-02に伴う竈。
SF 24	K・O	SC-04に伴う竈。
SK 25	K	SC-02に伴う。竈対置の土壤。出入り口部分か?
SX 26	L	SK-16の北側肩部で確認した焼土部分。
SK 27	F	SC-07に切られる。SK-08を切る小型の土壤。

III 遺構・遺物の調査記録

1 竪穴式住居跡（遺構略号 SC）

2号竪穴式住居跡 SC-02

(図.7~13、写真.8~13、表.3~5)

調査区北西部のJ・K・N・O区にかけて位置する。西側に営まれたSC-04や北側のSK-13との切り合い関係は、遺構検出時には、埋土の質がほとんど変わらないため把握できず、土層断面でSC-02がSC-04とSK-13を切ることをようやく確認できた。そのため、SC-02西半部分の壁と周溝は土層断面で確認したにすぎない。

住居の平面形は、南側がやや膨らんだ長方形で南北の主軸長5.55m、東西幅6.05mを測る。

主柱を構成する柱穴は、位置的にはSP-269とSP-114が4本柱配置の東側2本にあたる可能性が強い。ともに、黒色粘質シルトに暗褐色粘質シルトの小指先大の丸い塊が少量混じり、粒状の炭化物をごく少量含む。しかし、直径はSP-269が15cm、SP-114が18cmで、主柱穴としては小さく、床面からの深さもそれぞれ6cmと49cmと不揃いである。

ただし、壁際に、直径13~20cmのSP-156・158・162・117・170の小穴が、約1.5mの間隔で並ぶ。いずれも黒褐色粘質シルトに明褐色・暗褐色・褐色の粘質シルトの小さな塊が混じる共通した埋土をもつ。これらを壁際の支柱穴と考えれば、SP-269とSP-114が小さくても主柱穴と考えてよさそうである。ここでは、SP-269とSP-114を主柱穴として壁際に支柱を建てた構造を想定しておきたい。

また、壁際に幅10~14cmの周壁溝がめぐる。

SC-04の土層断面の西端で周壁溝にたてられた壁板痕跡が確認できた（図.16）。溝底部分で板の厚さは4cm前後を測る。

住居北側の壁際で造り付けの竈であるSF-23を検出した。竈上部の残存状況はよくなかったが、床面をわずかに堀り窪め「支石」を立て、前面（南側）に浅い舟底状の窪みを設けて焚き口とする構造を確認できた。また、SF-23の横断面をみると、床面から盛り上がるように基盤層のⅣ層を削り出して、上部に竈の壁体を築いている。住居を造る当初から竈の位置が決められていたことを示している。

竈（SF-23）に対応する南側の壁際でSK-25を確認した。SC-04の床面で確認したために、上半部分は失われている。壁近くに幅20cm前後の黒褐色粘質シルトの図.9-①層部分があり、この部分を押さえ込むように褐色粘質シルトの丸い塊や構状が混じる黒褐色粘質シルトの図.9-②~⑦層がみられ、住居の出入口の梯子を設置した土壤と考えた。

出土遺物は、図.11~13-22・23・35・38・41・49が、住居北東部で埋土上部から集中して出土した。6・8・13・21・24・29・48は、造り付け竈であるSF-23直上から出土した。8・24は住居南東部から出土した破片と接合。7・8・10は、SP-170の上面で押しつぶされた状態でかたまって出土している。28・30・37は周壁溝上に落ち込んだ状況で出土。2・4・8・9・10・17・24・28・32・33・34・36・40・45・50



図.7 SC-02実測図（縮尺 1/50）

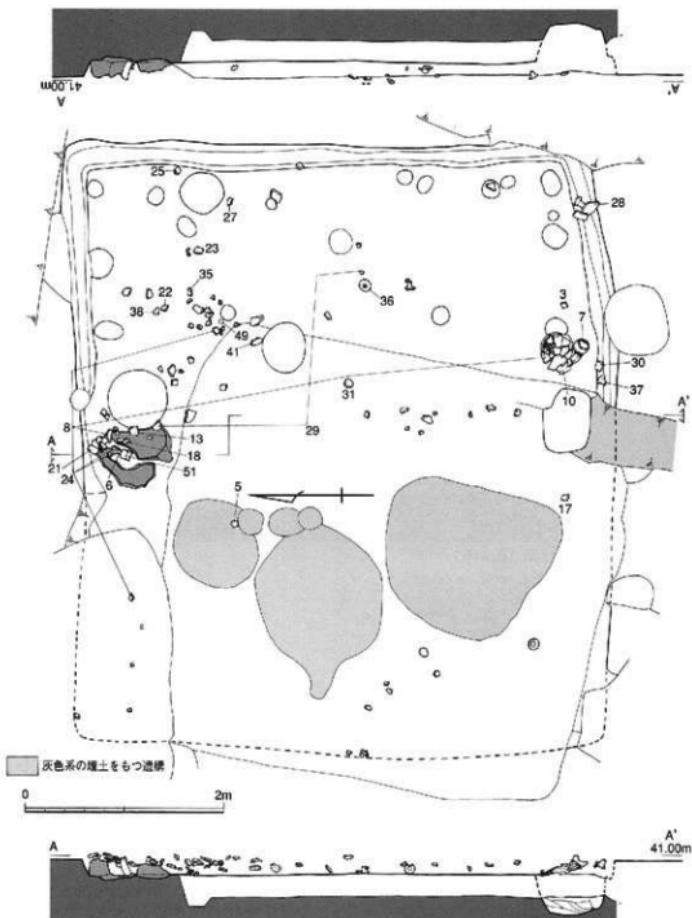


図8 SC-02遺物出土状況(縮尺 1/50)

は埋土下部～床面直上、他は埋土上部から散漫に散らばった状態で出土した。また、28はSP-117出土の破片と接合した。細片のために図示できなかったが、SP-158・170からも土師器の細片が数点出土している。

これらの中では、竈(SF-23)直上の6・8・13・21・24・29・48や、SP-170上部の7・8・10・周壁溝上の28は、出土状況から住居が廃絶した直後の時期を示す遺物で、古墳時代5世紀後葉～6世紀初頭に比定できる。他の遺物は、その後の流



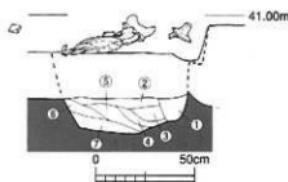
写真.8 SC-02・04完掘状況（西から）



写真.9 SC-02北東部遺物出土状況（南から）

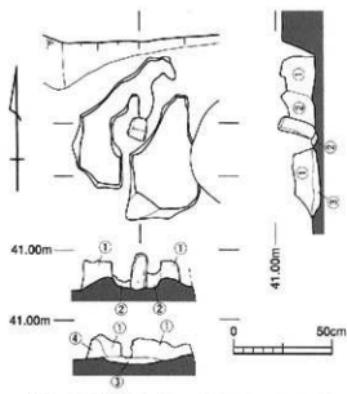


写真.10 SC-02南東部遺物出土状況（西から）



- ① 黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルト。黄褐色(10YR5/6)粘質シルトのレンズ状ブロックがごく少量混じる。土質は軟質。
- ② 黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルト。褐色(10YR4/4)粘質シルトの粒状の塊がまばらに混じる。炭化物塊・土器片をごく少含む。
- ③ 黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルトで、褐色(10YR4/6)粘質シルトと褐色(10YR4/4)シルトが織状に互層で混じる。
- ④ 黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルト。褐色(10YR4/4)粘質シルトの塊が少量混じる。
- ⑤ 黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルト。褐色(10YR4/4)シルトのレンズ状の塊。褐色(7.5YR4/4)粘質シルトの小椎先大の丸い塊が少量混じる。
- ⑥ 褐色(10YR4/6)粘質シルト。黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルトの厚さ1cmほどのレンズ状ブロックが少量混じる。
- ⑦ 黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルト。褐色(7.5YR4/4)粘質シルトの厚さ1cmのレンズ状ブロックがごく少量混じる。炭化物を少量含む。

図.9 SC-02内 SK-25土層断面図（縮尺 1/25）



- ①焼土・炭化物を多量に含み、土質はしまっている。壁体部分。土礫片を含む。
 ②焼土ブロックを含む。①と比べて、土質は軟らかく、炭化物が目立つて多い。
 ③焼土層。
 ④基礎の暗黄褐色砂質土であるが、土質はしまり、少量の炭化物を含む。

図.10 SC-02内 SF-23（電）実測図（縮尺 1/25）



写真.11 SC-02 内 SF-23（電）検出状況（南から）



写真.12 SC-02 内 SF-23（電）土層断面（南から）

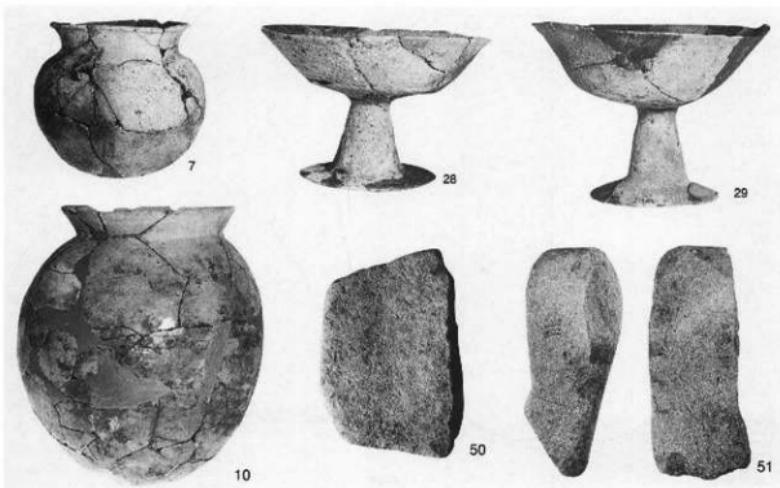


写真.13 SC-02 出土遺物

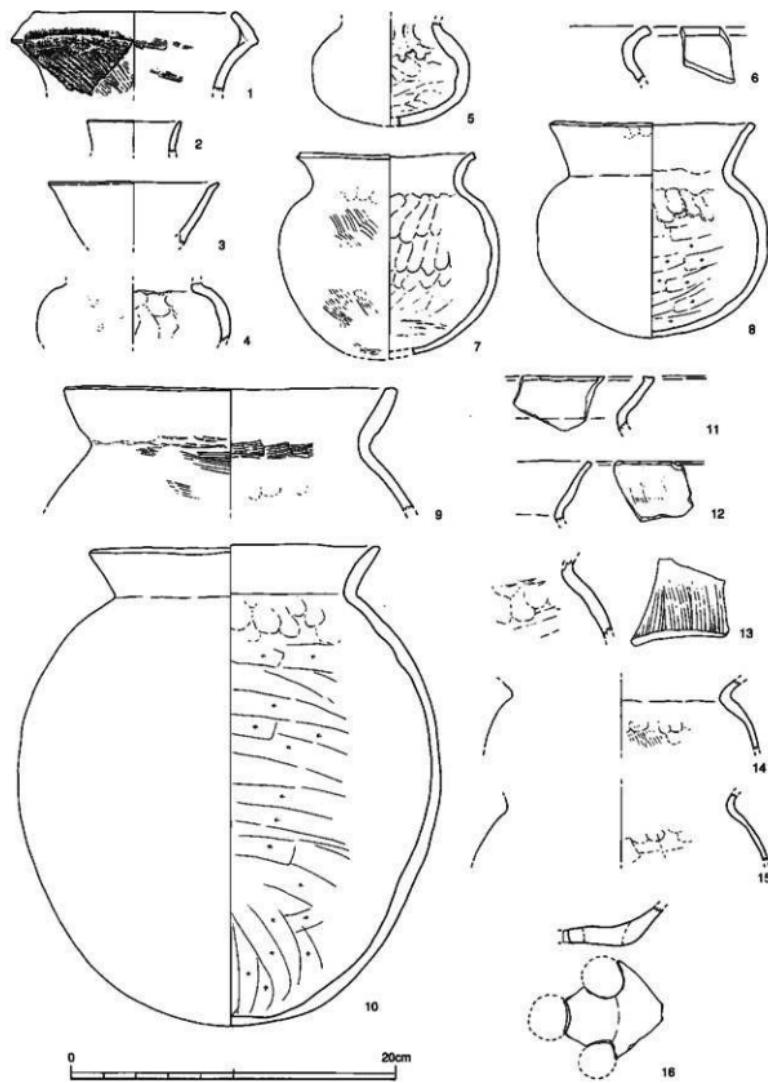


図.11 SC-02出土遺物実測図1 (縮尺 1/3)

表.3 2号壁穴式住居跡 (SC-02) 出土遺物観察表 (1)

排図No	出土 遺 物 の 種 別 ・ 器 種 ・ 特 徴			遺 物 登 番	遺 物 実 測 番 号	収納 コンテ ナ番号
	種 別	器 種	形 状 ・ 器 面 調 整 ・ 胎 土 な ど の 特 徴			
図.11-1	弥生土器	壺	複合口縁壺。頸外面は乱雑なハケメの後にタタキ。内面はハケメの後に横ナデ。弥生土器、混入品。	329	6	3
2	土師器	壺	内外面とも横ナデ。胎土は砂粒をほとんど含まない精製粘土。	1144	12	5-62
3	土師器	壺	口縁端部がわざかに反る。外面は縱方向の丁寧なナデ。内面は横ナデ。精製粘土を用いる。	150	39	2-61
4	土師器	壺	外面はハケメの後に横ナデ。肩部内面には指頭痕跡が残る。胎土には砂粒をほとんど含まない。	17	6	1-56
5	土師器	壺	外面は丁寧なナデ。内面は指頭によるナデ。胎土には微細砂粒しか含まない精製粘土が用いられている。	64	6	1
6	土師器	壺	外面は丁寧なナデ。内面は指頭によるナデ。胎土には微細砂粒が多いが、精製されている。	281	6	3
7	土師器	壺	短頸壺。口縁端面がわざかに反る。外面はハケメの後に下半を中心としてナデ。内面は強い指頭によるナデ。内底にはヘラ状工具痕が残る。	146-240-323-500-	2	59
8	土師器	壺	短頸壺。口縁部は横ナデ。内面は肩部に指頭圧痕。胴部はケズリ。外面は2次的な火熱で荒れが著しく、全体に赤変している。胎土には細砂粒が多く含まれる。	16-101-190-206-323-337-	2	59
			器体の歪みが著しく、反転して固化した。	386		
9	土師器	甕	外面はハケメ、頭の付け根にはハケメ工具の小口痕、内面にはナデ、肩部には部分的に指頭痕が残る。	90-92-293	4	58
10	土師器	甕	口縁部は横ナデ。胴部外面はナデ。内面はケズリ、下半は乱雑だが、上半はケズリ方向を変え比較的丁寧に施す。肩部に指頭痕。胴部外面には煤付着。下半部に不整な楕円形の黒変部。	17-147-278-942	7	56
11	土師器	甕	口縁端部が内面に小さく突起。内外面ともに横ナデ。	18	5	2
12	土師器	甕	外面はハケメの後に横ナデ。内面は横ナデ。全体に薄いつくり。	214	3	56
13	土師器	甕	外面はハケメの後にかるくナデ。内面は頭の屈曲部にヘラ状工具痕、肩部には指頭押えの後にケズリ。	94	3	2
14	土師器	甕	内面は肩部に指頭痕が集中、ハケメの後にナデ。外表面はナデ。	284	5	2
15	土師器	甕	内面は肩部には指頭圧痕が集中、ケズリ? 他は器面の荒れが著しく、調整の子細不明。全体に薄いつくり。	18	5	2
16	土師器	瓶	焼成前に、底部に直径2.5cm前後の円孔をヘラ状工具で穿孔し、周囲を指頭でナデ。	246	3	56
図.12-17	土師器	高坏	内外面とも横ナデ。胎土には精製粘土を用いる。脚部との接合面で割れている。	22-45	39	5-61-62
18	土師器	高坏	内外面とも荒れが著しく調整の子細不明。ナデか? 胎土には微細砂粒を小量含むのみ。	108	3	56
19	土師器	高坏	壠部中位の段部は突起状。内外面とも横ナデ。胎土には石英の粗・粗粒を多く含む。	20	4	58-59
20	土師器	高坏	内外面とも荒れが著しく調整の子細不明。胎土には石英の細砂粒が多い。推定口径は15~17cm。	20	4	58-59
21	土師器	高坏	内外面とも荒れが著しく、調整の子細不明。胎土には石英の粗・粗粒を多く含む。	98-226	4	58
22	土師器	高坏	口縁部周辺に横ナデの痕跡が残るが、全体に器面が荒れ、調整の子細は不明。胎土には砂粒をほとんど含まない。	53	8	60
23	土師器	高坏	壠部内面に部分的に横方向のミガキ痕跡が残る。胎土には砂粒をほとんど含まない。	54	8	60

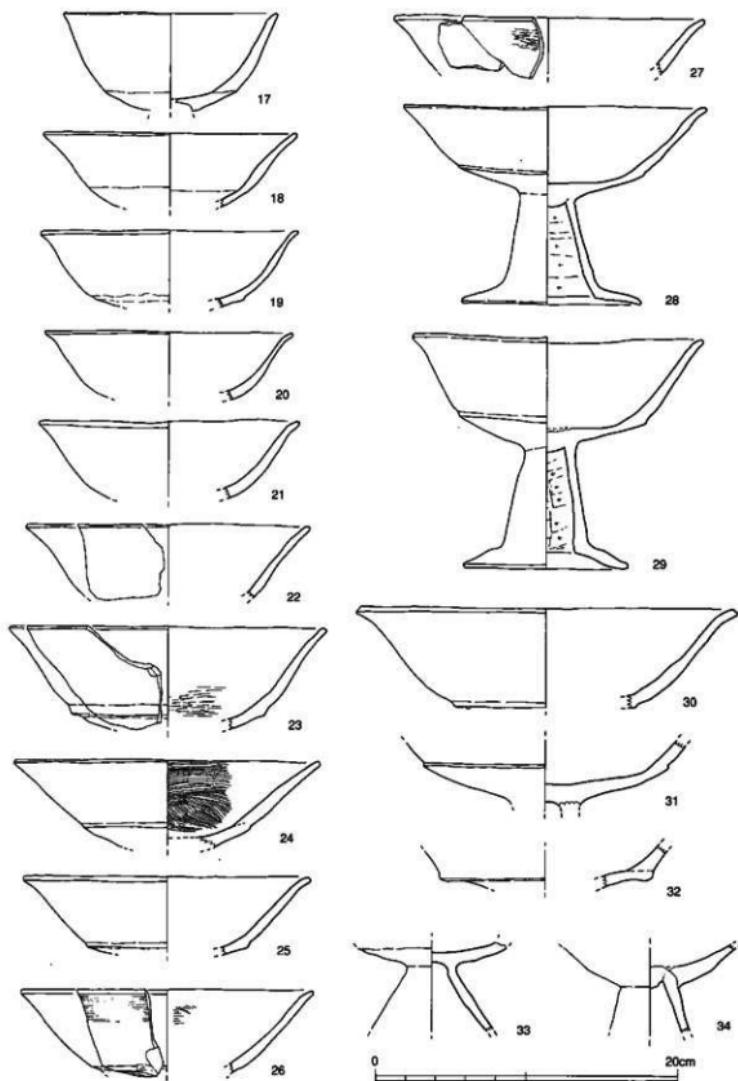


図.12 SC-02出土遺物実測図 2 (縮尺 1/3)

表.4 2号竪穴式住居跡 (SC-02) 出土遺物観察表 (2)

検査No.	出土遺物の種別・器種・特徴			遺物登録番号	遺物実測番号	収納番号
	種別	器種	形状・器面調整・胎土などの特徴			
圆.12-24	土師器	高坏	外面は横ナデ。内面はハケメの後にかるくナデ。胎土には石英の細粒が多く混じる。	85-99-100-102-225-268	7	1-60
25	土師器	高坏	坏部中位の段は突起。内外面ともに横ナデ。胎土には石英の粗・細粒を多く含む。	79	7	60
26	土師器	高坏	坏部中位の段は横ナデで強調。細密条線が残る。内面にはハケメが部分的に残るが、子細不明。	212	8	60
27	土師器	高坏	外面には部分的に横方向のミガキ痕跡が残る。内面には横ナデ。口径はやや不確実。	78	8	60
28	土師器	高坏	器面の荒れが進み、脚部施部の横ナデ、脚柱内面のケズリ以外は、調整の子細不明。	20-151-343-1214	2	4-58-59
29	土師器	高坏	外面は横ナデ。脚柱内面にはケズリ。坏部内底中央の器面が剥離。胎土には微細・細砂粒を多く含む。	67-93-220-324-326-373	2	6-59
30	土師器	高坏	口縁端面はわずかに窪む。内外面ともに横ナデ。胎土には微細砂粒が少量混じるのみ。	148	9	60
31	土師器	高坏	外面は横ナデ。内面はナデ。胎土には砂粒をほとんど含まない。	68	9	60
32	土師器	高坏	外面は横ナデ。胎土には砂粒を含まない精製粘土を利用。	22	36	5-61-62
33	土師器	高坏	脚部がラッパ状に開く。外面と坏部内面はナデ。脚内面にはケズリの後にナデ。胎土には石英の微細粒が多い。	262-294	3	3-59
34	土師器	高坏	内外面ともにナデ。胎土は砂粒がほとんど混じらない精製粘土を用いる。	332-1055	3	56
圆.13-35	土師器	高坏	脚部。坏部との接合部分で割れている。内外面とも器面が荒れ調整の子細不明。胎土には砂粒をほとんど含まない。	56	9	60
36	土師器	高坏	脚部。内外面とも2次的な火熱を受けて、器面の荒れが進み調整の子細不明。内面のケズリが観察できる程度。	143	8	60
37	土師器	高坏	脚部。外面および瓶内面は横ナデ、脚柱内面はケズリ。胎土には微細砂粒を少量含むのみ。	20-149	8	58-60
38	土師器	高坏	脚部。瓶の先端は丸く尖り氣味におさめる。外面および瓶内面は横ナデ、脚柱内面はケズリ、胎土に石英の細砂粒を多く含む。	52	4	58
39	土師器	高坏	脚部。外面および瓶内面は横ナデ、脚柱内面はケズリ。胎土には石英の粗・細粒を多く含む。	244	8	60
40	土師器	高坏	脚部。外面には縦方向の丁寧なナデ、内面は横方向のナデ。胎土には精製粘土を用いる。	325	47	3
41	土師器	高坏	大型品。脚部、外面および瓶内面は横ナデ、脚柱内面はケズリ。瓶近くに円孔を焼成前に穿孔。胎土に砂粒をほとんど含まない。	48-1137	9	5-60
42	須恵器	蓋	口縁先端は横ナデで丸くおさめる。胎土には石英の細粒を多く含む。	346	6	3
43	須恵器	甌	内外面とも横ナデ。口縁外面上には凹線を2条巡らす。胎土には砂粒をほとんど含まない精製粘土を用いる。	249	5	2
44	須恵器	坏身	受け部の細片。口縁先端を欠損。内外面とも横ナデ。胎土には石英の微細砂粒を少量含むのみ。	249	5	2
45	須恵器	坏身	受け部の細片。内外面とも横ナデ。胎土には石英の微細砂粒を少量含むだけの精製粘土を用いる。	21	42	61

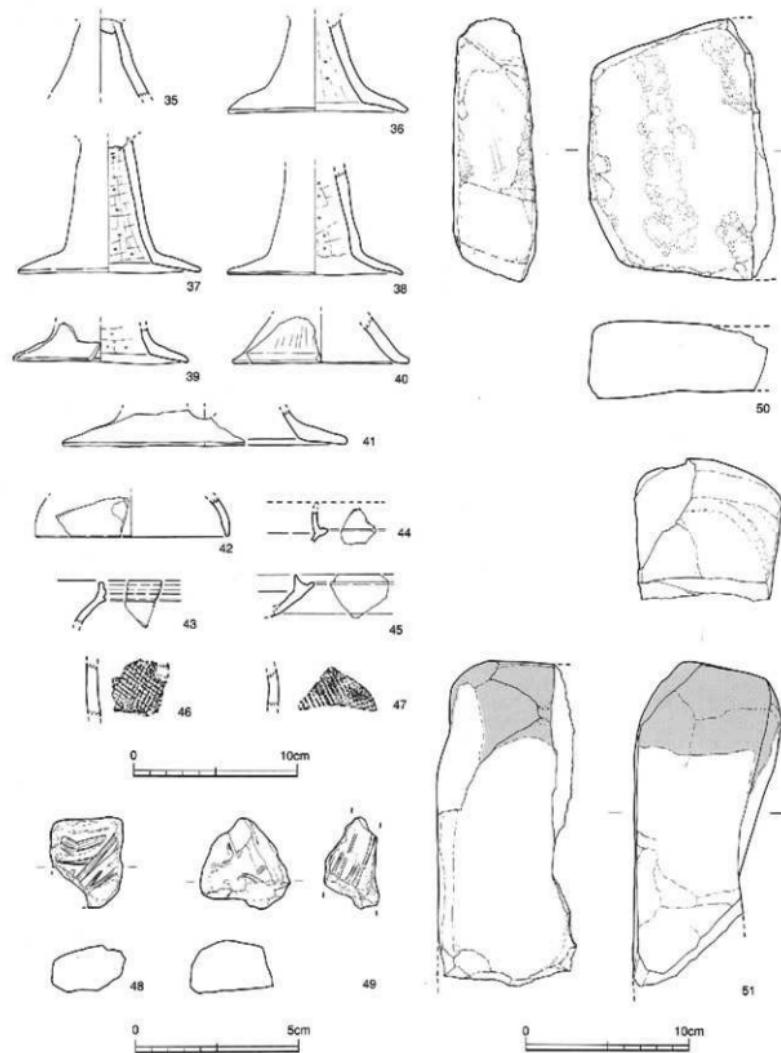


図.13 SC-02出土遺物実測図3 (縮尺 1/3・2/3)

表.5 2号竪穴式住居跡 (SC-02) 出土遺物観察表 (3)

挿図No	出土遺物の種別・器種・特徴			遺物登番号	遺物実測番号	収納コンテナ番号
	種別	器種	形状・器面調整・胎土などの特徴			
図13-46 47 48 49 50 51	須恵器 須恵器 焼成粘土塊 焼成粘土塊 石製品 石製品	壺あるいは壺 壺あるいは壺 壺壁体 壺壁体 砥石 支石	腹部の小破片のために、傾き、上下不明。外面には目の細かい斜格子のタタキ、内面はナデ。石英の細砂粒を多く含む。 腹部の小破片のため傾き、上下不明。外面には下地に幅広の平行タタキの後に、さらに目の詰まったタタキを再度施す。 小片であるが、厚さ1.5cmの壺状をなす焼成粘土塊。上面と側面にスサと考えられる輕2~2.5mmの草本類の圧痕が残る。 小片であるが、壺状をなす焼成粘土塊。上面にスサと考えられる幅1.5mm前後の草本類の圧痕が残る。砂粒は含まない。 側面を砥石面に利用。上面には敲打痕跡が帯状に残る。砂岩。 砂岩製の荒砥石を打ち欠いて、竈の支石に再利用。上半は2次的な強い火熱を受け赤変。	241 15 269 84 353 354	5 6 7 6 39 34	2 1 3 1 51-63 51-63

れ込みや、SC-04との重複部分で確認できなかつた小穴などに伴うものと考える。

48・49は、焼成粘土塊の小片である。表面だけではなく、内部にも草本類を混入している。48は竈(SF-23)の上面から焼土や灰層と伴に出土している。竈の壁体の一部と考える。他の出土遺物の観察所見については、表.3~5の遺物観察表を参照されたい。

4号竪穴式住居跡 SC-04

(図.14~21、写真.14~21、表.6・7)

調査区の北西部K・L・O・P区に位置する。SC-02・SP-172に切られている。SK-13との切り合い関係は、土層断面でSK-13を切っていることを確認した。

南北長軸長4.35m、東西短軸幅4.17mの竪穴式住居跡で、主柱穴のSP-166・167・168・169、造り付けの竈であるSF-24、竈に対置する位置の土壙SK-22から構成される。

SP-166・167・168・169を主柱穴とする四本柱構造である。SP-169では直径10cmほどの柱痕

跡を検出した。SP-166・167・168では、柱は抜き取られ、柱の大きさは不明である。SP-167の埋土上部は、褐色シルトがレンズ状に混じる黒褐色粘質シルトで、下部は暗褐色粘質シルトである。幾本かの樹根が入り込む。また、SP-168とSP-166の埋土は黒褐色粘質シルトである。SP-168の上部では褐色ないし暗褐色粘質シルトが混じり、下部では薄いレンズ状になる。SP-166では、上部に黄褐色シルト、下部には褐色シルトがレンズ状の塊で混じる。

壁際には、幅10~14cmの周壁溝がめぐる。東西土層断面で、厚さ2cmほどの周壁板の痕跡を確認できた。土層断面の西端では、壁板は周溝の肩に立て、裏込めを施し、内側の床面から褐色土の塊を多く含む黒褐色土で締め固めて固定している。東側では、周壁に沿って壁板を置き、住居内側から土をかぶせて周壁溝を埋めて固定している。

北壁際の中央よりやや東に偏って、竈であるSF-24が造り付けられている。遺存状態は悪いが、床面を掘り窪めて、U字形に黄褐色の砂質

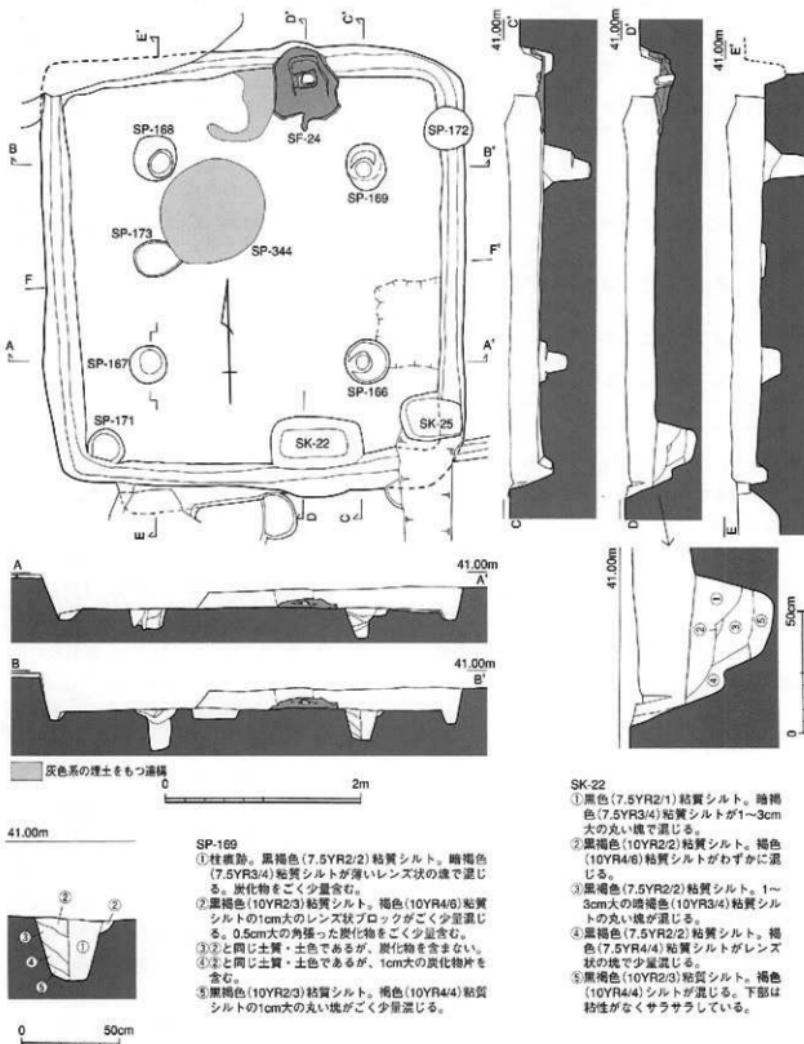


図.14 SC-04実測図 (縮尺 1/25・1/50)

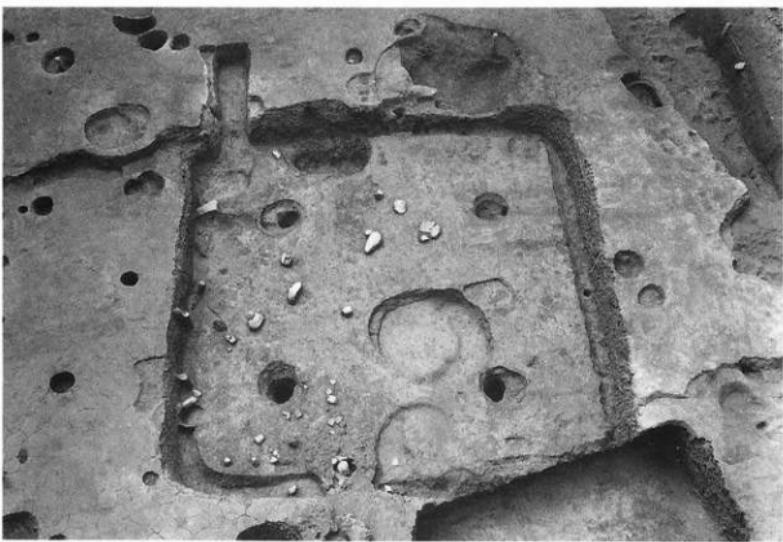


写真.14 SC-04 完掘状況1（北から）



写真.15 SC-04 完掘状況2（南から）

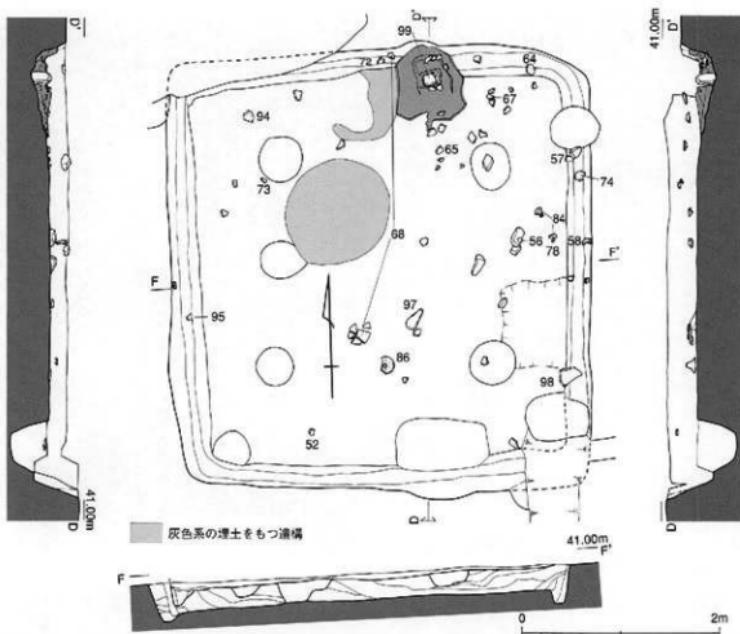


図.15 SC-04遺物出土状況（縮尺 1/50）



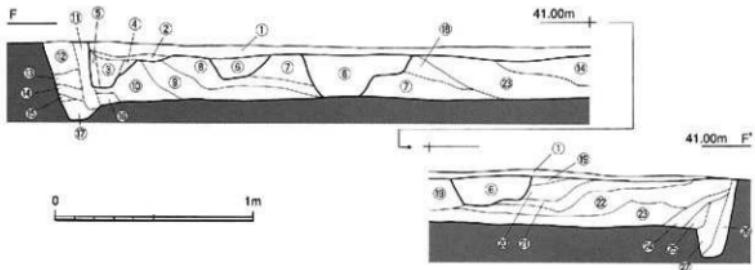
写真.16 SC-04 東西土層断面（南から）



写真.17 SC-04 西側土層断面（南から）



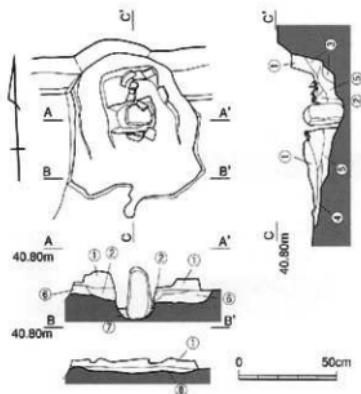
写真.18 SC-04 内 SK-22（北東から）



- ※①～⑤:SC-02埋土および周壁
- ①黒褐色(10YR2/3)粘質シルト。土質は硬めで、角礫を多く含む。
褐色(7.5YR4/6)シルトの丸い塊が多く混じる。土器細片が出土。
- ②暗褐色(7.5YR2/3)粘質シルト。暗褐色(7.5YR3/4)粘質シルトの大な塊が多く混じる。土質はしまり異味で、絆粉を含むため少しへさつな。
- ③黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルト。褐色(7.5YR4/6)粘質シルトの1cm以下の小塊が少量混じる。炭化物の細片出土。堅板痕跡。
- ④黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルト。暗褐色(7.5YR3/4)の小さな塊が多く混じる。炭化物を含む。
- ⑤と土質・土色は類似するが、③と比べて土質にしまりがあり硬めである。
- ※⑥:SC-02の床面から削り込まれた小穴の埋土
- ※⑦～⑩:SC-04埋土および周壁
- ⑦黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルト。角縁と褐色(7.5YR4/6)粘質シルトの0.5cm大的の塊が少量混じる。土質はしまっている。0.3cm角の炭化物をごく少量含む。
- ⑧黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルト。褐色(7.5YR4/6)粘質シルトの小塊が少量混じる。長さ1cm、幅0.2cmほどの頑固な炭化物片を含む。
- ⑨赤黒色(10R2/1)粘質シルト。褐色(7.5YR4/6)粘質シルトの縦指先大的の丸い塊が少量混じる。0.5cm角の炭化物片、土器細片が出土。
- ⑩赤黒色(10R2/1)粘質シルト。暗褐色(10YR3/4)粘質シルトが少量混じり、全体に灰色味を帯びた土色である。
- ⑪黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルト。極小の炭化物を含む。しまっている。褐色(7.5YR4/6)粘質シルトの粒状ブロックを少量、1cm幅の薄いレンズ状ブロック1つ含む。堅板痕跡。
- ※黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルト。暗褐色(7.5YR3/4)の小塊が少量混じる。土質はしまっている。炭化物片を少含む。
- ※黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルト。暗褐色(7.5YR3/4)粘質シルトが多く混じる。土質はしまり、炭化物片を含む。

- ※黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルト。褐色(7.5YR4/6)粘質シルトがわずかに混じる。土質はしまっている。
- ※褐色(10YR4/6)粘質シルト。塵砂粒を少量含み、土質はしまって硬め。
- ※黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルト。褐色(10YR4/6)粘質シルトの塊を多く含み、土質はしまって硬め。
- ※黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルト。褐色(10YR4/6)粘質シルトの塊が少量混じる。土質は硬めで、土器細片が出土。
- ※黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルト。褐色(7.5YR4/4)粘質シルトが混じり、部分的に1cm以下の丸い塊となっている。炭化物片、土器細片が出土。
- ※黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルト。暗褐色(7.5YR3/4)粘質シルトの3cm大的の丸い塊やレンズ状の塊が混じる。
- ※黒色(7.5YR2/1)粘質シルト。暗褐色(7.5YR3/4)粘質シルトが多く混じり、一部0.8cm大的の丸い塊になっている。小石が混じり、1cm大的炭化物の角張った塊が出土。
- ※黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルト。褐色(7.5YR4/6)粘質シルトが混じり、一部1～3cm大的の丸い塊となっている。縦長の1cm大的炭化物塊、土器細片が出土。
- ※黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルト。明褐色(7.5YR5/8)～褐色(7.5YR4/6)粘質シルトがごく少量混じる。土器細片、2cm大的横長の炭化物塊、根指先大の小石が出土。
- ※黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルト。暗褐色(7.5YR3/4)粘質シルトが混じり、灰色味を帯びる。一部3cm大的の塊となっている。1cm大的三角形の炭化物、5cm大的の角張りと円錐、土器細片が混じる。
- ※黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルト。褐色(7.5YR4/6)粘質シルトが混じり、全体的に灰色味を帯びる。一部小指先大的の丸い塊となっている。土器細片、1cm大的の炭化物塊が出土。
- ※黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルト。褐色(7.5YR4/6)粘質シルトが多く混じるために、全般的に灰色味を帯びる。
- ※黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルト。褐色(7.5YR4/6)粘質シルトが混じり、一部1cm大的のレンズ状の塊となっている。炭化物の微細片を含む。土質はしまって硬い。
- ※黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルトで、全體に灰色味を帯びる。土器細片、炭化物の微細片を多く含む。堅板痕跡。

図.16 SC-04東西土層断面図（縮尺 1/25）



- ①燒土。土器片を含む。
 ②炭化物・灰を多量に含む。焦茶色粘質シルト層。
 ③焦茶色粘質土に黄褐色砂のブロックを含む。
 ④焦茶色粘質土。灰は含まない。
 ⑤炭化物・焼土を多く含む。深い焦茶色土。
 ⑥貼り床部分。焦茶色の粘質土に黄褐色砂質土が散在し混じる。
 ⑦炭化物・焼土の小塊を多く含む。深い焦茶色土。
 ⑧炭化物・灰を多量に含む。焼土は混じらない。

図.17 SC-04内 SF-24(電)実測図 (縮尺 1/25)



写真.19 SC-04 電検出状況（南から）



写真.20 SC-04 電土層断面（東から）

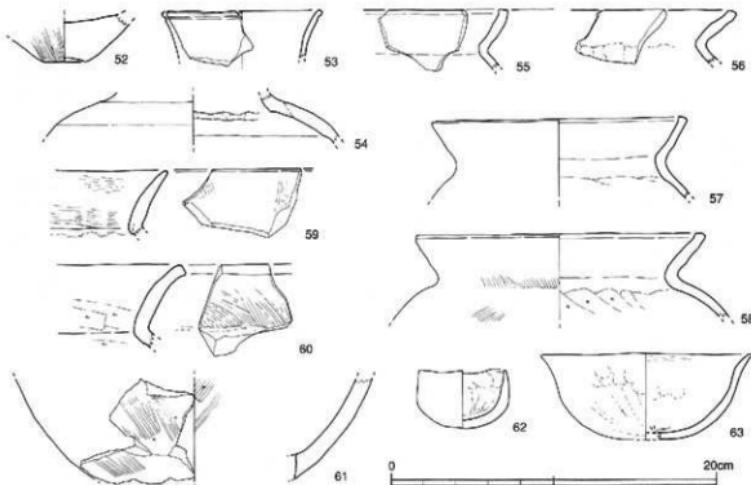


図.18 SC-04出土遺物実測図1 (縮尺 1/3)

表.6 4号竪穴式住居跡 (SC-04) 出土遺物観察表 (1)

掲図No	出土遺物の種別・器種・特徴			遺 登 番 号	遺 物 実 測 番 号	収納 コナ 番号
	種別	器種	形状・器面調整・胎土などの特徴			
図.18-52	甕生土器	壺	外面はハケメ、工具により縦方向の面ができる。外底部分はヘラ状工具で搔き取る。細砂粒が多い。	153	40	61
53	土師器	壺	口縁端の外面には浅く小さな段が巡る。内外面ともに横ナデ。胎土には砂粒をほとんど含まない精製粘土を用いる。	1191	11	6-62
54	土師器	壺	外面は丁寧なナデ。内面の肩部には指頭圧痕が集中。その後に横ナデを施す。胎土には精製粘土を用いる。	1158	40	61
55	土師器	壺	口縁端部を内側に強い横ナデを施し、小さく突起状に突出部ができる。内外面ともに横ナデ。	355	42	61
56	土師器	壺	口縁先端の内面に強い横ナデを施し、わずかに断面が窪む。内外面ともに横ナデ。口縁屈曲部に指頭によるナデ痕跡が残る。	170	42	4-61
57	土師器	壺	口縁先端の内側への突出は痕跡的。胴部内面はケズリ、他は器面の荒れが進み、調整の子細は不明。胎土には石英の粗・細粒が多く含む。	180	11	4-62
58	土師器	壺	口縁部内外は横ナデ、胴部外面はハケメの後にナデ。胴部内面はケズリ。胎土には石英の粗・細粒が多い。	175	10	5-62
59	土師器	壺	大型品。外面はハケメの後に横ナデ。口縁部の屈曲部の内面には胎土の接合線が見られる。	392	42	61
60	土師器	壺	大型品。外面はハケメの後に横ナデ。内面はケズリを施した後に横ナデ。石英の細粒を多く含む。	364	42	61
61	土師器	壺	大型品。全体に厚いつくり。内外面はハケメの後にナデ。内面はとくにナデでハケメを消す。	253-1184	41	6-61
62	土師器	壺	手づくね土器。外面は器面が荒れ調整の子細は不明。内面には指頭によるナデ痕跡が残る。胎土には砂粒をほとんど含まない。	1149	42	61-64
63	土師器	壺	口縁部周辺は指頭による整形の後に横ナデ。外底部はケズリの後にナデ。内面は非常に丁寧なナデ仕上げ。胎土には砂粒を多く含む。	305-365-1180-1184	42	6-15
図.19-64	土師器	高坏	内外面ともに横ナデ。胎土には石英の細粒を少量含むのみ。	162	9	4-61
65	土師器	高坏	内外面とも器面の荒れが進み、調整の子細は不明。坏部と脚部の接合面も不十分。胎土は精製された粘土を用いる。胎土・焼成など同一個体と判断。	184-356-362-434-1146	38	4-6-9
66	土師器	高坏	外面はハケメの後にナデ。坏部内面は丁寧なナデ。脚柱部の内面には絞り痕跡が残る。胎土には少量の砂粒が混じるのみ。	374-1148-1149	38	4-62
67	土師器	高坏	坏部中位の段以下にナデの痕跡がみられる以外、器面の荒れが進み、調整の子細不明。胎土には砂粒を少量含むのみ。	191-362-373	38	4-62
68	土師器	高坏	坏部の内外面は横ナデ。脚柱部の外面には指頭による整形痕が部分的に残る。内面はナデ。胎土には石英細粒が少量含まれる。	167-197-199-1198	44	4-5
69	土師器	高坏	外面とも荒れが著しく、器面調整は不明。胎土には砂粒をほとんど含まない精製粘土を用いる。	384	41	6-61
70	土師器	高坏	口縁部内面に一部横ナデの痕跡が残る以外、器面の荒れが進み、調整の子細不明。胎土は精製粘土。	373	37	6-62
71	土師器	高坏	内外面とも横ナデ。胎土には砂粒がほとんど混じらない精製粘土を用いる。	1155	46	6-61
72	土師器	高坏	内外面とも横ナデ。胎土には石英の細粒が多い。	198	9	4-61
73	土師器	高坏	内外面ともナデ・脚柱部との接合面で割れている。胎土は精製粘土を用いている。	156	46	5-61

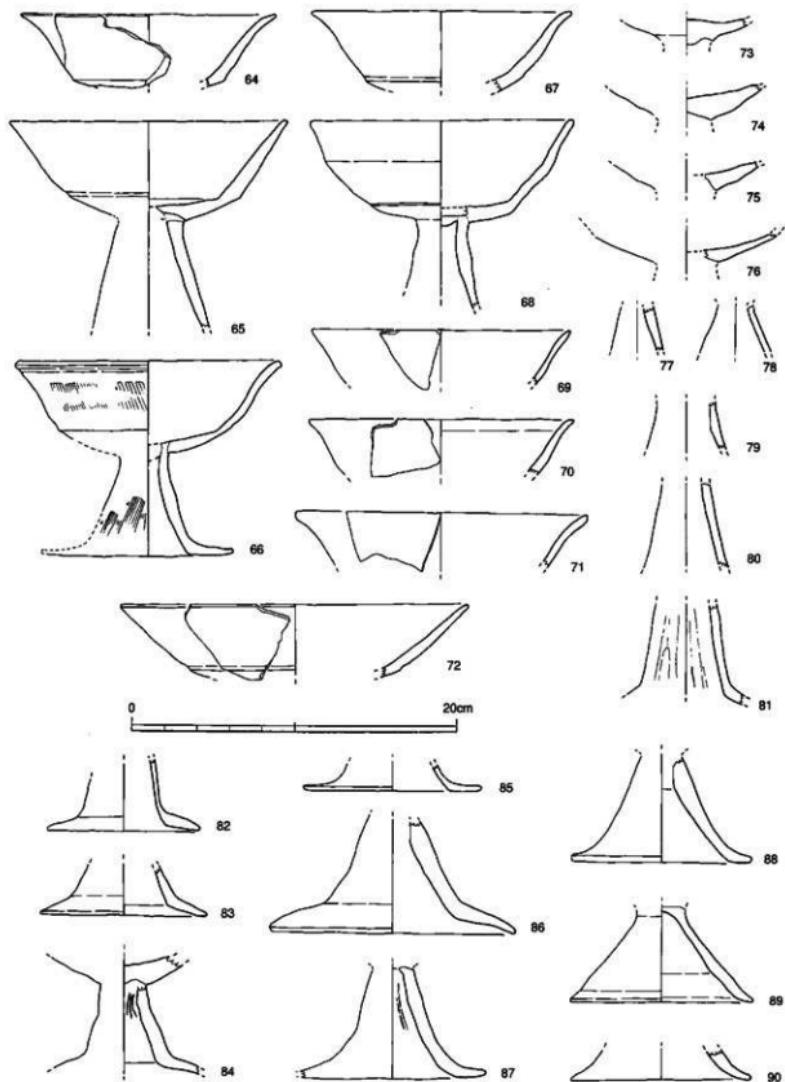


図.19 SC-04出土遺物実測図 2 (縮尺 1/3)

表.7 4号堅穴式住居跡（SC-04）出土遺物観察表（2）

揮団No	出土遺物の種別・器種・特徴			遺 登 番	遺 物 録 号	遺 物 実 測 番 号	取 納 番 号
	種 別	器種	形状・器面調整・胎土などの特徴				
図.19-74	土師器	高壺	外面は横ナデ。壺部内面はナデ、破片端部には壺部上半との接合面、脚柱部分との接合面が残る。	176	37	5-62	
75	土師器	高壺	内外面ともに器面の荒れが進み、調整の子細不明。壺部上半部および脚柱部との接合面で割れている。	1213	36	4-62	
76	土師器	高壺	内外面ともに器面の荒れが進み、調整の子細不明。壺部上半部および脚柱部との接合面で割れている。	379	37	6-62	
77	土師器	高壺	壺部上半部および脚柱部との接合面で割れている。脚柱部。内外面ともに器面の荒れが著しく、調整の子細不明。	1148	36	6-62	
78	土師器	高壺	脚柱部。外面は荒れが進み、調整の子細不明。内面は横ナデ。	172	36	5-62	
79	土師器	高壺	脚柱部。内外面とも横ナデ。胎土は精製粘土。	374	41	4-61	
80	土師器	高壺	脚柱部。内外面とも器面の荒れが進み、調整の子細不明。胎土には精製粘土を用いる。	367	37	6-62	
81	土師器	高壺	脚柱部。外面には荒れが進むが、わずかに縱方向のミガキの痕跡が残る。内面には絞り痕跡が残る。	391	43	61	
82	土師器	高壺	脚部。裾部内外を横ナデしている以外、器面の荒れが著しく、調整の子細不明。胎土は精製粘土。	27-300-363	44	4-62	
83	土師器	高壺	脚部。内外面とも横ナデ。胎土には砂粒をほとんど含まない精製粘土が用いられる。	1148	44	6-62	
84	土師器	高壺	脚部。裾部は横ナデ、脚柱内面に絞り痕跡が残る以外は、器面の荒れが著しく、調整の子細不明。精製粘土。	173-177	38	4-62	
85	土師器	高壺	脚部。内外面とも器面の荒れが進み、調整の子細不明。	207	44	5-62	
86	土師器	高壺	脚部。内外面ともに荒れが著しく調整の子細不明。砂粒をあまり含まない精製粘土を用いています。	200-1140	38	5	
87	土師器	高壺	内外面ともに横ナデ。脚柱内面には絞り痕跡が残る。壺部との接合面で割れている。胎土は精製粘土。	356-1199	44	6-61	
88	土師器	高壺	裾部内外と脚柱外表面は横ナデ。脚柱内面には絞り痕跡が残る。胎土には精製粘土を用いる。	1341	48	17-61	
89	土師器	高壺	壺部との接合面で割れている。内外面ともに横ナデ。石英の繊維を少量粘土に含む。	366-1138-1198	48	5-6	
90	土師器	高壺	内外面ともに横ナデ。胎土には精製粘土を用いる。	1155	45	6-61	
図20-91	土師器	壺	橙色の色調で、軟質土器の系統に属する。器面の荒れが進むが、口縁内外は横ナデ、胴部外面に斜格子のタキがかかるに残る。	378-1182-1343	11	6-61	
	土師器	壺	灰褐色の焼き上がりで、外面には格子タキが残り、内面は荒れが著しく調整の子細不明。	1142-1146-1171	10	5-61	
92	土師器	甕あるいは壺	内外面ともに横ナデ。胎土は精製粘土を用いる。	376	42	61	
93	須恵器	高壺	内外面ともに横ナデ。肩部に細い沈線を2条巡らし、その間に上8条1单位、下6条1单位の細かな波状文を施す。	157-389-1580	10	4-61	
94	須恵器	壺	内外面ともに横ナデ。	36	40	61	
95	須恵器	壺	スサを含まない。かなりスカスカした質感を持つ焼成粘土塊。胎土には砂粒をほとんど含まない。	1181	42	4	
96	須恵器	壺	硬質砂岩の円錐の両側面を砥石面に利用する。部分的に研磨痕が残る。石材の目は細かく仕上げ砥か？やや扁平な砂岩の上面と両側面を砥石面に利用している。石材の粒子は粗めで荒砥石？	201	33	52-63	
97	石製品	砥石	柱状の硬質砂岩製の仕上げ砥石を再利用して、窓の支石としている。上半部分は2次的な火熱で赤変している。頭部上面には擦り面がある。	205	35	53-63	
98	石製品	砥石		417	49	53-63	
図21-99	石製品	支石					

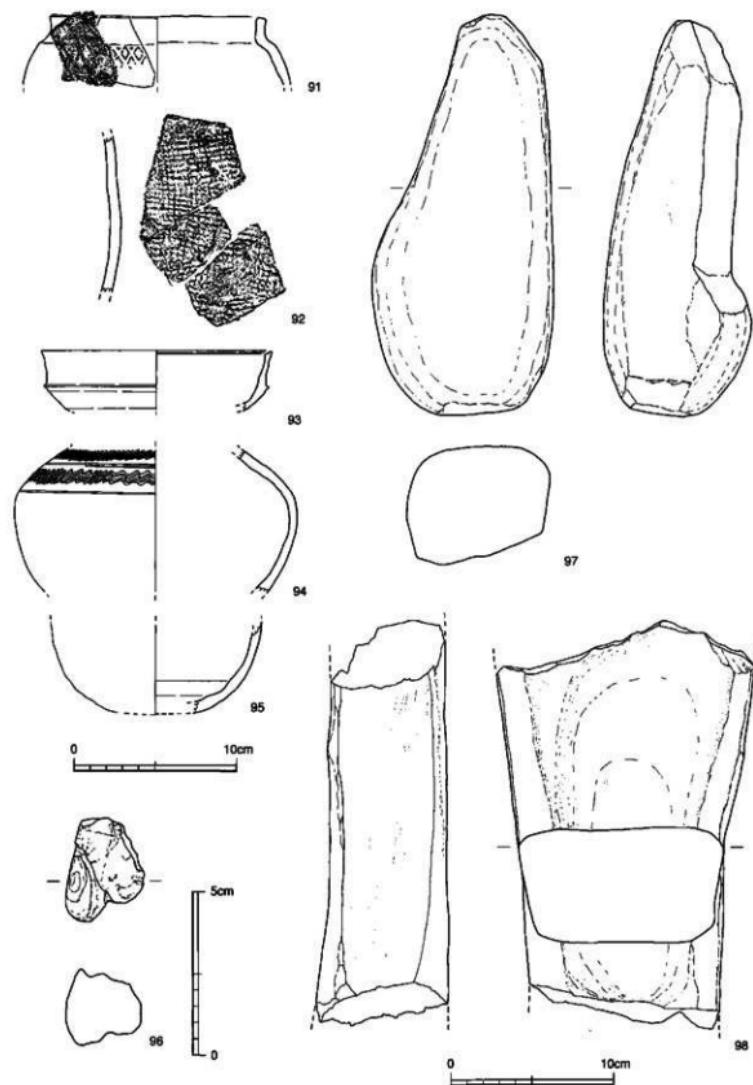


図.20 SC-04出土遺物実測図 3 (縮尺 1/3・2/3)

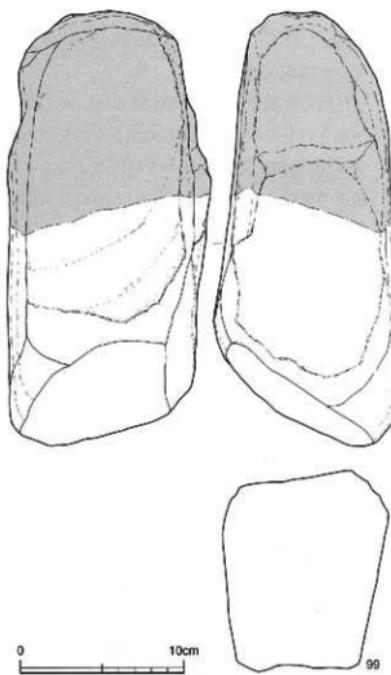


図.21 SC-04出土遺物実測図4 (縮尺 1/3)

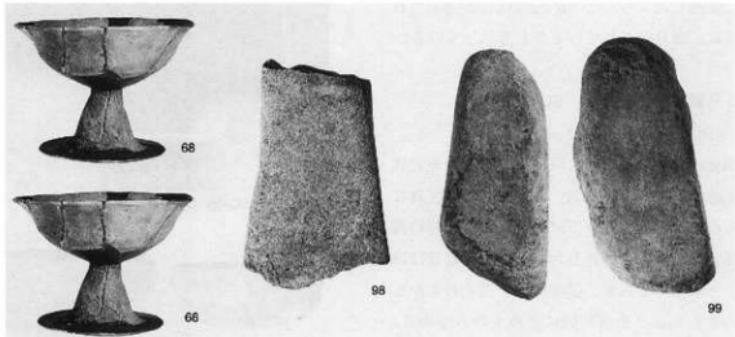


写真.21 SC-04 出土遺物

土を少量含む焦茶色粘質土を貼り若干盛り上げて、その上部に壁体を立ち上げている。中央部分には支石が置かれ、竈前面(南側)では灰や炭化物の塊が多く含む焚き口部分を確認できた。また、竈の後方はわずかに弧状に周壁を削り、張り出させている。

竈に対置するように南壁沿いに土壤SK-22が掘られている。SC-02内のSK-25と同様に、住居の出入口部分にあたると考える。土壤内の埋土は、中部の図.14-③層で褐色粘質土が縞状に互層状態で堆積している。梯子などを固定したと考えられるが、住居廃絶後に抜き取られていた。埋土上部の図.14-①層は抜き跡への流入土である。

この他、南東部分のSP-166周辺の床面がわずかに窪む。また、床面でSP-171・173を検出した。黒褐色粘質シルトの埋土をもつ。SP-171からは土師器の細片が出土した。これらとSC-04との関係は不明である。

出土遺物を図.18~21に図示し、表.6・7に遺物観察表を示した。ほとんどが小破片で、埋土上部や、壁際に流れ込んだ状況で出土した遺物が多い。また、88はSK-343か

ら出土したが、本来SC-04の埋土に包含されていたと考えられるので、ここに報告する。これらの遺物の中で、53・55・68・86・97は埋土下部～床面より若干浮いた状態で、57・74・98は周壁溝の上面で床面とほぼ同じレベルで出土した。しかし、68は周壁溝の上部で流れ込んだ状況で出土した破片と接合する。したがって、床面近くから出土した遺物から、単純に住居跡の時期を確定することはできない。

ただし、65・67・87が竈(SF-24)内から焼土とともに出土している。65はSC-07の破片とも接合し、67はSF-24の東側の床面に散乱していた破片と接合する。これらは、住居が廃絶した直後に投棄された遺物で、住居の下限を示す。

また、58は周壁構内の埋土、80は周壁板の裏込めに押し込まれたような状況で出土した。これらは、住居の上限を表している。

以上の遺物と、その出土状況から、SC-04は5世紀後半に位置付けられる。

この他、SC-02に伴うと考えたSK-22の①・④層からも、59・63・81・96が出土した。63・81・96は①層から出土した遺物である。63が埋土の中～上部やSD-03から出土した破片と接合する。前述したように、SK-22は住居が廃絶された後に、掘り返されていることを示している。

5号竪穴式住居跡 SC-05

(図22・23、写真22～24、表.8)

調査区の南東部E区に位置する方形の竪穴式住居跡である。住居東側の大部分が調査区外にひろがる。Ⅲ層を掘り下げた後に、住居跡の西南部分の輪郭線も確認した。しかし、周壁はほとんど残っておらず、完掘後は、ごくわずかな壁の立ち上がりを痕跡的に認めるのみである。北西部に土壌状の平坦面があるが、SC-05に伴う張り出し部なのか、別個の土壌なのか確定

できなかった。この部分を除いて、南北長軸長4.88mを測る。中央部分には、灰色系の埋土をもつ土壌SK-309がある。

住居の大部分が調査区外にあるが、やや直径が小さいものの、床面からの深さが同じであるSP-270とSP-147を西側の主柱穴とする4本柱構造の竪穴式住居跡を考える。ともに、黒色粘質シルトで褐色粘質シルトが混じり一部1～3cm大の丸い塊を含む埋土をもつ。

西壁と南壁に沿ってSP-120・122～137・144・151・165の小穴が並ぶ。直径7～15cmの小穴である。埋土は黒色～黒褐色粘質シルトで、SP-127に黄褐色シルトの小指先大の丸い塊が混

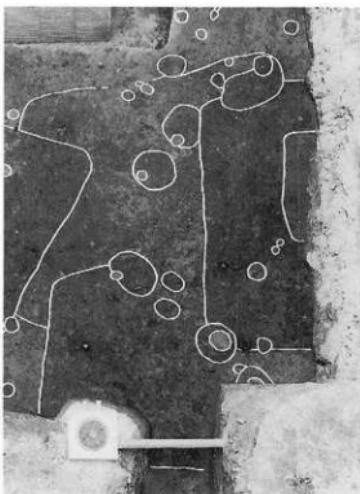


写真.22 SC-05-06 検出状況（南から）

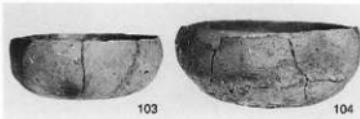


写真.23 SC-05 出土遺物

じる以外、いずれも褐色～暗褐色粘質シルトが多く混じり一部丸い小さな塊となっている。床面からの深さは、5～13cmと不揃いである。住居の周壁にかかる杭痕跡の可能性を考えておきたい。この他、床面では多くの小穴を検出した。しかし、SC-05との関係は不明である。

出土遺物の量は少ないが、図23・101・105・106が床面にほぼ接した状態で出土している。とくに、105は南西隅の床面上にすえ置かれた

状態で出土した。102はⅢ層部分で取り上げた破片や、SC-02やSK-13の埋土上部から出土した破片と接合する。103・107は住居中央の灰色土を埋土とする土壤SK-309から出土したが、本来、SC-05の埋土中の遺物と考えられる。この他、SP-126・127・137・144・165から炭化物の細片が出土した。小片のために図示できなかつたが、SP-122からも土師器の細片が出土している。

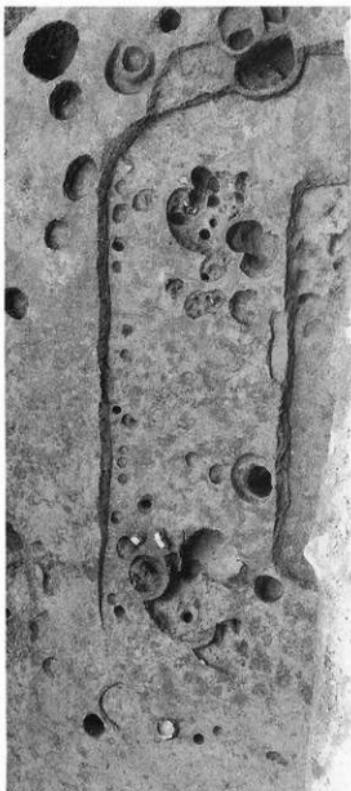


写真24 SC-05 実掘状況 (東から)

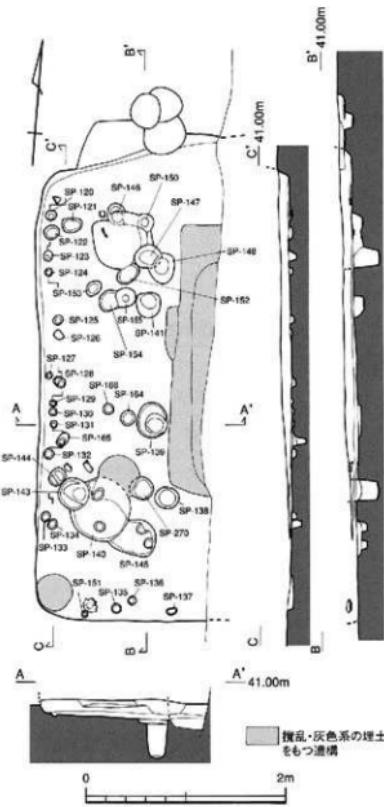


図22 SC-05実測図 (縮尺 1/50)

床面上で出土した101・105・106から、SC-05が営まれた時期を5世紀後葉～6世紀初めと考えておく。

6号竪穴式住居跡 SC-06

(図24、写真25、表.9)

調査区の東南隅のA・B・E・F区に位置する。北東部の輪郭は確定できなかった。しかし、調査区東壁の土層断面で、Ⅲ層下～中部まで整

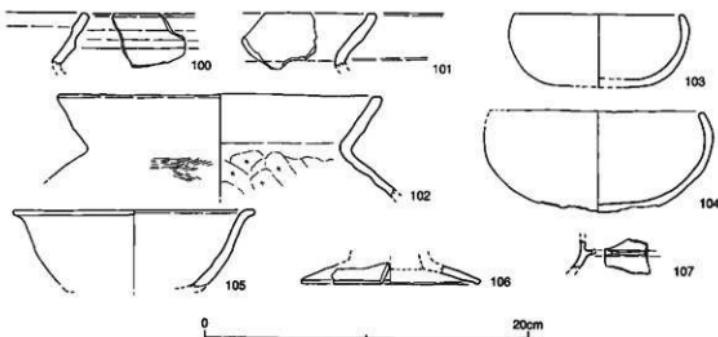


図23 SC-05出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

表.8 5号竪穴式住居跡 (SC-05) 出土遺物観察表

挿図No	出土 遺 物 の 種 別 ・ 器 種 ・ 特 徴			遺 物 登 番 号	遺 物 実 測 番 号	収 納 コ ナ 番 号
	種 別	器 種	形 状・器 面 調 整・胎 土 な ど の 特 徴			
図23-100 101	土 師 器	甕	屈曲が弱く外傾する二重口縁をもつ。内外面ともに横ナデ。石英の粗・細砂粒を多く胎土に含む。	1204	13	7
102	土 師 器	甕	口縁先端の内面を横ナデした結果、わずかに窪みができる。口縁屈曲部の外側には沈線風の窪みが巡る。	532	13	7
103	土 師 器	壺	口縁部は横ナデで丸くおさめる。肩部外面はナデ、内面は丁寧なナデ、外底面は擦り跡が残る。胎土には砂粒を含まない。	166・250・ 256・875・ 901・1305・ 1560・1581	13	7
104	土 師 器	壺	口縁内外は横ナデ、肩部はナデ。外底を中心として媒が付着。また、2次的な火熱のためか、バッチ状の剥離が見られる。	539	13	7
105	土 師 器	高 坯	内外面ともに荒れが進み器面の調整は不明。坯部下半との接合面で割れている。	257	13	7
106	土 師 器	高 坯	脚部。内外面とも横ナデ。胎土には砂粒をほとんど含まない精製粘土を用いる。	255・531	37	7
107	須 惠 器	坏 身	受け部の小破片。内外面とも横ナデ。胎土にはほとんど砂粒を含まない。	531	13	7
				537	13	7

の立ち上がりを確認できた。

東西の軸線と考えられる線上に、SP-272とSP-251が位置する。深さはSP-272が16cm、SP-251が40cmと不揃いであるが、直徑は20cm前後で、埋土も黒色粘質シルトで暗褐色粘質シルトが多く混じる点が共通する。この2つの小穴を主柱穴とする2本柱構造の建物を考えた。そうなると、南北短軸幅3.43m、東西長軸長推定3.7~4.0mの隅丸方形の平面形をもつ住居を復元できる。位置関係からSC-05と切り合うが、時間的な先後関係は不明である。

住居の埋土は、黒褐色粘質シルトで、住居跡の北西部分では貼り床を確認できた。貼り床部分にはIV-1層にあたる黄褐色砂質シルトの塊が多く混じる。

出土遺物は10数点にすぎない。1点のみ須恵器の壊片の受け口部分の細片があるが図示できるほど残っていない。図24に図示した108・109は、住居跡上部のⅢ層部分から出土した遺物である。前述したように、調査区東壁のⅢ層下~中部まで周壁の立ち上がりが確認できることから、SC-06の埋土中のものと考えられる。

住居の時期は、108・109から6世紀中頃と考えておく。

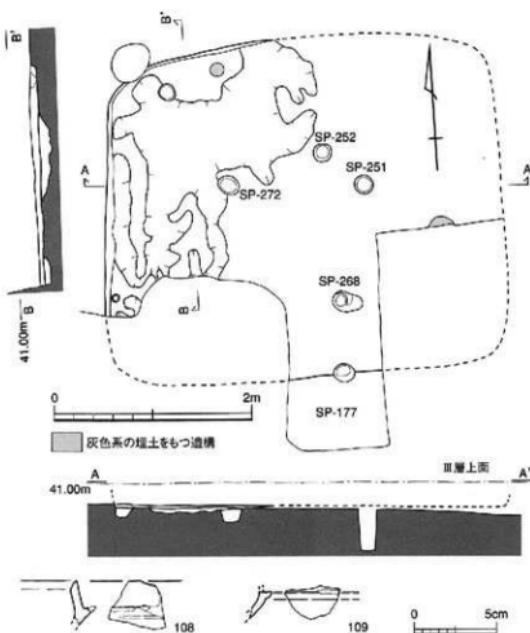


図24 SC-06実測図および出土遺物実測図（縮尺 1/50・1/3）

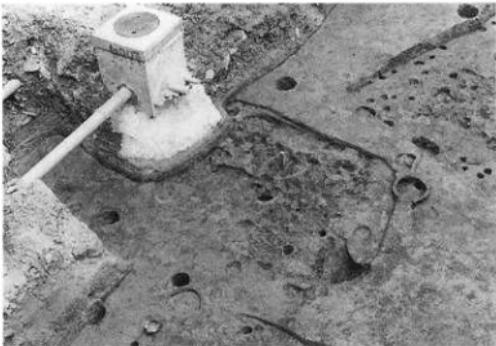


写真25 SC-06 実掘状況（北東から）

表.9 6号竪穴式住居跡（SC-06）出土遺物観察表

掲図No	出土遺物の種別・器種・特徴			遺物登録番号	遺物実測番号	取納区分番号
	種別	器種	形状・器面調整・胎土などの特徴			
図.24-108 109	須恵器 須恵器	环身 环身	受け部の小破片。内外面ともに横ナデ。受け部下にあまい沈線風の幅の狭い溝みが造る。胎土には細砂粒が少量混じる。 受け部の小破片。内外面ともに横ナデ。胎土には砂粒をほとんど含まない精製粘土を用いる。	1650 847	14 14	8 8

写真.26 SC-07 検出状況
(北東から)写真.27 SC-07 完振状況
(南西から)

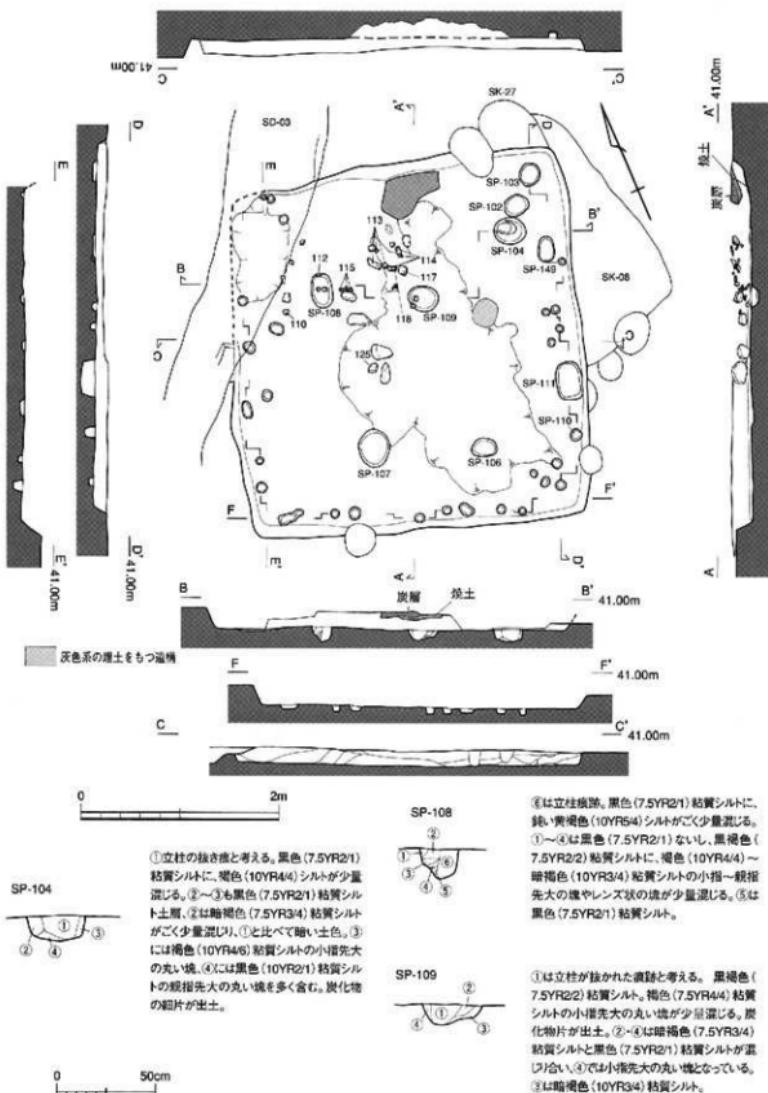


図25 SC-07実測図（縮尺 1/50・1/25）

7号竪穴式住居跡 SC-07

(図25~27、写真26・27、表10)

調査区の南東部B・F区に位置する。SD-03に北西隅を切られる。また、北東隅では、SK-08とSK-27を切る。南北長3.55m、東西幅3.44mを測り、やや不整な方形の平面形である。床面の中央部分は、椿の樹根で擾乱されていた。

床面で検出したSP-104・108・109では、柱痕跡および抜き痕を確認できた。しかし、配置が北に寄りすぎている。強いて主柱穴を想定すれば、SP-109の1本柱構造を考えざるをえない。

東西壁と南壁に沿って、直径7cm前後、床面からの深さ5～8cmの小穴を床面で多数確認できた。埋土はいずれも黒褐色粘質シルトで、小穴の底はやや尖り氣味である。周壁を造るための杭痕跡と判断した。

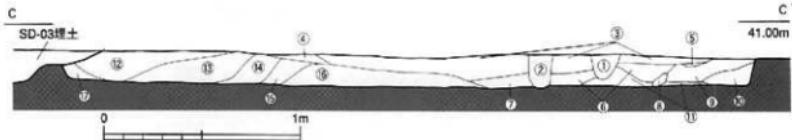
Ⅲ層を掘り下げ、SC-07を検出した時点で、北壁沿いから焼土層と灰層が出土した。当初、

造り付けの窓と考えた。しかし、床面からかなり浮いた状態で、灰層を上に焼土層が北から南に向かって傾斜した堆積状態を示している。埋土中の土器や礫石も同様に南に傾斜した出土状況を示しており、住居の廃絶後に、土器や礫石とともに北側から投棄されたものと判断した。

出土遺物には土師器・須恵器・自然礫がある。土師器と須恵器はいずれも小片である。図27-119は住居跡北側の焼土層と灰層に混じって出土した。117は楠の樹根に絡った状態で出土したが、本住居跡に伴うものである。

図示した遺物以外に、床面直上から、泥岩製の手持ち砥石の小片、弥生土器のハケメ調整を施した壺の胴部細片などが数点出土している。また、埋土中には、親指先大あるいは拳大の花崗岩の円礫が多く混じっている。

出土遺物から、SC-07の埋没時期は5世紀後半と考えておく。



- ①黒褐色（7.5YR2/2）粘質シルト。褐色（7.5YR4/3～7.5YR4/4）粘質シルトが流れ込む。

②木被

③黒色（7.5YR2/1）粘質シルト。暗褐色（7.5YR3/4）粘質シルトが混り、全体に灰色味を帯びる。

④⑤同じ土色・土質。

⑥暗褐色（7.5YR4/3）粘質シルトで、墨褐色（7.5YR2/2）粘質シルトの小さな丸い塊が混じる。

⑦黒色（7.5YR2/1）粘質シルト。褐色（7.5YR4/4）シルトが多く混じり、灰色味を帯びる。

⑧⑨同じであるが、褐色（7.5YR4/4）シルトが部分的に塊となる。

⑩褐黑色（10YR3/2）砂質土で、砂礫が混り、土質はしおりがない。

⑪黒色（7.5YR2/1）粘質シルトで、全体に灰色味を帯びる。極端褐色（7.5YR2/3）粘質シルトの小指導先の大塊がまばらに混じる。

⑫黒色（7.5YR2/1）粘質シルトに暗褐色（7.5YR3/3）粘質シルトが混じる。暗褐色（7.5YR2/2）粘質シルトに暗褐色（7.5YR3/4）粘質シルトが混じる。

⑬墨褐色（7.5YR2/2）粘質シルト。暗褐色（7.5YR3/3）粘質シルトが多混じり、部分的に褐色（10YR4/4）シルトがレンズ状の塊となる。

⑭黒褐色（7.5YR2/2）粘質シルト。褐色（7.5YR4/3）粘質シルトが混じり、部分的にレンズ状の塊となる。

⑮黒色（7.5YR2/1）粘質シルト。暗褐色（7.5YR3/4）粘質シルトが少混じり、全体に灰色味を帯びる。

図-26 SC-07主層断面図（縮尺 1/25）

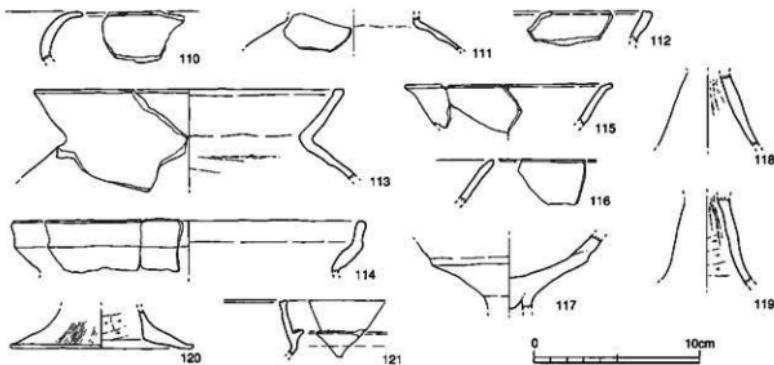


図.27 SC-07出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

表.10 7号竪穴式住居跡 (SC-07) 出土遺物観察表

挿図No	出土遺物の種別・器種・特徴			遺 登 番 号	遺 物 実 測 番 号	収納 コン テナ 番 号
	種別	器種	形状・器面調整・胎土などの特徴			
図27-110	土師器	蓋	口縁先端は丸くおさめる。内外面ともに横ナデ。微細・細砂粒を胎土に多く含む。	128	16	9
111	土師器	壺	薄手のつくり。内外面ともに荒れが進み、調整の子継は不明。胎土には微細・細砂粒を多く含む。	1244	15	9
112	土師器	甕	口縁先端がわずかに内側に突起する。内外面とも横ナデ。胎土には細砂粒が多く含まれる。	127	16	9
113	土師器	甕	口縁端部が内側へ小さく突起する。内外面ともに横ナデ。胎土はケズリ。石英の微細・細砂粒が多い。	120-122-1236	15	9
114	土師器	甕	屈曲のあまい二重口縁。内外面とも2次的な火熱を受けて器面荒れが著しく、調整の子継不明。	119-121	15	9
115	土師器	壺	内外面とも横ナデ。胎土は砂粒をほとんど含まない精製粘土を用いる。口径が小さいことから壺とした。	133-1229	15	9
116	土師器	高坏	口縁部の小片。内外面ともに横ナデ。砂粒をほとんど含まない精製粘土を胎土とする。	421	16	9
117	土師器	高坏	外面は横ナデ、内面は丁寧なナデ。胎土には石英の細粒を少量含む。	116-429	15	9
118	土師器	高坏	脚柱部。脚柱部の内面に絞り痕が残る以外、器面は荒れて調整の子継は不明。胎土には微細砂粒を少量含む。	1232	16	9
119	土師器	高坏	脚柱部。外面は乱雑なナデ。内面は絞り痕跡の上にケズリを施す。胎土には微細砂粒をわずかに含むのみ。	428	15	9
120	土師器	高坏	脚柱部の小片。外面はハケメの後にナデ。内面はケズリ。胎土には石英の細粒を少量含む。	1235	15	9
121	須恵器	坏身	口縁部から蓋の受け部の小破片。傾きは不確実。内外面とも横ナデ。受け部上面にはバリが付着。	438	16	9

9号竪穴式住居跡 SC-09

(図.28~30、写真.28・29、表.11)

調査区北端際のN区に位置する。調査区北側の建物の余掘りで大半を破壊されているが、周壁溝を確認したこと、隅丸方形の竪穴式住居跡と判断した。西側の土塙SK-11を床面で確認した。位置関係から、SC-02内のSK-25やSC-04内のSK-22と同じく出入口部分と考えた。SK-11が住居跡の南壁沿いの中央にあるとすると、東西長5~5.5mの住居規模を推定できる。

埋土は、やや灰色味がかった赤黒色の粘質シルトである。周壁溝内の埋土は、図.29-④・⑤層が灰色味がなく、黒褐色粘質シルトの親指先

の大塊を含む。土質は、⑤はしまりがなく軟らかいが、④は比較的しまって硬い。⑤を壁板痕跡、④を壁板を固定したものと考えた。

出土遺物は少ない。床面直上から出土した図.30-127・129・130を含めても、土師器の甕の胴部や高杯脚柱部などの小破片が10数点出土しているにすぎない。土塙SK-11からは126・128・131が出土した。以外に、土師器甕の胴部小片がある。また、親指先大の花崗岩や砂岩の円礫が、床面直上やSK-11内から10点ほど散乱した状態で出土している。

SC-09の営まれた時期は、これらの遺物から5世紀後半と考えておく。

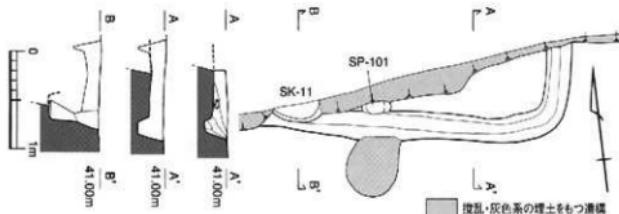


図.28 SC-09実測図（縮尺 1/50）

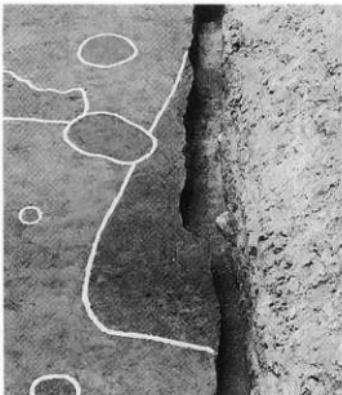
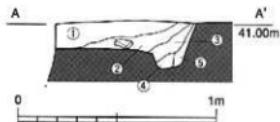


写真.28 SC-09 検出状況（東から）



写真.29 SC-09 実掘状況（東から）



- ①赤黒色(10R1.7/1)粘質シルト。①～③は流入土。
 ②赤黒色(10R1.7/1)粘質シルトで、①よりやや灰色味が強い。
 ③赤黒色(10R1.7/1)粘質シルトで、黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルトの小塊を含み、①よりやや灰色味が強い。
 ④赤黒色(10R1.7/1)粘質シルトに、暗褐色(7.5YR3/4)の小根先大の丸い塊を多く含む。
 ⑤赤黒色(10R1.7/1)粘質シルトに、暗褐色(7.5YR3/4)の小根先大の塊を少量混じる。周壁板の痕跡。

図.29 SC-09 土層断面図 (縮尺 1/25)

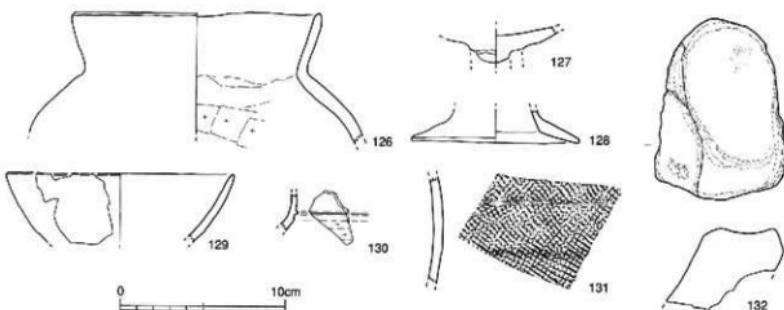


図.30 SC-09 出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

表.11 9号堅穴式住居跡(SC-09)出土遺物観察表

挿図No	出土遺物の種別・器種・特徴			遺物登番	遺物実測番号	収納番号
	種別	器種	形状・器面調整・胎土などの特徴			
図.30-126	土師器	壺	口縁部の立ち上がりが強い。外面は口縁付近を横ナデ、胴部はナデ。内面は口縁付近をハケメの後に横ナデ、胴部はケズリ。胎土は砂粒をほとんど含まない。	485	18	29
127	土師器	高坏	脚柱との接合面が割れている。内外面ともに2次的な火熱を受けて器面が荒れ、調整の子繩は不明。	1260	17	10
128	土師器	高坏	脚部。器面の荒れが進み、調整の子繩は不明。胎土には砂粒をほとんど含まない精製粘土を用いる。	1673	18	29
129	土師器	壺	内外面ともに横ナデ。胴部下半部にはヘラ状工具を擦りつけたような小さな平滑面ができる。	1261	17	10
130	須恵器	高坏?	無蓋高坏の坏部突帯付近の小破片か? 内外面とも横ナデ。突帯以下は回転ケズリ。胎土には砂粒をほとんど含まない。	469	17	10
131	須恵器	裏ある いは董	脚部破片。外面は斜格子タタキの後に2cm間隔で幅の狭い横ナデを施す。内面はナデ。	486	18	29
132	石製品	砥石	砂岩。粒子が粗く荒砥石と考えられる。上面の擦り面には線条痕、側面には敲打痕が残る。	270	12	10

12号竪穴式住居跡 SC-12

(図31・32、写真30、表12)

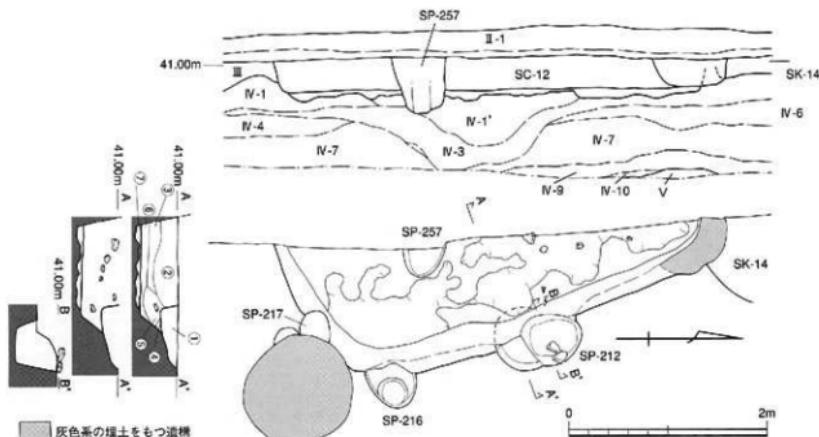
調査区西壁の中央付近のH・L区にかかるて位置する。胴張りの強い方形の竪穴式住居跡である。南北推定長3.8~4.0m。SP-212・216・257に切られるが、これを確認できたのは、SC-12を床面まで掘り下げた段階で、遺物に混乱が生じてしまった。

東側の周壁の上半部は崩れ落ちている。埋土は黒褐色の粘質シルトで、東西の土層断面では細分に心がけたが、図31の調査区壁土層断面図では一括して表示している。土層の特徴については、付図を参照されたい。

床面下には厚さ5~10cmの貼り床を施す。貼

り床部分は埋土と比べ、IV層に相当する黄褐色砂質シルトの親指先~拳大の塊がかなり多く混じる。掘り込み面は凹凸が著しい。

出土遺物は、他の住居跡と比べると多いが、埋土の上半部分から中部にかけて出土したものがほとんどである。また、SC-12を切るSP-212・217・257に本来伴うものも含まれている。さらに、弥生時代前期あるいは中期の遺物が混入している。これらは、明らかに混入品と考えられる弥生土器を除いて、5世紀代に遡るものと、6世紀代の遺物に分けることができる。量的には前者が多く、図32~141が貼り床部分で出土していることから、SC-12は5世紀代の住居跡と考えておく。



- ① 黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルト。黒褐色(7.5YR3/2)粘質シルトが鏡状のレンズ状に混じり、暗褐色(7.5YR3/4)粘質シルトや明褐色(7.5YR5/6)シルトの小指先大の丸い塊が混じる。炭化物の繊片を含む。
- ② 黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルトで、褐色(7.5YR4/4)粘質シルトがまばらに、灰褐色(7.5YR4/2)粘質シルトの1~5cm大の丸い塊が混じる。
- ③ 黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルト。褐色(7.5YR4/4)粘質シルトがまばらに混じり、部分的に小指先大の塊となっている。炭化物・土器繊片を含む。

器繊片が出土。

- ④ 暗褐色(7.5YR3/3)シルト。少し粘性が強い。
- ⑤ 黒褐色(10YR2/2)粘質シルト、暗褐色(7.5YR3/4)粘質シルトがまばらに混じり、一部大きな塊となっている。炭化物や土器の繊片を含む。
- ⑥ 黒色(7.5YR2/1)粘質シルト。褐色(7.5YR4/4)粘質シルトが中位に鏡状のレンズ状、一部3cm大の楕円形の塊で混じる。炭化物・土器の繊片を含む。
- ⑦ 貼り床部分。

図31 SC-12実測図 (縮尺 1/50)

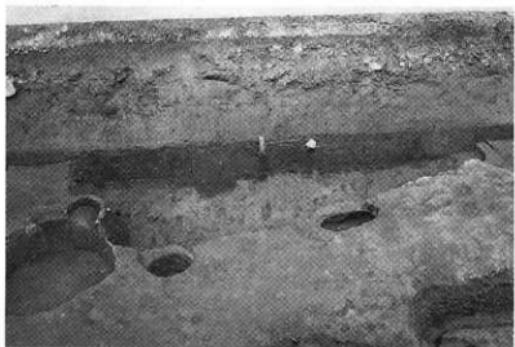


写真.30 SC-12 完掘状況（東から）

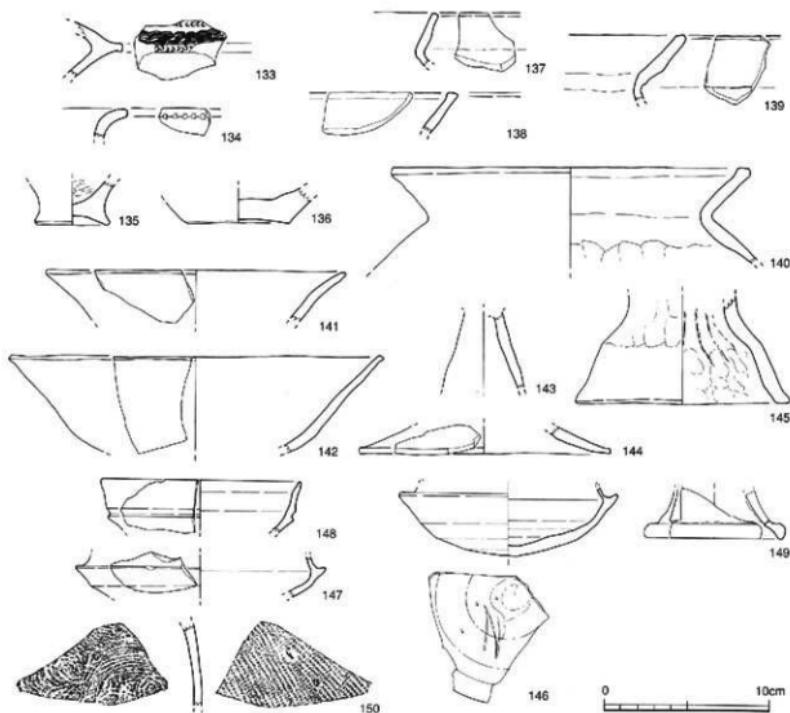


図.32 SC-12出土遺物実測図（縮尺 1/3）

表.12 12号墳穴式住居跡 (SC-12) 出土遺物観察表

掲出No	出土遺物の種別・器種・特徴			遺 登 番	遺 物 録 号	遺 物 実 測 番 号	収納 コンナ 番号
	種 別	器種	形状・器面調整・胎土などの特徴				
図.32-133	弥生土器	壺	弥生時代後期の複合口縁壺の口縁部破片。半裁竹管で口縁外面と蓋の端面に列点文、その間に波状文を施文する。混入品。		496	20	11
134	弥生土器	壺	弥生時代前期。如意形口縁の小破片。口縁端面の下端にへラ工具で刻み目を施す。外面ともに横ナデ。混入品。		71	20	11
135	弥生土器	壺	弥生時代前期。134と同一個体の可能性あり。外面はナデ。内面は先端の丸い棒状工具で擦りつけ。混入品。		521	20	11
136	弥生土器	壺	弥生時代前期？ 外面はナデ。内底面には指頭圧痕が多く残る。混入品。		1268	20	11
137	土師器	壺？	短頸壺の口縁部と考えた。外面ともに横ナデ。胎土には砂粒を少量含む。		1272	21	11
138	土師器	壺	口縁先端を内側に折り返したような小さな突起が巡る。端面は面取り。内外面ともに横ナデ。胎土には粗砂粒を少量含む。		1279	21	11
139	土師器	壺	内外面ともに横ナデ。口縁部外面の折り返し部分をへラ状工具で押さえつけるために沈線状の段がつく。胎土には砂粒を比較的多く含む。		1294	22	57
140	土師器	壺	口縁端面は内側に小さく肥厚させている。口縁部周辺は横ナデ、胴部外面はハケメの後にナデ、内面はケズリの後にナデ。		73-514・1273-1280	22	57
141	土師器	高坏	内外面ともに横ナデ。胎土は砂粒をほとんど含まない精製粘土を用いる。		508	22	11
142	土師器	高坏	部分的に横ナデの痕跡が残るが、器面の荒れが著しく調整の子細は不明。胎土には砂粒をほとんど含まない精製粘土を用いる。		1287	20	11
143	土師器	高坏	脚柱部。内外面ともにナデ。胎土には精製された粘土を用いる。		1287	21	11
144	土師器	高坏	脚部の小破片。内外面ともに横ナデ。胎土には砂粒をほとんど混じ得ない。		492	20	11
145	土師器	不明	筒状の器形を持つが、器種は不明。内外面ともに指頭によるナデ痕跡が明瞭に残る。筒部の内面には絞り痕が残る。		520	22	57
146	須恵器	坏身	口縁端部を欠く。内面および胴部上半は横ナデ、外底面は回転ケズリ。器体に歪みがあり、直径はもう少し大きくなるか？底面にはへラ記号。		26	22	57
147	須恵器	坏身	受け部周辺の小破片。内外面ともに横ナデ。胎土には細砂粒を少量含むのみ。		501	20	11
148	須恵器	高坏	無蓋高坏。内外面ともに横ナデ。胎土には微細砂粒が少量混じるのみ。		26	22	57
149	須恵器	高坏	内外面ともに横ナデ。三角形の透かし孔をもつ。胎土には微細砂粒を少量含むのみ。		74	22	57
150	須恵器	壺あるいは壺	胴部破片。外面には綿席文タタキ、内面には幅の狭い同心円文の当て具痕が残る。胎土には砂粒をほとんど含まない。		1292	20	11

2 挖立柱建物 (遺構略号 SB)

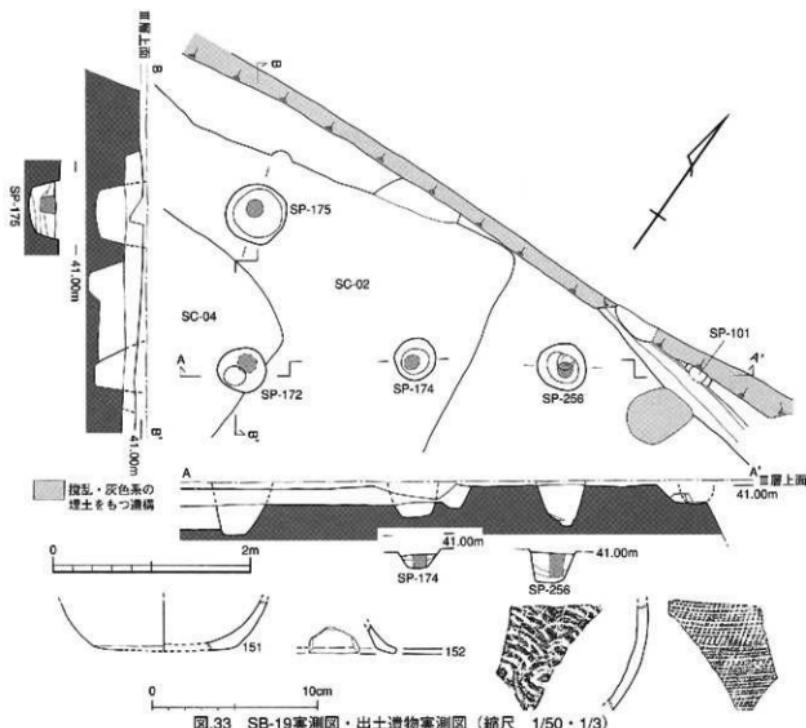
19号掘立柱建物 SB-19 (図33、表13)

調査区北部のK・N・O区に位置するSP-101・256・174・172・175から構成される東西3間以上、南北2間以上の掘立柱建物である。SP-174・175・256では柱痕跡を確認できた。柱間は、SP-174とSP-265の間で1.54mを測る。他の柱穴との間も1.5~1.6mである。

SP-101はSC-09の周壁溝と切り合う。しかし、切り合いの先後関係は確認できていない。

埋土は黒褐色粘質シルトである。

SP-174の柱痕跡は直径は15cm。柱穴底に接して埋置されている。柱痕部分は黒褐色粘質シルトで、ごく少量の砂礫と明褐色シルトが混じり、一部梢円形の小塊となっている。土師器の細片が出土した。掘り方内の埋土は、上部は黒褐色粘質シルトで、明黄褐色シルトの小指先大のひしゃげた梢円形の塊がごく少量混じる。下部は黒褐色粘質シルトに褐色粘質シルトが多く



混じり、部分的に細長い小塊となっている。

SP-175の柱痕跡は、粘性の強い黒褐色粘質シルトに暗褐色ないし明褐色の粘質土の小指～

親指大の楕円形の塊が混じる。炭化物の細片が少量出土した。柱の推定直径は17cm。柱穴の下部に黄褐色ないし明赤褐色シルトの小指先大の塊が混じる黒褐色粘質シルトを締め固めて、その上に柱を立てている。掘り方埋土の上部は、黒褐色粘質シルトに褐色～暗褐色シルトが混じり、部分的に小指先大の塊となっている。

SP-256でも、SP-175と同様に、柱穴下部を暗褐色粘質シルトの親指先大の楕円形の塊が混じる黒褐色粘質シルトで固め、その上に柱を立てている。柱痕跡の直径は15cm。黒褐色粘質シルトに褐色～暗褐色粘質シルトの丸い塊を混じえる。柱痕跡周囲の掘り方埋土は、黒褐色粘質

シルトである。褐色～暗褐色シルトの楕円形やレンズ状の塊が互層で混じる。土質はしまって硬い。

SP-172は、SC-04を切るが、SC-02との切り合い関係は未確認である。柱痕跡を平面で確認した。埋土は黒褐色粘質シルトで、褐色粘質シルトが混じり、部分的に薄いレンズ状の塊となっている。炭化物の細片がごく少量出土した。

遺物は、SP-175から出土した図33-151～153だけである。152・153は柱穴掘り方埋土の下部から出土。SB-19の上限時期を示す遺物である。また、SC-02との切り合い関係は確定できなかつたが、SC-04を切り、後述のSB-20とは平行して配置されている。柱穴から出土した遺物とあわせて、SB-19の時期を6世紀後半に位置付ける。

表.13 19・20号掘立柱建物(SB-19・20)出土遺物観察表

堆積No	出土遺物の種別・器種・特徴			遺物登録番号	遺物実測番号	収納コンテナ番号
	種別	器種	形状・器面調整・胎土などの特徴			
図33-151	土師器	要ある いは壇	要もしくは壇の小型品の底部。外面はナデ、内面は横ナデ。胎土には砂粒を少量含むのみ。	598	25	31
	土師器	高壺	内外面とも荒れが著しく、調整の子細不明。胎土には微細砂粒を少量含むのみで精製粘土を用いる。	596	25	31
	須恵器	壇?	胸部破片。外面は繩席文のタタキの後にカキメを施す。内面には幅の広い同心円文の当て具痕が残る。	595	25	31
図34-154	須恵器	要ある いは壇	胸部破片。外面には細めの斜格子タタキ。内面には幅の狭い同心円文の当て具痕が残る。胎土には精製粘土を用いる。	1681	26	31
	須恵器	壺蓋	内外面は横ナデ。胎土にごく少量の微細砂粒を含む。	600	26	31
	須恵器	壺蓋	内外面とも横ナデ。胎土には砂粒を含まない。	600	26	31
	須恵器	壺身	内外面とも横ナデ。受け部以下は回転ケグリの後に横ナデ。胎土には砂粒をほとんど含まない。	602	26	31
	須恵器	要ある いは壇	胸部破片。外面は繩席文のタタキの後にカキメを施す。内面には幅の狭い同心円文の当て具痕が残る。	1678	25	31
	須恵器	要ある いは壇	胸部破片。外面は繩席文のタタキ、内面には幅の狭い同心円文の当て具痕が残る。	1678	25	31
	須恵器	要ある いは壇	胸部破片。外面は繩席文のタタキ、内面には幅の広い同心円文の当て具痕が残る。	1678	25	31
	須恵器	要ある いは壇	胸部破片。外面は繩席文のタタキの後にカキメを施す。内面には幅広の同心円文の当て具痕をナデ消す。	604	26	31
	繩文土器	浅鉢	口縁端部の内面には段上の肥厚部分をつくる。内外ともに横ナデ。微細砂粒を多く含む。混入品。	606	26	31

20号掘立柱建物 SB-20 (図34、表13)

調査区南部のC・G区に位置するSP-225・228・232・233から構成される東西2間以上、南北1間以上のやや矩形の掘立柱建物である。SP-225・232・233では柱痕跡を確認した。柱間は1.3~1.45mである。

SP-225は調査区壁面で土層を確認できた。柱痕幅15cmで、平面での確認では推定直径は20~24cmである。柱痕部分は、黒褐色粘質シルトで、小指先大の浅黄色砂質土の丸いブロックが混じる。掘り方内の埋土は、上部は黒色粘質シルト、下部は黒褐色粘質シルトでIV層の黄褐色

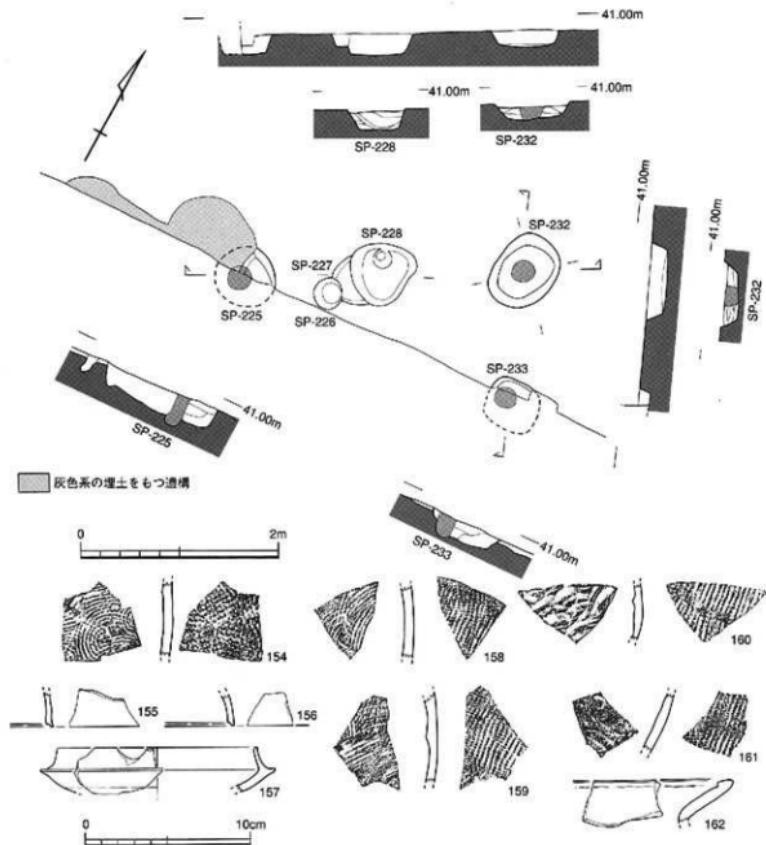


図34 SB-20実測図・出土遺物実測図 (縮尺 1/50・1/3)

砂質シルトがごく少量混じる。

SP-228では柱は抜き取られていた。抜き跡に流入した部分と、柱を固定するための埋土部分に大別できる。前者は、暗褐色ないし黒褐色粘質シルト。後者は、褐色シルトの小さな丸い塊が少量混じる黒褐色粘質土、暗褐色粘質シルトが少量混じる黒褐色粘質土、薄いレンズ状に暗褐色粘質土の塊が混じる黒褐色粘質土が互層でみられ、流入土部分と比べてしまがある。

SP-232の柱痕は黒褐色粘質シルトに暗褐色粘質シルトが混ざり合い、角礫を含む。直径は22~23cmを測る。掘り方内の埋土は、上部は黒褐色粘質シルトで、褐色粘質シルトの小指先大のひしゃげた梢円形の塊や薄いレンズ状の塊が混じる。下部は黒褐色粘質シルトに暗褐色~極

暗褐色粘質シルトが多く混じる部分と少量しか混じらない部分が縞状に互層となっている。

SP-233も調査区壁面で柱痕の一部を確認できた。柱痕部分は黒色粘質シルトで、掘り方内の埋土と比べて粘性が強い。推定直径は20~25cmを測る。周囲の掘り方内の埋土は、ほぼ同質の黒色粘質シルトであるが、IV層の黄褐色砂質シルトがわずかに混じる部分、黒色粘質シルトのみの部分、やや白っぽい黒色粘質シルトが互層でみられる。

出土遺物の中で、図34-154~156はSP-225、157~160はSP-228、161~162はSP-232から出土した。その中で、162は縄文土器で混入品である。以上の遺物から、SB-20の時期を6世紀後半と考える。

3 溝（遺構略号 SD）

1・3号溝 SD-01・03

(図35・36、写真31、表14)

調査区の北東から南西方向へ緩やかに弧を描きながらのびる溝を1条確認した。汚水槽の擾乱部分で途中が失われており、東北部分をSD-01、東南部分をSD-03として調査を進めた。ここでは、SD-01・03として一括して報告する。

調査区西壁ではⅢ層を切り込んで掘られていることを確認した。SK-21・SC-07を切る。旧地形の地形傾斜にほぼ沿ってのび、溝幅は0.3~1.0mを測り、上流と考えられる北東隅ほど狭い。

埋土は、若干灰色味を帯びた黒褐色の粘質土および粘質シルト質で、わずかに細砂のレンズ状ブロックが含まれる程度であり、水が常時流れているとは考え難い。

出土遺物はごく少量で、図36-163~167し



写真31 SD-01・03 検出状況（北東から）

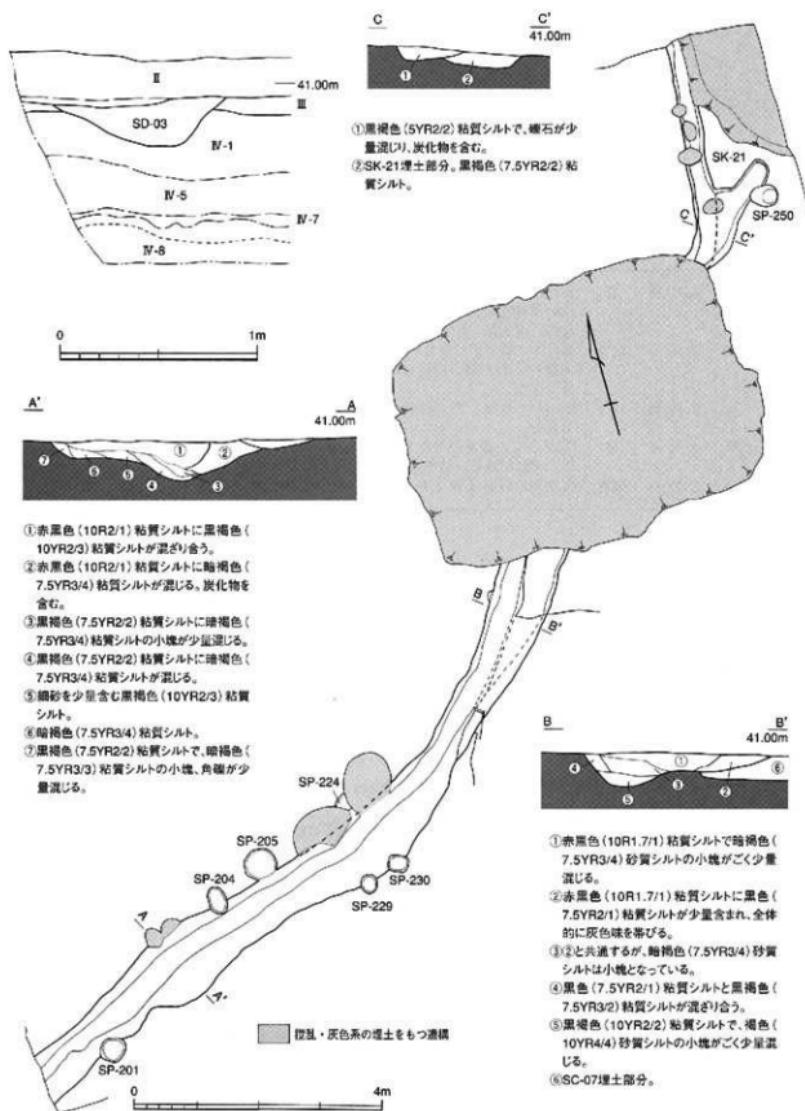


図.35 SD-01・03実測図 (縮尺 1/80 • 1/25)

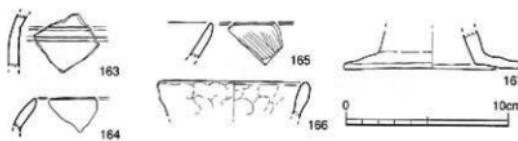


図.36 SD-01・03
出土遺物実測図
(縮尺 1/3)

表.14 1・3号溝 (SD-01・03) 出土遺物観察表

挿図No	出土遺物の種別・器種・特徴			遺 物 登 録 番 号	遺 物 実 測 番 号	収納 コンテナ 番号
	種 別	器 種	形 状・器 面調整・胎 土など の特 徴			
図.36-163	弥生土器	甕	弥生時代前期。如意形口縁臺の小破片。口縁部下に浅い沈線を2条巡らす。胎土には石英の角礫を少量含む。混入品。	312	1	15
164	土師器	壺?	部分的に横ナデの痕跡が残るが、器面の荒れが進み、調整の子細不明。胎土には石英の角礫やクサリ礫を多く含む。	305	1	15
165	土師器	鉢?	外面はハケメ。内面は横ナデ。胎土に微繊・細砂粒を含む。	304	1	15
166	土師器	鉢	手づくね。器体の歪みが著しい。内外面に指頭によるナデ痕が残る。胎土には砂粒をほとんど含まない。	134	1	15
167	土師器	高杯	脚柱部の内面はケズリ。他は内外面とも横ナデ。	311	1	15

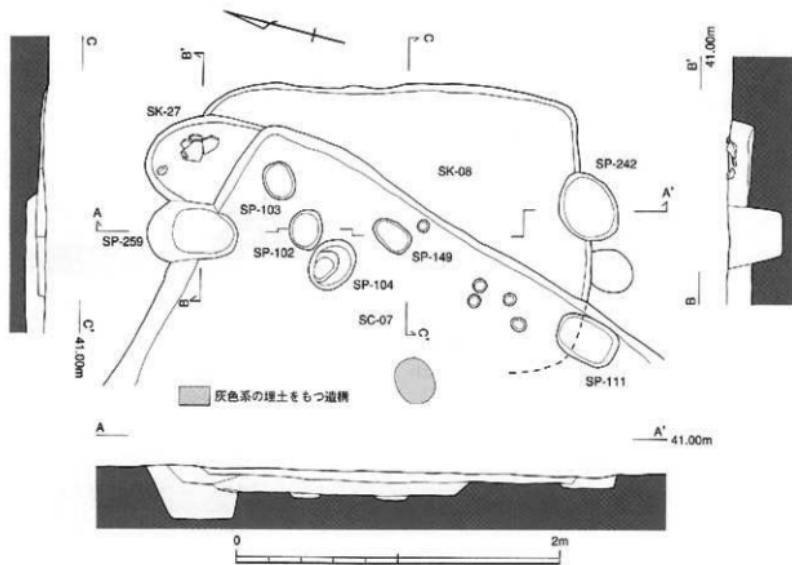


図.37 SK-08・27実測図 (縮尺 1/30)

か図化できなかった。165はSD-01部分で出土したが、他はSD-03とSC-07の重複部分で出土しており、本来SC-07の埋土中の遺物が混入した可能性が強い。そのため、出土遺物から、溝

の時期を確定することはできない。ただし、5世紀のSC-07を切ること、SB-19・20の平行方向とほぼ平行してSD-01・03がのびている点から、6世紀後半段階の溝である可能性がつよい。

4 土壙（遺構略号 SK）

8号土壙 SK-08 (図37)

調査区の南東部E・F区に位置する土壙である。SC-07とSK-27に切られ、大半が失われ全体像は明らかではない。残存する南東部分の形状から、隅丸の長方形の平面形をもつと考えられる。そのほぼ中央にあたる部分にSP-149があり、柱穴と考え、これを中心として折り返すと、南北の長軸長2.45m、東西の短軸長1.8mの規模を推定することができる。

土壙内の埋土は、黒褐色粘質シルトである。SP-149は黒色粘質シルトに褐色粘質シルトが少量混じり、部分的に1~3cmの大い塊となっている。

出土遺物はないが、他の遺構との切合関係から、5世紀代の遺構である可能性がつよい。

10号土壙 SK-10

(図38・39、写真32、表15)

調査区南西隅の壁際D・H区で確認した。隅丸方形の土壙で、大部分が調査区外へのびる。東西長2.5mを測る。SP-213・214・273がSK-10を切っているが、当初、切り合いを確認できず掘り下げたので、出土遺物の一部に混乱が生じてしまった。

床面はほぼ平坦で、埋土は黒褐色系の粘質シルトである。細かな土質を観察すると、周囲から流れ込んだ堆積状況を示している。また、土師器や炭化物の細片は、土壙の北側から流れ込んだ状態で出土している。

出土遺物には弥生時代後期土器と土師器がある。図化できた遺物の中で、図39-168・169

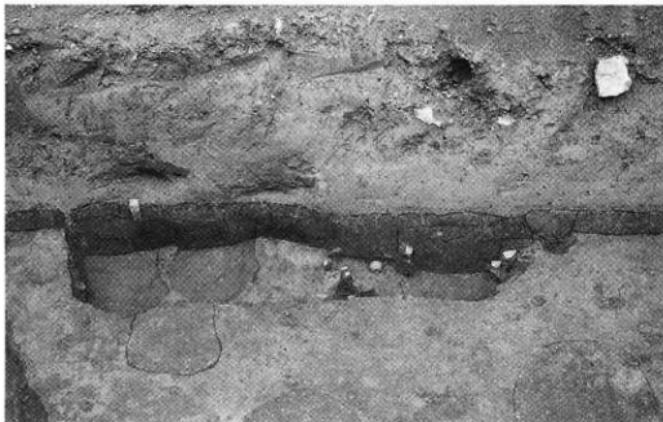
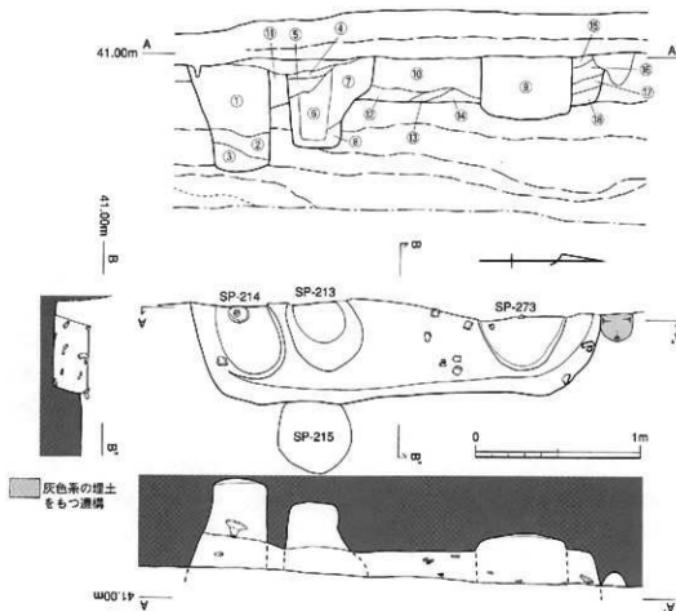


写真32
SK-10 完掘状況
(東から)



※SP-214

- ① 黒色(7.5YR2/1) 粘質シルト。褐色(10YR4/4)～暗褐色(10YR3/4) 粘質シルトのレンズ状や円形の塊が少量混じる。炭化物片・土器細片が出土。
- ② 黒色(7.5YR2/1) 粘質シルトで、暗褐色(10YR3/4) 粘質シルトが多く混じる。土器細片が出土。
- ③ 粘質シルト。上部は褐色(10YR4/4)で、下部ほど黒味が強くなり。黒色(7.5YR2/1)となる。

※SP-213

- ④ 黑褐色(7.5YR2/2) 粘質シルトに暗褐色(10YR3/4) 粘質シルトが混じる。
- ⑤ 暗褐色(7.5YR2/2) 粘質シルトに褐色(10YR4/6) 粘質シルトがごく少量混じる。
- ⑥ 立柱痕跡。黒褐色(7.5YR2/2) 粘質シルトで暗褐色(10YR3/4) 粘質シルトのレンズ状の塊がごく少量混じる。土器細片・炭化物片がごく少量出土。
- ⑦ 黑褐色(7.5YR2/2) 粘質シルトで暗褐色(10YR3/4) 粘質シルトの薄いレンズ状の塊がごく少量混じる。炭化物片・土器細片が出土。
- ⑧ 黑褐色(7.5YR2/2) 粘質シルト。炭化物片・土器細片が出土。

※SP-273

- ⑨ 黒褐色(7.5YR2/2) 粘質シルトで、黄褐色(10YR5/6) シルトの小塊先大の丸い塊がまばらに混じる。炭化物片が出土。
- ⑩ 黒色(7.5YR2/2) 粘質シルトで、褐色(7.5YR4/4) 粘質シルトのレンズ状の塊がごく少量混じる。
- ⑪ 黑褐色(10YR2/2) 粘質シルトに褐色(10YR4/6) 粘質シルトが多く混じる。
- ⑫ 黒色(7.5YR2/1) 粘質シルトに褐色(7.5YR4/4) 粘質シルトの小塊先大の円形の塊がごく少量混じる。炭化物片が出土。
- ⑬ 黑褐色(10YR2/2) 粘質シルトに褐色(10YR4/4) 粘質シルトが少く混じる。炭化物・土器の細片が出土。
- ⑭ 黑褐色(7.5YR2/1) 粘質シルトで、褐色(10YR4/6) 粘質シルトのレンズ状の塊がごく少量混じる。
- ⑮ 黑褐色(10YR2/3) 粘質シルト。上部には暗褐色(10YR3/3) 粘質シルトがごく少量混じり込む。
- ⑯ 黑褐色(7.5YR2/1) 粘質シルトで、明褐色(7.5YR5/6) シルトの横円形の塊がごく少量混じる。炭化物片がごく少量出土。
- ⑰ 黑褐色(7.5YR2/2) 粘質シルトに塊土が塊状に混じり、黄褐色(10YR5/6) シルトの小塊先大の塊を含む。
- ⑱ 赤褐色(10R2/1) 粘質シルトに褐色(10YR4/4) 粘質シルトのレンズ状の塊がごく少量混じる。

図.38 SK-10実測図（縮尺 1/30）

は埋土中～上部、170～173は床面直上から出土した。しかし、床面直上から出土した遺物も、SP-213・214・273との切り合いの確認が遅れたため、確実にSK-10に伴う遺物かは不明である。確実にSK-10の埋土から出土した遺物は168・169のみである。

これらから考えると、土壤の埋没時期の一点を、168・169から5世紀代におくことができよう。この他、須恵器の坏蓋、土師器甌があるが、細片化しているために図示できなかった。個々の遺物の特徴は、表15の観察表に示した。

13号土壤 SK-13

(図40・41、写真33、表16)

調査区北西隅のL・O・P区に位置する。やや矩形の土壤である。SC-02・04に切られ、S-P-255を切る。床面での東西長軸長は2.55m、南北幅は1.4～1.5mである。壁はプラスコ状に緩やかにすばまる。しかし、遺構上部が土層観察ベルトを除去中に崩落したため、遺構断面図と土層断面図にくい違いが生じている。

埋土は、黒褐色粘質シルト部分、褐色粘質シルトに黒褐色～暗褐色の粘質シルトの塊が多く

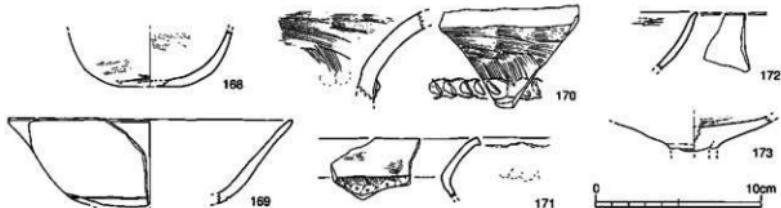
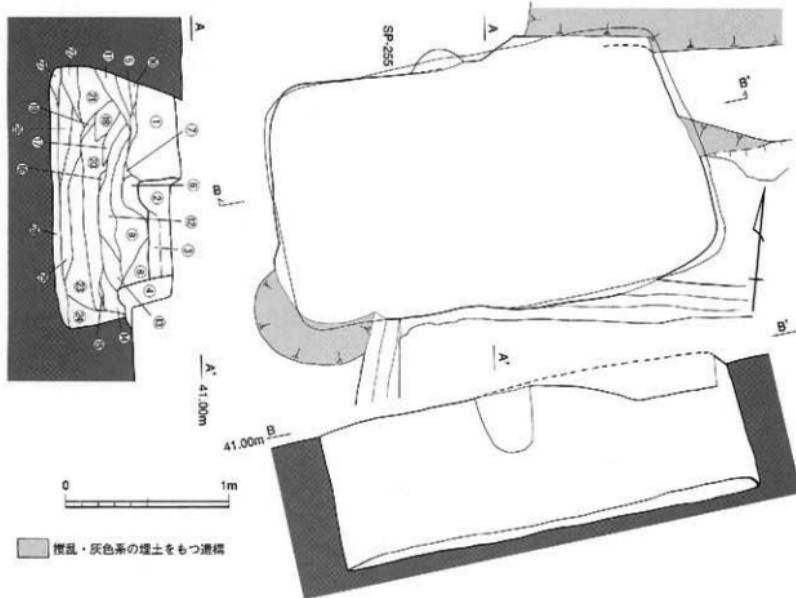


図39 SK-10出土遺物実測図(縮尺 1/3)

表15 10号土壤 (SK-10) 出土遺物観察表

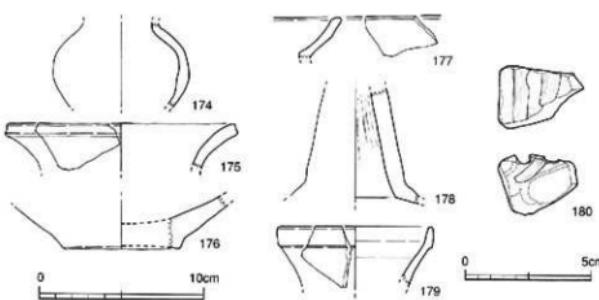
挿図No	出土遺物の種別・器種・特徴			遺物登録番号	遺物実測番号	収納コンテナ番号
	種別	器種	形状・器面調整・胎土などの特徴			
図39-168	土師器	壺	内外面ともにハケメの後にナデ。胎土に砂粒をほとんど含まない。	6	19	69
169	土師器	高坏	坏部下半段のは沈線状になっている。内外面ともに荒れが進み、調整の子細不明。胎土には砂粒をほとんど含まない。	2	19	69
170	弥生土器	壺	弥生時代後期の大型壺の頭部破片。頭部の付け根に近い部位に爪で刻み目を施す突帯が巡る。内外面ともハケメ。混入品。	481	19	69
171	弥生土器	壺	口縁部はハケメの後に横ナデ。胴部内面にはハケメの後、擦過状の調整痕が残る。胎土に微細・細砂粒を多く含む。混入品。	1666	19	69
172	土師器	壺	部分的に横方向のミガキがみられるが、他は器面の荒れが進み調整の子細不明。胎土には砂粒をほとんど含まない。	479	19	69
173	土師器	高坏	脚柱部との接合部分で割れている。内面はハケメの後にナデ。外面はナデ。砂粒をほとんど含まない精製粘土を用いる。	481	19	69



- ① 黒褐色 (10YR2/2) 粘質シルト。暗褐色 (7.5YR3/4) 粘質シルトが混じり、部分的に小指先大の丸い塊となっている。
- ② SC-02 埋土上部。
- ③ SC-02 埋土下部。
- ④ SC-04 埋土。
- ⑤ 黒褐色 (10YR2/2) 粘質シルトで、褐色 (10YR4/6) ないし暗褐色 (10YR2/3) 粘質シルトの小塊がごく少量混じる。
- ⑥ 褐褐色 (10YR3/3) 粘質シルトで、黒色 (7.5YR2/1) 粘質シルトのレンズ状の塊がごく少量混じることとともに、褐色 (10YR4/6) 粘質シルトの親指先大の楕円形の塊が多く混じる。
- ⑦ 小塊をごく少量含む暗褐色 (10YR2/2) 粘質シルトで、褐色 (10YR4/6) シルトがわずかに混じる。
- ⑧ 黒褐色 (10YR2/3) 粘質シルトで、暗褐色 (10YR3/4) ～褐色 (7.5YR4/6) 粘質シルトがごく少量混じる。
- ⑨ 黑褐色 (7.5YR2/2) 粘質シルトで、褐色 (10YR4/4) ～暗褐色 (10YR3/4) シルトの塊3～5cmの薄いレンズ状の塊が混じる。
- ⑩ 黑褐色 (10YR2/2) 粘質シルトで、褐色 (10YR4/4) ～10YR4/6) 粘質シルトのレンズ状の塊が多く混じる。
- ⑪ ⑬と共通する。
- ⑫ 黑色 (7.5YR1.7/1) 粘質土で、暗褐色 (10YR3/3) 粘質土の1～3cm大の楕円形の塊が多く混じる。
- ⑬ ⑭と共通する。
- ⑭ 黑褐色 (7.5YR2/2) 粘質シルトに褐色 (10YR4/4) ～暗褐色

- (10YR3/4) 粘質シルトが少量混じる。
- ⑮ 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質シルトと褐色 (7.5YR4/4) 粘質シルトが混じり合っている。
- ⑯ 黑褐色 (10YR2/2) 粘質シルトに褐色 (10YR4/4) 粘質シルトが多く混じり、部分的に2cm大の楕円形の塊となっている。
- ⑰ 黑褐色 (10YR2/2) 粘質土、褐色 (10YR4/6) 粘質シルトが混じり、部分的に小指先大の塊となっている。
- ⑱ ⑲と共通する。
- ⑲ 黑色 (10YR1.7/1) 粘質土で褐色 (10YR4/4) 粘質シルトが塊状に直角となっている。
- ⑳ 黑色 (7.5YR1.7/1) 粘質土。黒褐色 (7.5YR3/1) 粘質シルトの2～5cm大の楕円形の塊や、褐色 (7.5YR4/3) 粘質シルトのレンズ状の塊が混じる。
- ㉑ ㉒サラサした土質で、黑色 (10YR2/1) 粘質シルトに暗褐色 (10YR3/2) シルトが多く混ざる。
- ㉓ ㉔と共通する。
- ㉕ 砂質が強い黒褐色 (10YR3/2) 砂質シルト。黑色 (7.5YR2/1) ～黒褐色 (7.5YR2/2) 砂質土が網状に混じる。
- ㉖ 黑色 (10YR2/1) 粘質シルトに暗褐色 (10YR3/4) シルトが混ざり込む。
- ㉗ 黑褐色 (7.5YR2/2) 粘質シルトに、褐色 (10YR4/4) 粘質シルトが含まれ、一部、暗褐色 (10YR3/3) 粘質シルトのレンズ状の塊となっている。土壤底全面に堆積。

図.40 SK-13実測図（縮尺 1/30）



混じる部分、IV層の黄褐色砂質シルトが混じり砂質が強い部分が互層をなしている。土壤底にはややしまった上質の黒褐色粘質シルトが堆積している。

出土遺物は、土師器や弥生土器が出土したが、細片が多く、量もごく少ない。図.41-174・180は埋土下部、178・179は埋土上部、176・177は土壤底の土層断面②層から出土した。さらに、176は埋土上部から出土した破片と接合

する。この他、埋土上部から土師器の底部に焼成前に穿孔を施した甌の小片、埋土中～下部で拳大の花崗岩や砂岩の角砾や土器の細片が数点ある。

これらの遺物からは、明確な遺構の時期を決定できない。遺構の形態は弥生時代の貯蔵穴と共通するが、177の土師器の甌が土壤底から出土しているので、ここでは古墳時代の遺構と考えておく。

14号土壤 SK-14 (図.42、表.16)

調査区西壁の北半部L区に位置する楕円形の土壤である。SP-352に切られる。調査区西壁の土層断面で、Ⅲ層上面から掘り込まれていることを確認できた。

埋土のほぼ中位に、褐色シルト質の薄いレンズ状の塊が帶状に点々とみられる。これを境に上下層に分層できた。上層は、Ⅲ層とほぼ同質の土質・土色である。炭化物や土師器の細片が出土した。下層は、黒褐色粘質シルトである。炭化物がまばらに混じる。土壤底は凹凸が著しい。

出土遺物は、ごく少量で、いずれも細片ばかりである。図.42-182~184は埋土上部、181・185は埋土中部から出土した。いずれも6世紀後半の遺物であるが、明確な造構の時期を示す遺物ではない。

16号土壤 SK-16 (図.43、表.16)

調査区北西隅のL・P区に位置する溝状の細長い土壤である。調査区西壁の土層断面で、Ⅲ層上面から掘り込まれていることを確認できた。土壤の西端部分は調査区外にのびる。東端はSP-335に切られ、SK-13とも切り合うため、東西の長軸長は不明である。幅は70~88cmを測る。溝底は凹凸が著しい。後述するように、北側の肩部で、強い火熱を受けたと考えられるSK-26を検出したが、SK-16との関係は不明である。

埋土は、黒褐色粘質シルトで、暗褐色粘質シルトの砂礫をごく少量含み、黄褐色シルトの丸い小指先大の小さな塊が混じる。

埋土中から、図.43-186~188の遺物が散乱した状態で出土した。これらは6世紀後半の遺物であるが、土壤の時期を確定できるものではない。

17号土壤 SK-17 (図.44、表.16)

調査区北壁近くのO区に位置する。SC-02と北壁沿いの擾乱部分に切られ、造構の大半が失われている。埋土は黒褐色シルトで、SC-02の埋土と比べて、若干黒味を帯びている。

出土遺物は数点しかなく、図化できたのは図.44-189~191の3点しかない。189の土師器高坏はSX-18から出土した破片と接合した。189・190は4世紀代に遡るが、191は6世紀後半の須恵器である。しかし、SC-02との切合関係を考えれば、5世紀以前の土壤である可能性がつよい。

21号土壤 SK-21 (図.45)

調査区北東部のI・M区に位置する溝状の細長い土壤である。土層断面でSD-01・03に切られることを確認できた。南北の長軸長は不明である。幅は50cm前後を測る。埋土上部は、SD-01・03とほぼ同質の黒褐色粘質シルトで、下部および東肩付近の埋土は、赤黒色ないし黒褐色粘質シルトに暗褐色砂質シルトの小指~親指先大の丸い塊が混じる。溝底は船底状を呈する。

炭化物の細片が出土したほか、他に遺物は出土していない。しかし、6世紀後半と想定したSD-01・03に切られていたことから、5世紀代に遡る土壤である可能性をもつ。

27号土壤 SK-27

(図.37・46、写真.34・35、表.16)

調査区の南東部F区に位置する楕円形の平面形をもつ小型の土壤である。SC-07に切られ、SK-08を切る。埋土は、黒褐色粘質シルトで、明褐色シルトが少量含まれ、部分的に黒褐色粘質シルトと混じり2~3cm大の楕円形の塊となっている。

埋土の上部から円礫と土師器の小壺(図.46-

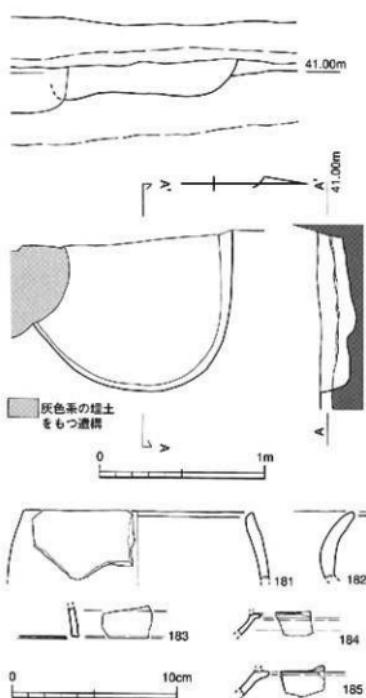


図.42 SK-14実測図（縮尺 1/30）
・出土遺物実測図（縮尺 1/3）

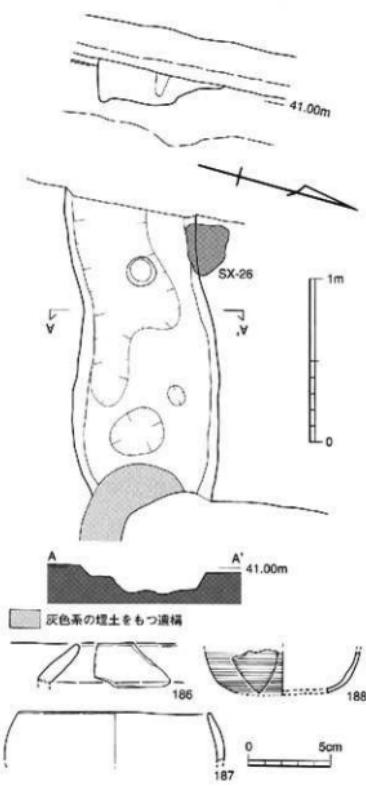


図.43 SK-16実測図（縮尺 1/30）
・出土遺物実測図（縮尺 1/3）

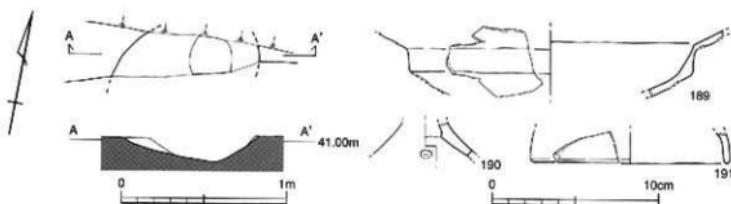


図.44 SK-17実測図（縮尺 1/30）・出土遺物実測図（縮尺 1/3）

表.16 13・14・16・17・27号土壤、18号遺構（SK-13・14・16・17・27、SX-18）出土遺物観察表

埠団No	遺構・層位	出土遺物の種別・器種・特徴			遺物登番号	遺物実測番号	収納コンナ番号
		種別	器種	形状・器面調整・胎土などの特徴			
図41-174	SK-13	不明	壺	弥生土器？ 外面はナデ。内面は荒れが進み、調整の子細不明。胎土には砂粒を含まない。混入品か？	555	23	12
	175	弥生土器	壺	弥生時代中期後半～後期の広口壺。口縁端面がわずかに窪む。胎土には細砂粒が多く含まれる。混入品？			
	176	弥生土器	壺	弥生時代中期後半～後期。外面はナデ、外底檐には指頭痕が残る。胎土には粗・細砂粒が多く含む。混入品？	552-560	23	12
	177	土師器	甕	口縁内面がわずかに窪んで内溝する。内外面とも横ナデ。胎土に微細砂粒が多い。	1315	23	12
	178	土師器	高坏	脚柱部。2次的な火熱を受けて、器面の荒れが進み、調整の子細不明。胎土には微細砂粒が多く含まれる。			
	179	須恵器	甕	内外面ともに横ナデ。胎土には砂粒がほとんど含まれない。	23	23	12
図42-181	SK-14	土師器	壺	口縁部周辺は横ナデ、脇部内外面はナデ。胎土には砂粒が少量含まれるのみ。	569	24	14
	182	土師器	甕	内外面ともに荒れが進み、調整の子細不明。胎土には細砂粒が多く含まれる。	574	23	13
	183	須恵器	坏蓋	口縁部の小破片。内外面とも横ナデ。			
	184	須恵器	坏身	受け部の小破片。受け部下には沈線が巡る。内外面ともに横ナデ。	1327	23	13
	185	須恵器	坏身	受け部の小破片。内外面とも横ナデ。	576	23	13
	図43-186	土師器	甕	口縁部小片。内外面とも横ナデ。胎土には砂粒を少量含む。	519	1	15
		土師器	壺	口縁部がわずかにすぼまる。内外面とも丁寧な横ナデ。胎土には微細砂粒を多く含むが、砂粒の大きさは均一。			
		須恵器	不明	胴部破片。外面はカキメ。内面はナデ・胎土に砂粒を含まない。薄手のつくり。	1328	24	14
図44-189	SK-17	土師器	高坏	外面は器面の剥離が著しく、調整の子細は不明。内面はナデ。胎土には石英の砂粒が多い。	585-1331	24	14
	190	土師器	鉢	脚付き鉢の脚部の破片。外面は非常に丁寧なナデ。内面はナデ。微細砂粒を含む。			
	191	須恵器	坏蓋	口径が小さいが蓋と考えた。内外面とも横ナデ。胎土には微細砂粒を多く含む。			
図46-192 193	SK-27	須恵器	甕	内外面とも横ナデ。内面には自然釉。	1337	27	30
		土師器	壺	短頸壺。口縁部の内外は横ナデ。胴部外面はナデ、内面はケズリ、下半をナデ。肩部内面には接合縫が残る。			
図47-194	SX-18	須恵器	坏蓋	口縁部の小片。内外面とも横ナデ。胎土には砂粒を含まない。	251	27	30
					586	24	14

193)が押しつぶされたような状況でかたまって出土し、その中に192の須恵器が混入していた。193はほぼ完形に復元できる。193の出土状況から、土壌の時期を5世紀後半に比定できる。

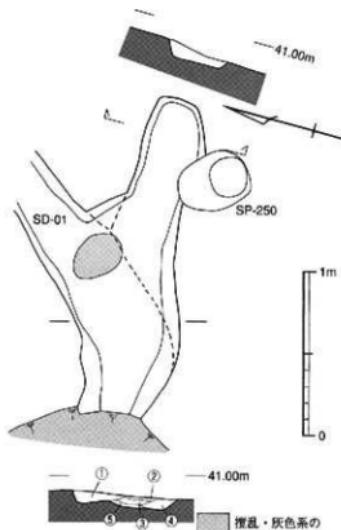


図.45 SK-21実測図 (縮尺 1/30)

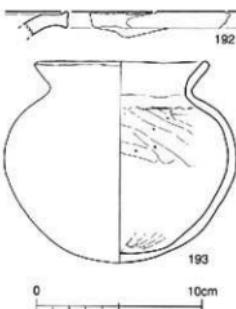


図.46 SK-27
出土遺物
実測図
(縮尺 1/3)



写真.34 SK-27
出土遺物



写真.35 SK-265
遺物出土状況
(南から)

5 その他の遺構と遺物

これまで報告した遺構以外に、風倒木の痕跡、浅い船底状の土壤状の遺構、立柱痕跡をもつなど柱穴と考えられる遺構、小穴などがある。この他、Ⅲ層から出土した遺物を報告する。

15号遺構 SX-15 (付図1)

調査区西半部のG・H・K・L区でSC-02に切られる土壤状の遺構を確認した。SC-02・04に切られる。埋土はⅢ層の黒褐色シルトとまったくかわらず、その中にⅣ層の黄褐色土が半月

形に入り込む。風倒木の痕跡である。

18号遺構 SX-18 (図47、写真36、表16)

調査区南西部のG区で確認した。平面形は不整形で、底面は凹凸が著しい。埋土は、砂礫を少量含む黒褐色砂質シルトで、Ⅲ層の上質・土色と共に判別がつかない。図47-194の須恵器の細片が出土した。遺構の形状からは、人為的な掘り込みとは考え難く、自然の窪みであろうか。

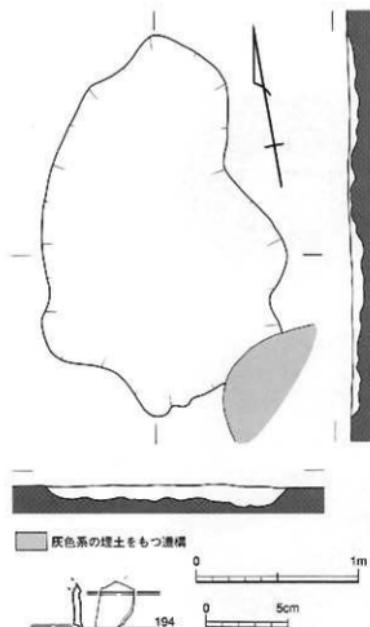


図.47 SX18実測図 (縮尺 1/30)
・出土遺物実測図 (縮尺 1/3)



写真.36 SX-18 実測状況 (南から)



写真.37 SX-26 検出状況

26号造構 SX-26 (付図1、写真37)

調査区西壁沿いのL区で、SK-16北側の肩部分のⅣ層上面で、東西30cm、南北25cmの範囲が半月状に火熱を受けて赤変した部分を確認した。周辺あるいはⅢ層中に、この造構に伴うと考えられる痕跡は認められない。造構の時期・性格ともに不明である。

[立柱痕跡をもつ柱穴および小穴]

柱穴・小穴の観察所見を巻末の表19に示した。その中で、SP-213・214・257・273は、立柱痕跡をもち、柱穴と考えられる遺構である。しかし、調査区が狭いためか、いずれも掘立柱建物を構成する周囲の柱穴はみられない。以下、立柱痕跡をもつ柱穴として報告する。

また、SP-106・111・157・164・201・203・204・206・208・218~220・226・229・246・250・263・267・268は、いずれも黒褐色系の土に褐色土が混じって全体に灰色味を帯びる埋土をもつ。SP-201・204・229はSD-03、SP-211はSC-02、SP-250はSK-21を切っている。SD-03・SC-12・SK-21は古墳時代後期の遺構である。梅味遺跡2次調査など周辺の調査地点では、中世の遺構の埋土は灰色味をおびた黒色土である。これと共通することから、上述の小穴は、中世に属する可能性が強い。しかし、掘立柱建物などのまとまった遺構を構成することはない。



写真38 SP-214 遺物出土状況（東から）

213号柱穴 SP-213 (図38・48、表17)

調査区南西隅で、Ⅲ層上面から掘り込まれ、SK-10を切っている。調査の最終段階で調査区周囲の土層を確認している際に立柱痕跡を確認した。立柱痕跡があることから、掘立柱建物を構成する柱穴と考えたが、周囲にはSP-213と対応するような柱穴は見あたらない。

上層断面では、立柱痕跡、掘り方内埋土、流入土部分に大別できる。立柱痕跡部分は、黒褐色粘質シルトで暗褐色粘質シルトの薄いレンズ状ブロックがごく少量混じる。断面での柱幅は15cmを測る。底面と周囲の一部を、上部に暗褐色粘質シルトのレンズ状ブロックがごく少量混じる黒褐色粘質シルトで固めて立柱を固定している。柱穴の上部には、黒褐色粘質シルトと褐色～暗褐色粘質シルトが混じり合う流入土がみられる。

立柱痕跡、掘り方内埋土、流入土部分それから、土器や炭化物の細片が出土している。図48-199は柱穴下底部から出土した。

214号柱穴 SP-214

(図38・48、写真38、表17)

調査区南西隅のSK-10を切っている。埋土中位に図38-①層の下部に据え置かれたような状態で、土師器高坏の脚部(図48-202)が出土した。坏部破片はない。立柱痕跡は確認されていないが、SP-215の直径や深さから掘立柱建物を構成する柱穴と考える。高坏は、建物の廃絶に伴う祭祀行為にかかわるものと考えたい。

埋土は、上層部分が黒色粘質シルトに褐色～暗褐色粘質シルトが混じり、部分的にレンズ状や3cm大の梢円形の塊になっている。炭化物の細片が含まれる。底面近くは黒色粘質シルトのみに変化する。

257号柱穴 SP-257 (図.31)

調査区西壁沿いで、SC-12を切って掘り込まれたSP-257で、立柱痕跡を確認できた。確認できた部分の柱幅は17~18cm。柱痕跡部分は、黒褐色粘質シルトに褐色粘質シルトの小指先大の楕円形の塊が混じる。掘り方内の埋土も柱痕跡部分と近似するが、褐色粘質シルトの塊はごく少量で、土器細片が多く含まれている。立柱痕跡があることから、掘立柱建物を構成する柱穴と考え、SP-273・213・214などとの対応も考えたが、柱間の距離が不揃いである。図示できるほどの遺物は出土していない。

273号柱穴 SP-273

(図.38・48、写真.38、表.17)

調査区西隅のSK-10を切っている。SP-215

と同じく立柱痕跡は確認できなかった。しかし、規模的には掘立柱建物の柱穴となりえるものである。埋土は黒褐色粘質シルトで、黄褐色シルトの小指先大の丸い塊を上層から下層まで溝遍なく含む。

埋土の上層部分から土師器や須恵器(図.48-210)、炭化物の細片が出土した。

この他、SP-202・211・212・216・245・222・263・268・265・244などから遺物が出土している。とくに、SP-211の埋土中部から、製塙土器が出土していることは注目される。

こうした柱穴・小穴の出土遺物を、図.48、表.17に示し、埋土の観察所見や他の遺構との関係を巻末の表.19にまとめた。参考されたい。

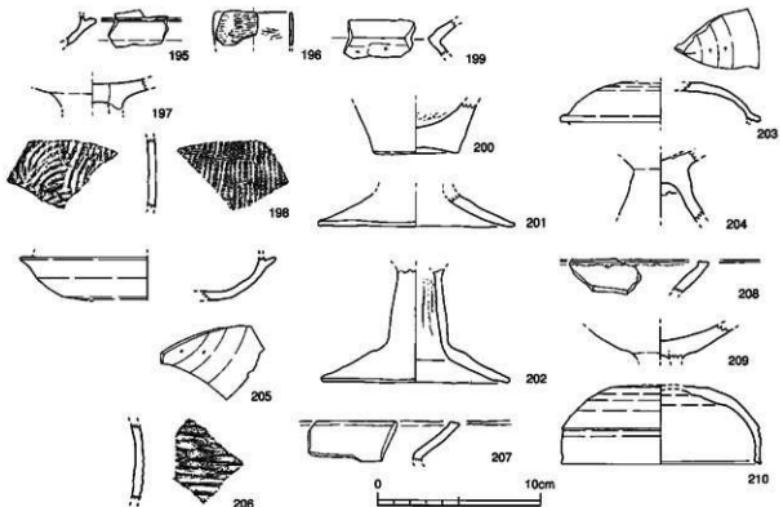


図.48 SP-202・211・212・213・214・216・222・244・245・251・258・263・268・273出土遺物実測図(縮尺 1/3)

表.17 柱穴・小穴出土遺物観察表

探団No	造構・層位	出土遺物の種別・器種・特徴			遺物登録番号	遺物実測番号	取納コンサ番号
		種別	器種	形状・器面調整・胎土などの特徴			
図.48-195	SP-202 上層	須恵器	坏身	受け部部分の小片。内外面ともに横ナデ。胎土には微細砂粒をわずかに含む。	612	28	16
図.48-196	SP-211 中層	土師器	製塙土器	外面には平行タタキ。内面はナデ。部分的にヘラ状工具の押捺痕跡が残る。胎土には砂粒をほとんど含まない。	620	28	16
図.48-197 198	SP-212 上層	土師器	高坏	坏部と脚部の接合部分。坏部内面から円筒形の粘土を充填する。内外面ともに横ナデ。胎土には細砂粒を多く含む。	626	28	16
		須恵器	臺あるいは臺	脚部破片。外面は縄席文、内面には同心円文のタタキが残る。胎土には砂粒を含まない精製粘土を用いている。	623	28	16
図.48-199	SP-213 下底部	土師器	臺	口縁屈曲部分の小片。脚部内面がケズリ以外、他は横ナデ。胎土には細砂粒が多い。	627	28	16
図.48-200 201	SP-214	弥生土器	臺	外面はナデ、裾部は最後に横ナデ。内底面に指頭圧痕が残る。石英の粗・細粒多し。	630	29	16
	SP-214	土師器	高坏	脚部の破片。内外面とも横ナデ。胎土には微細砂粒が含まれる。内外面ともに薄く黒変。	5	29	16
202	SP-214	土師器	高坏	脚柱部がごくわずかに膨らみをもつ。外面はナデ。脚柱内面には絞り痕跡が残る。石英の粗・砂粒を胎土に多く含む。	258	29	16
図.48-203	SP-216 上層	須恵器	坏蓋	口縁部を欠損。天井部外面は回転ケズリ。ヘラ記号がわずかに残る。口縁周辺と内面は回転利用の横ナデ。胎土細砂粒が多い。	634	28	16
図.48-204	SP-245	土師器	高坏	脚の付け根周辺の破片。外面はナデ。胎土には砂粒を含まない精製粘土を用いる。	647	29	16
図.48-205	SP-222	須恵器	坏身	外底面にヘラ記号。外面は回転ケズリ、他は横ナデ。胎土には微細砂粒を少量含む。	273	28	16
図.48-206	SP-263	弥生土器	臺	混入品か? 外面は平行タタキ、内面はナデ。胎土には細砂粒が多い。	661	28	16
図.48-207	SP-268 上部	土師器	臺	口縁端部を摘み上げ、裏面がわずかに盛む。内外面とも横ナデ。胎土には細砂粒が多い。	664	14	16
図.48-208	SP-265	土師器	臺	口縁端部は折り返したように突起する。内外面ともに横ナデ。胎土には細砂粒が多い。	251	28	16
図.48-209	SP-244	土師器	高坏	脚部と接合される坏部の小片。器面が荒れ、調整の子細不明。胎土には粗・細砂粒が多い。	645	28	16
図.48-210	SP-273	須恵器	坏蓋	天井部外面は回転ケズリ。口縁部近くには横ナデ。内面は回転を利用した横ナデ。胎土には砂粒をほとんど含まない。	8-13	29	16

Ⅲ層出土の遺物 (図.49、写真.39、表.18)

Ⅲ層からは弥生時代前～中期、古墳時代中～後期、8世紀前半、中世の遺物が出土している。出土量がもっと多いのは、古墳時代の5～6世紀の遺物である。その他の時期の遺物は、基本的にⅢ層上部から出土しており、遺物が細片化していることから考えると、Ⅲ層上部は長期間にわたって搅乱されていた可能性が高い。

ただし、図.49-214・215などは、比較的大型の破片で、Ⅲ層下部から出土している。調査区壁の土層断面では、古墳時代の遺構の多くは、Ⅲ層の中部もしくは下部から掘り込まれている。掘り込みが浅い小穴などの遺構に伴うものと考えられる。

出土遺物で注目されるのは、231は緑泥片岩製の磨製石庖丁である。刃部近くに蝶状の光沢痕が認められる。また、229・230は中世の遺物である。樽味遺跡1・2次調査で確認された集落との関連が考えられる。



写真.39 Ⅲ層出土遺物

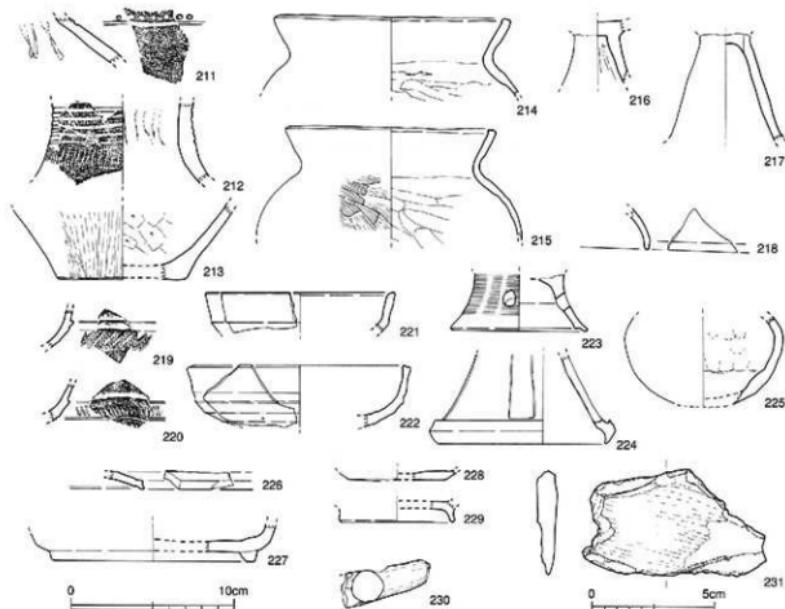


図.49 Ⅲ層出土遺物実測図 (縮尺 1/3・1/2)

表.18 III層出土遺物観察表

掲図No	出土遺物の種別・器種・特徴			遺物登番	遺物実測番号	収納 コレ 番号
	種別	器種	形状・器面調整・胎土などの特徴			
図.49-211	弥生土器	壺	肩部破片。削り出し段の上部に竹管の押捺による列点文。外面は丁寧なナデ、内面には絞り痕跡が残る。	1113	31	16
212	弥生土器	壺	円筒形の頭部破片。5条の平行沈線文の下部に二枚貝の縞模様を押捺して短斜線文を施す。内面には絞り痕跡が残る。	1116	31	65
213	弥生土器	壺	外面はヘラ状工具を撫でつけたような縱方向のミガキ。内面はケズリ。胎土には石英の粗・細砂粒が多い。	1115	31	65
214	土師器	甕	口縁端部が内面にわずかに突出。口縁内外は横ナデ。脇部内面は器面を搔き取ったような強いケズリ。胎土には石英の細砂粒を多く含む。	897	11	65
215	土師器	甕	口縁端部がわずかに内面に突出。口縁部周辺は横ナデ。脇部外表面はハケメ、内面はやや乱雑なケズリ。胎土には微細砂粒を多く含む。	920-1060-1559-1575	11	24-62
216	土師器	高坏	器面の荒れが進み、調整の子細は不明。脚柱部内面に絞り痕跡が残るのみ。胎土には微細砂粒を含む。	929	3	21
217	須恵器	高坏	坏部の接合面で割れている。外面はナデ。胎土には精製粘土を用いる。	1059	27	21
218	須恵器	坏蓋	口縁部の小片。口縁端を強く横ナデするために、わずかに端部外表面が窪む。胎土には微細砂粒が少量含まれるのみ。	1665	31	21
219	須恵器	高坏	坏部の小片。段部の下部に櫛描き4条1単位の波状文が施される。胎土には砂粒をわずかに含む。	862	30	65
220	須恵器	高坏	坏部の小片。段部の下部にカキメ原体の押捺文を施す。外面には一部自然軸。胎土には砂粒をほとんど含まない。	1121	30	65
221	須恵器	高坏	小片のため、口径はもう少し大きくなるか? 内外面ともに横ナデ。胎土には細砂粒が多い。	1665	30	65
222	須恵器	高坏	内外面は横ナデ、坏部下半は回転ケズリの痕跡が残る。胎土には微細砂粒が多く含まれる。	868	30	65
223	須恵器	高坏	脚台部破片。接合面で割れている。焼成前に円孔を穿孔。脚台部の外面はカキメ、裾部~内面は横ナデ。胎土には微細砂粒を少量含む。	844	30	65
224	須恵器	高坏	焼成前に四方に透かし穴をヘラ状工具で穿孔。内外面ともに横ナデ。内面には部分的に自然軸がみられる。胎土は細砂粒をわずかに含むだけの精製粘土。	802	32	65
225	須恵器	甕	外面は横ナデ。内面には指頭圧痕が多く残る。胎土には砂粒を含まない。	1554	32	65
226	須恵器	坏蓋	8世紀前半。口縁端部を扁口のように折り返している。内外面ともに横ナデ。胎土には微細砂粒が多い。	1607	31	65
227	須恵器	高台付坏	8世紀前半。大型の高台付き坏。内外面ともに横ナデ。胎土には微細砂粒を少量含むのみ。	1447	31	65
228	土師器	Ⅲ	外底面は余切り離しか? 器面が荒れ不確実。胎土には砂粒をほとんど含まない。	873	30	65
229	土師器	高台付皿	内外面ともに荒れが著しく、調整の子細不明。胎土には微細砂粒を含むのみ。	978	30	65
230	土製品	匙	取っ手付きの甕である可能性も残るが、土製匙の取っ手部分と考える。胎土は砂粒をほとんど含まない。	857	31	65
231 写真.39	石器	石臼T	緑泥片岩製の磨製石臼T。刃部側面に蝶状の光沢が観察できる。	1124	32	27

IV 土壤学的調査の記録

吉永 長則 (愛媛大学名誉教授)

試料中有機炭素含量の高いものについて炭素の¹⁴C年代を測定した(土壤資料の採取地点は、付図を参照のこと)。

(1) 資料番号

松山市柳味遺跡 3次調査(愛媛大学農学部)地点
 №1 : 15号造構埋土 (SX-15)
 930929採集
 土壌サンプル№⑤
 №2 : 調査区 西壁 III層
 930929採集
 土壌サンプル№①
 №3 : 調査区 西壁 IV-9層
 930929採集
 土壌サンプル№③

(2) 年代測定法

別紙(添付: 学習院大学理学部の方法)の通り。

試料は、埋蔵文化財調査室が採取し、風乾したものである。これを粉碎して、<2 mm部分を篩別し、前処理は一切行わず、測定者に送付した。測定については条件は何ら付していない。

(3) 測定結果

測定者より送付された結果は、以下の通りである。

試料	年代(1950年よりの年数)
№1	4250 ± 90 (2300 BC)
№2	3650 ± 90 (1700 BC)

No 3 3790 ± 80 (1840 BC)

(4) 考察

供試した土層は、その上下および左右の隣接層とは土色が明瞭に異なる埋没層で、各試料の採取深度は、

No 1 : 1.3m
 No 2 : 1.1~1.2m
 No 3 : 1.2~1.3m

である。

ただし、No 1 は、その上限が1.06mであり(下限不明)、あたかも当時の凹地を大型の木片で埋めたかのような形跡が認められた。この試料は、その上限から約25cmの深さで採取したものである。これらの試料は、その腐植含量からみて火山灰起源であり、火山ガラス含量はいずれも高かった。とくに試料No 1 は火山ガラス含量が高かったが、このことはこの層の上記のような起源に疑問を抱かせる。

ところで、紀元前にわが国西部の広域を覆う火山灰を噴出した火山の活動が前後2回あったことが知られている(町田1977)。その一つは約21,000~22,000年前の‘姶良火山’(現鹿児島湾北部)によるもので、その噴出物は姶良テフラ(AT火山灰)として知られている(町田1977)。他の一つは、現今イモゴ層として知られているもので、その降灰は4,000~5,000年前と考えられている(和田1967)。その噴出源は、鹿児島湾南部硫黄島付近にあったとされる“鬼界カルデラ”である(町田1977)。これらのうち、当松山

市付近では降灰が少なかったか、または年代が古いかなどのため、始良テフラはその痕跡が認められない。したがって、本遺跡中に認められる腐植埋没層は、イモゴ層の降灰と同時期、またはその後に堆積したものと思われる(腐植層は常にイモゴ層の上を覆っている)。

一方、九州人吉盆地のイモゴ層については、その上部の腐植層は降灰年代よりかなり新しいという見解がある(菅野ほか1955)。それによると、宮崎県西部付近には古墳が多く見られるが、それらはイモゴ層(ここではアカホヤ層と呼ばれる)の上位に築かれており、従って、イモゴ層は少なくとも四世紀以前(古墳時代以前~実際には4,000~5,000年前)の降灰であり、その上部の層(すなわち、古墳のある層)は早くても4世紀、またはこれ以降の降灰ということになる。

以上を基に、遺跡の年代について考えると、試料1の $4,250 \pm 90$ 年はイモゴ層の降灰時期とはほぼ一致する。しかし、この試料は前述のように、その埋蔵状態が特異であり、その年代の遺跡のそれと同一とする訳にはいかないと思われる。一方、試料2・3で得られる $3,650 \pm 90$ と $3,790 \pm 80$ 年はイモゴ噴出年代より少なくとも数百年は若い。各試料の有機物(炭素含有)を測定すると(測定はチューリン法による)、

資料No 1 : 3.6%

No 2 : 1.9%

No 3 : 2.5%

である。試料2と3の間には僅か0.6%差しか認められないが、試料1とこれから2者の間に1.7~1.1%の差がある。

ここで試料1は上記のように‘特異試料’であり、試料2と3の有機物含量の差は埋没時またはその後の‘遺物’の(年代の若い土壤の)混入の程度の違いによるとすれば、本遺跡の構築の時期は以下のように幅広く推定できる。《イモゴの降灰時期よりは古くなく、1700BCより新しい。》

この推定は、考古学者による推定(およそ5~6世紀)とは大きく異なるが、この違い(およそ2000年)が現在どれほどの意味を有するか判断できない。

[参考文献]

- 菅野一郎・本庄吉男・有村玄洋・徳留昭一・桑野幸男
(1955) : 日本火山灰土に関する研究, (8).
九農試報 3. 31-58
- 町田 洋(1977) : 火山灰は語る.
蒼樹書房. PP.163-208
- 和田光史(1957) : 火山灰土における有機物の集積過程
 ^14C 年齢. ベドロジスト, 11, 46-58

V 調査のまとめ

これまで樽味遺跡では古墳時代の遺構や遺物は、1次調査（調査番号：98704）で6世紀代の自然流路、遺物包含層（本書で報告した樽味団地全域での基本層序Ⅲ層）から遺物が出土しているにすぎなかった。竪穴式住居跡や掘立柱建物などは確認されておらず、団地北側の樽味立派遺跡、西側の樽味高木遺跡1～3次調査や樽味四反地遺跡1～4次調査で竪穴式住居跡や掘立柱建物が調査されていること⁽²²⁾から、古墳時代集落の本体は樽味団地の北側から西側にかけて展開しているものと考えられていた。

ところが、今回の3次調査では、古墳時代中期～後期（5～6世紀）の竪穴式住居跡・掘立柱建物・溝・土壌から構成される集落遺跡を確認できた。また、調査面積が狭い割りに遺構が密集して営まれており、集落の中心部分が予想以上に広い範囲に展開していることを明らかにできた。こうした点を含めて、若干の検討を加えて、調査のまとめとした。

1. Ⅲ層について

樽味遺跡1～3次調査では、弥生時代～中世の遺構を樽味遺跡全域での基本層序のⅣ層上面で確認してきた。しかし、Ⅳ層の上面に堆積しているⅢ層は黒色～黒褐色系の土層で、「第Ⅱ章調査の概要」でも述べたように、1992年度の2次調査中に、約6,300年前に降下した鬼界アカホヤ火山灰が含まれているとの指摘を受けた。今回の調査にあたっては、遺構の掘り込み面の確定や、土壤学的な分析を通して、Ⅲ層堆積の様態を把握することに努めた。

考古学的な所見では、今回調査した古墳時代の遺構は、調査区壁の土層断面で、Ⅲ層の上面

からの掘り込みを確認できた場合もあるが、Ⅲ層中位までしか遺構壁の立ち上がりを追うことできなかつた場合もある。

Ⅲ層中には弥生時代前期～中世の遺物が含まれている。また、20号掘立柱建物（SB-20）を構成する柱穴（SP-232）からは、縄文時代晩期の浅鉢が出土している。これも、本来はⅢ層に包含されていた可能性が強い。これらは、いずれも細片化しており、Ⅲ層上半から多くが出土している。その点からは、Ⅲ層上部は長期にわたって擾乱をうけているものと言える。さらに、Ⅲ層自体に砂や小礫が混じっていることから、雨水や小河川の小規模な氾濫などによる再堆積があったものと考えられる。そのためには、遺構壁の立ち上がりをⅢ層中位までしか確認できないものと考えられる。

こうした樽味遺跡におけるⅢ層に対応する鬼界アカホヤ火山灰が含まれる黒色～黒褐色系の土層は、樽味遺跡周辺だけではなく、石手川南岸の新規扇状地面上の立地する多くの遺跡で確認されている。これに対して、石手川北岸の新規扇状地面に立地する道後・城北遺跡群では、鬼界アカホヤ火山灰の堆積は現在のところ知られていない。約2.0～1.8万年前には、石手川は北岸の城北地区を通り堀江地区に流れていたと推定されている。そのため、洪積世の最末期から完新世には、石手川南岸は比較的安定した土地環境にあったと言われる⁽²³⁾。こうした安定した土地環境は、鬼界アカホヤ火山灰を含む黒色～黒褐色系の土層（樽味遺跡のⅢ層）が石手川南岸に広く分布し、雨水や小規模な河川氾濫による再堆積も考えられるが、基本的には縄文時代以降でも同様であったと言えよう。そうで

あれば、樽味遺跡などが営まれる石手川南岸では、北岸の小規模で点的な分布を示す縄文時代遺跡とは異なり、より規模の大きな集落遺跡が今後発見されることが予想される。

2. 古墳時代中期～後期の集落について

3次調査地点では、主要な遺構として、竪穴式住居跡7棟、掘立柱建物2棟、土壙7基、溝1条がある。これらは、切り合い関係・配置関係や出土遺物から、5世紀後半～後葉を中心とする遺構群、6世紀中頃～後半を中心とする遺構群に大別できる（ただし、13・14・17号土壙については時期を確定できない）。

5世紀後半～後葉を中心とする遺構群には、2・4・5・7・9・12号竪穴式住居跡、8・10・21・27号土壙がある。さらに、4・7・9号竪穴式住居跡は5世紀でも中頃に近い後半段階、2・5号竪穴式住居跡は5世紀後葉～6世紀初頭には埋没している。

とくに、同時期に営まれたと想定できる4・7・9号竪穴式住居跡は、長軸方向を北からやや東へ振ったほぼ同じ方向にとる。しかし、4・9号住居跡は造り付けの竈が付設されているのに対して、7号住居跡は竈はみられず、住居規模も一辺3.5m前後と小型である。また、前者は4本柱構造の住居跡であるが、後者では主柱穴が明確ではない。つまり、4・9号住居跡は炊飯の単位であるのに対して、7号住居跡では炊飯は行われず、住居に付設された簡易な納屋的な建物であったことが考えられる。

さらに、住居の規模をみると、9号住居跡が一辺5～5.5mの比較的大型であるが、4号住居跡は一辺4m強で4本柱構造をもつ住居跡の中では小型である。個々の住居跡には竈が付設

されているので炊飯の単位であるが、住居長軸をほぼ揃えて営まれていることから、2棟の住居跡は相互に生活を補完し合う関係にあったものと考えられる。このような比較的大型の住居に小型の住居が伴い、さらに納屋的な建物が付属するあり方は、当該期の樽味遺跡の集落を構成する基本的な単位と想定してもよかろう。

これに対して、6世紀中頃～後半を中心とする遺構群には、6号竪穴式住居跡、19・20号掘立柱建物がある。竪穴式住居跡は6世紀中頃、掘立柱建物は後半段階の遺構である。また、1・3号溝や、立柱痕跡をもつSP-213・257、規則的に柱穴と考えられるSP-214・273も、出土遺物から6世紀後半代の遺構と考えられ、調査区の東側に複数の掘立柱建物が営まれていることが予想される。

3次調査地点から北に200mほど離れた樽味立派遺跡では、6世紀前葉以降に営まれた18棟の掘立柱建物群が調査されている。この中で、褐色の埋土の4棟は中世段階のものと考えられるが、他の14棟は6世紀代の建物である可能性が強い。掘立柱建物の密集度から、6世紀後半代の集落は、樽味遺跡3次調査地点付近から園地北側に展開しているものと考えられる。

このように、今回の樽味遺跡3次調査では、古墳時代集落の範囲を考えることができる手がかりや、集落を構成する建物群の基本的な単位などを明らかにすることができた。

【註】

- 梅木謙一編 1992：桑原地区的遺跡、松山市文化財報告書、26。梅木謙一・宮内慎一編 1994：桑原地区的遺跡、II、松山市文化財報告書、46
- 平井幸弘 1991：石手川扇状地城北地区における沖積低地の地形発達と考古遺跡の立地環境、愛媛大学教育学部紀要第9部、9

表.19 椅味遺跡 3次調査 柱穴・小穴観察所見一覧表

探団No.	種別	出土遺物の種別・器種・特徴
SP-101	N	SB-19を構成する柱穴。SC-09の床面で確認したが、切り合い関係は不明。
SP-102	F	SC-07床面で確認。黒色粘質シルト。褐色粘質シルトやにぶい黄褐色シルトが小指先大の塊で混じる。
SP-103	F	SC-07床面で確認。黒色粘質シルト。暗褐色粘質シルトが1~2cm大の塊で混じる。炭化物を少量含む。
SP-104	F	SC-07の床面で確認。本文参照。
SP-105		欠番。
SP-106	F	SC-07の床面で確認。切り合い関係は不明。黒色粘質シルトに暗褐色シルトが混じり、灰色味を帯びる。
SP-107	F	SC-07の床面で確認。黒色~暗褐色粘質シルト。
SP-108	F	SC-07の床面で確認。本文参照。
SP-109	F	SC-07の主柱穴? 本文参照。
SP-110	F	黒色粘質シルト。暗褐色粘質シルトの粒を少量含む。土器細片を含む。
SP-111	F	黒色粘質シルト。やや灰色味を帯びる。褐色粘質シルトが混じり、部分的に親指先大の丸い塊となっている。粒状の炭化物の小片を少量含む。土器細片が出土。
SP-112		欠番。
SP-113		欠番。
SP-114	K	SC-02の主柱穴。本文参照。
SP-115	J	黒褐色粘質シルト。褐色粘質シルトが混じり、一部親指先大の塊となっている。炭化物をごく少量含む。
SP-116	J	黒褐色粘質シルトに暗褐色粘質シルトが少量混じる。炭化物の小片を少量含む。土器細片が出土。
SP-117	J	SC-02の支柱穴。本文参照。
SP-118	J	黒褐色粘質シルト。にぶい黄褐色シルトの親指先大の丸い塊をごく少量含み、一部、黒褐色粘質シルトと混じり褐色シルトとなっている。
SP-119	J·K	黒褐色粘質シルト。暗褐色粘質シルトの5cm大の楕円形の塊を少量含む。1cm大の炭化物を少量出土。
SP-120	E	SC-05の周壁杭痕跡。黒色粘質シルト。褐色粘質シルトの2cm大の塊が混じり、一部、黒色粘質シルトと混ざり合う。本文参照。
SP-121	E	黒色粘質シルト。暗褐色粘質シルトの3~1cm大の丸い塊をまばらに含む。土器器の細片が出土。
SP-122	E	SC-05の周壁杭痕跡。褐色粘質シルト。暗褐色粘質シルトが多く混じる。土器器の細片出土。本文参照。
SP-123	E	SC-05の周壁杭痕跡。黒色粘質シルト。暗褐色粘質シルトの1cm大の丸い塊を少量含み、一部、黒色粘質シルトと混ざり合う。本文参照。
SP-124	E	SC-05の周壁杭痕跡。黒褐色粘質シルト。暗褐色粘質シルトの1cm大の楕円形の塊を含む。本文参照。
SP-125	E	SC-05の周壁杭痕跡。黒褐色粘質シルト。褐色粘質シルトの粒が少量混じる。本文参照。
SP-126	E	SC-05の周壁杭痕跡。黒色粘質シルト。褐色シルトの1cm大の丸い塊が混じる。ごく少量の炭化物片が出土。本文参照。
SP-127	E	SC-05の周壁杭痕跡。黒褐色粘質シルト。黃褐色粘質シルトの1cm大の丸い塊が1個混じる。細長い炭化物片が出土。本文参照。
SP-128	E	SC-05の周壁杭痕跡。黒色粘質シルト。褐色粘質シルトの1cm大の楕円形の塊が多く混じる。本文参照。
SP-129	E	SC-05の周壁杭痕跡。黒色粘質シルト。褐色シルトの1cm大の塊が混じる。本文参照。
SP-130	E	SC-05の周壁杭痕跡。黒色粘質シルト。褐色シルトの1cm大の丸い塊を含む。本文参照。
SP-131	E	SC-05の周壁杭痕跡。黒色粘質シルト。褐色粘質シルトの0.5~1cm大の塊が多く含まれる。本文参照。
SP-132	E	SC-05の周壁杭痕跡。黒色粘質シルト。暗褐色粘質シルトが混じり、一部、1cm大の塊となっている。本文参照。
SP-133	E	SC-05の周壁杭痕跡。黒色粘質シルト。暗褐色粘質シルトの粒を多く含む。本文参照。
SP-134	E	SC-05の周壁杭痕跡。黒色粘質シルト。暗褐色粘質シルトの1~2cm大の丸い塊が混じる。本文参照。
SP-135	E	SC-05の周壁杭痕跡。黒色粘質シルト。褐色粘質シルトがまばらに混じる。本文参照。
SP-136	E	SC-05の周壁杭痕跡。埋土の土色・土質はSP-133と共に通す。本文参照。
SP-137	E	SC-05の周壁杭痕跡。黒褐色粘質シルト。暗褐色粘質シルトの3cm大の丸い塊を含む。炭化物の粒が少量出土。本文参照。
SP-138	E	SC-05の床面で検出。黒色粘質シルト。暗褐色粘質シルトの粒が多く混じり、一部、1cm大の丸い塊となっている。炭化物の粒が数点出土。
SP-139	E	SC-05の床面で確認。黒色粘質シルト。褐色粘質シルトの1cm大の丸い塊が混じり、一部、粒状になっている。炭化物の粒が数点出土。

挿図No	種別	出土遺物の種別・器種・特徴
SP-140	E	SC-05の床面で確認。黒色粘質シルト。暗褐色粘質シルトの粒や2cm大の塊がまばらに混じる炭化物と土師器の小片が出土。
SP-141	E	SC-05床面で確認。黒色粘質シルト。褐色シルトの1cm大の楕円形の塊や暗褐色粘質シルトの粒をまばらに含む。炭化物と土師器小片が出土。
SP-142	E	SC-05床面で確認。黒褐色粘質シルト。暗褐色粘質シルトの3cm大の塊や粒がまばらに混じる。粒状の炭化物が少量出土。
SP-143	E	SC-05の床面で確認。黒色粘質シルト。暗褐色粘質シルトの1~2cm大の丸い塊や粒をまばらに含む。炭化物の小片が点々と出土。
SP-144	E	SC-05の間壁杭痕跡。黒色粘質シルト。褐色粘質シルトの3cm大の塊や、暗褐色粘質シルトの1~3cm大の丸い塊を数点含む。角張った炭化物小片がごく少量出土。本文参照。
SP-145	E	SC-05の床面で確認。黒色粘質シルト。暗褐色粘質シルトの長さ7cmほどの三日月形や、1~2cm大の丸い塊となって少量混じる。2cm大の細長い炭化物片が数点出土。
SP-146	E	SC-05の床面で確認。黒色粘質シルト。暗褐色粘質シルトの3cm大の塊を1点、1cm大の丸い塊を数点まばらに含むほか、明褐色シルトの粒が少量混じる。
SP-147	E	SC-05の主柱穴。黒褐色粘質シルト。褐色粘質シルトの1cm大の丸い塊が数点、粒状となった炭化物片が数点出土。土師器の細片が出土。本文参照。
SP-148	E	SC-05の床面で確認。黒色粘質シルト。褐色シルトの2cm大の丸い塊や、褐色粘質シルトの粒がまばらに混じる。土師器の細片が出土。
SP-149	F	SC-07の床面で確認。黒色粘質シルト。褐色粘質シルトの1~3cm大の丸い塊が少量混じり、一部、粒状となっている。
SP-150	E	SC-05内の床面で確認。
SP-151	E	SC-05の床面で確認。
SP-152	E	SC-05の床面で確認。黒色粘質シルト。暗褐色粘質シルトの1~2cm大の丸い塊、褐色シルトの3cm大の楕円形の塊が少量混じる。土師器の細片、炭化物の粒がごく少量出土。
SP-153	E	SC-05の床面で確認。黒色粘質シルト。暗褐色粘質シルトの粒がまばらに混じる。炭化物細片が出土。
SP-154	E	SC-05の床面で確認。黒色粘質シルト。暗褐色粘質シルトの3cm大の楕円形の丸い塊がごく少量混じる。
SP-155	E	SC-05の床面で確認。黒色粘質シルト。暗褐色シルトの2cm大の楕円形の塊が混じる。土師器と炭化物。
SP-156	O	SC-02の支柱穴。本文参照。
SP-157	O	黒褐色粘質シルトに明褐色シルトが混じり、全体に灰色味を帯びる。
SP-158	O	SC-02の支柱穴。本文参照。
SP-159	O	SC-02の床面で確認。黒褐色粘質シルト。暗褐色粘質シルトの1~2cm大の楕円形の塊をごく少量含む。炭化物の粒がごく少量、土師器の細片が出土。
SP-160	O	SC-02の床面で確認。黒褐色粘質シルト。褐色シルトの2cm大の丸い塊がごく少量出土。土師器の細片と炭化物の粒がごく少量出土。
SP-161	K	SC-02の床面で確認。黒褐色粘質シルト。暗褐色粘質シルトの小指先大の塊が少量混じる。炭化物。
SP-162	J	SC-02の支柱穴。本文参照。
SP-163	J	黒褐色粘質シルト。褐色粘質シルトの1cm大の楕円形の塊がごく少量混じり、一部粒状となっている。
SP-164	E	SC-05の床面で確認。黒色粘質シルトに暗褐色粘質シルトが少量混じり、やや灰色味を帯びる。
SP-165	E	SC-05の間壁杭痕跡。本文参照。黒色粘質シルト。暗褐色粘質シルトや明褐色シルトの小さな塊がごく少量混じり、一部、粒状となっている。
SP-166	K	SC-04の主柱穴。本文参照。
SP-167	K	SC-04の主柱穴。本文参照。
SP-168	K	SC-04の主柱穴。本文参照。
SP-169	K	SC-04の主柱穴。本文参照。
SP-170	K	SC-02の支柱穴。本文参照。
SP-171	L	SC-04の床面で確認。
SP-172	K	SB-19を構成する柱穴。黒褐色粘質シルト。褐色粘質シルトの厚さ0.5~2cmのレンズ状の塊や粒が少量混じり、長さ3cm、幅1cmの長方形の炭化物が混じる。本文参照。
SP-173	K	SC-04の床面で確認。黒褐色粘質シルト。黄褐色の親指先大の塊が少量混じる。
SP-174	O	SC-04の床面で確認。黒褐色粘質シルト。黄褐色の親指先大の塊が少量混じる。
SP-175	O	SB-19を構成する柱穴。本文参照。

挿図No	種別	出土遺物の種別・器種・特徴
SP-176	B	観察記録を紹失。
SP-177	A	SC-06を切る。
SP-178	E	黒褐色粘質シルト。褐色シルトとともに焼土が混じる。炭化物と土師器の細片が少量出土。
SP-179~SP-200		欠番
SP-201	D	SD-03を切る。黒褐色粘質シルトではあるが、淡い茶褐色系の色調を帯びる。
SP-202	H	黒色粘質シルト。暗褐色粘質シルトの2~3cm大のレンズ状または丸い塊が混じり、一部、黒色粘質シルトと混じり合う。粒状の炭化物がごく少量、土師器の細片が出土。
SP-203	G·H	黒褐色粘質シルト。暗褐色粘質シルトの5cm大の構円形の塊が少量、暗褐色の長さ2cm大のレンズ状の塊がごく混じり、灰色味を帯びる。土師器の細片が出土。
SP-204	G	SD-03を切る。黒褐色粘質シルトに暗褐色粘質シルトが混じり、やや灰色味を帯びる。炭化物が出土。
SP-205	G	黒褐色粘質シルト。暗褐色粘質シルトの指先大の構円形の塊を少量含む。細長い炭化物が少量出土。
SP-206	B	黒褐色砂質シルト。暗褐色粘質シルトの8cm大の丸い塊が少量混じり、灰色味を帯びる。炭化物。
SP-207	H	黒褐色砂質シルト。やや灰色を帯び細砂や小礫を含む。暗褐色粘質シルトの幅2~3cmのレンズ状の塊がごく少量混じる。角張った炭化物細片が多く出土。
SP-208	G	黒褐色砂質シルトで、暗褐色粘質シルトが混じり、やや灰色味を帯びる。炭化物の細片が出土。
SP-209	G	暗褐色粘質シルトに黒褐色粘質シルトの1cm大の丸い塊が混じる。土師器の細片や炭化物が少量出土。
SP-210	F·G·J·K	黒褐色粘質シルト。暗褐色粘質シルトの幅2cmほどのレンズ状の塊、0.3~0.5cm大の小石がごく少量混じる。土師器の細片や、角張った炭化物片が少量出土。
SP-211	K	SC-02を切る。黒褐色粘質シルト、やや灰色味を帯びた黒褐色粘質シルトや、黄褐色シルトの幅1cmほどのレンズ状の塊がごく少量混じる。土師器の細片や炭化物の粒が少量出土。
SP-212	L	SC-12を切る。黒褐色粘質シルトに小礫が少量混じり、部分的に暗褐色粘質シルトの幅2cmほどのレンズ状塊が少量含まれる。粒状の炭化物が少量出土。
SP-213	H	SK-10を切る。立柱痕跡をもつ。本文参照。
SP-214	D·H	SK-10を切る。掘立柱建物を構成する柱穴か？本文参照。
SP-215	H	SK-10に切られる。黒褐色粘質シルト、暗褐色粘質シルトの小さな塊が混じる。炭化物がごく少量出土。
SP-216	H	黒褐色粘質シルト。褐色シルトや黄褐色シルトの幅5cm大のレンズ状の塊、褐色シルトの5cm大の丸い塊がごく少量混じる。土師器の細片や粒状の炭化物片が少量出土。
SP-217	H	黒褐色粘質シルトに暗褐色粘質シルトが混ざり込む。土師器や炭化物の粒がごく少量出土。
SP-218	H	黒褐色粘質シルトに暗褐色~褐色粘質シルトが混ざり合い、全体的に灰色味を帯びる。
SP-219	H	暗褐色粘質シルトに黒褐色粘質シルトが混ざり込み、灰色味を帯びる。
SP-220	G	黒褐色粘質シルトで小礫を含む。やや灰色味を帯びた黒褐色粘質シルトの塊が混じる。
SP-221	G	黒褐色粘質シルトで3cm大の角礫が混じる。暗褐色粘質シルトの1cm大の構円形、褐色シルトの幅10cmほどのレンズ状の塊がごく少量混じる。角張った炭化物の小片や、土師器の細片が出土。
SP-222	G·K	黒褐色粘質シルト。暗褐色粘質シルトの0.5~1cm大の構円形の塊が多く混じる。土師器の細片が出土。
SP-223	G	黒褐色粘質シルト。暗褐色シルトの5cm大の丸い塊や小礫が少量混じる。炭化物片がごく少量出土。
SP-224	G	黒褐色粘質シルト。暗褐色シルトの3cm大の構円形の塊が少量混じる。
SP-225	C	SB-20を構成する柱穴。本文参照。
SP-226	C	黒色粘質シルト。褐色粘質シルトの粒状ブロックを少量含み、全体に灰色味を帯びる。土師器の細片、炭化物の粒がごく少量出土。
SP-227	C	SP-226~228に切られる。
SP-228	C	SB-20を構成する柱穴。本文参照。
SP-229	G	SD-03を切る。黒褐色粘質シルトに暗褐色粘質シルトが多く混じり、灰色味を帯びる。
SP-230	G	SD-03を切る。SP-229と同じ埋土をもつ。
SP-231	F·G	黒褐色粘質シルト。暗褐色粘質シルトの1~2cm大の丸い塊や、13cm大の構円形の塊が混じり、部分的に黒褐色粘質シルトと混ざり合う。土師器の細片、粒状の炭化物がごく少量出土。
SP-232	C·G	SB-20を構成する柱穴。本文参照。
SP-233	C	SB-20を構成する柱穴。本文参照。
SP-234	B	黒色粘質シルト。暗褐色粘質シルトの小さな塊が少量混じる。粒状の炭化物、土師器の細片が出土。
SP-235	F	SC-07を切る。黒色粘質シルト。暗褐色粘質シルトが混ざり合い、黄褐色シルトがごく少量含まれる。
SP-236	F	SC-07を切る。黒褐色粘質シルト。褐色粘質シルトの1cm大の丸い塊、暗褐色シルトの1~3cm大の構円形の塊が少量混じる。土師器の細片が出土。

拂図No	種別	出土遺物の種別・器種・特徴		
SP-237	F	SC-07を切る。黒色粘質シルト。暗褐色粘質シルトの幅5cmほどのレンズ状の塊がごく少量混じる。		
SP-238	E	黒褐色粘質シルト。暗褐色粘質シルトが混じり、一部1cm大の丸い塊となっている。		
SP-239	E	黒褐色粘質シルト。暗褐色粘質シルトが混じり、部分的に1cm大の丸い塊となっている。		
SP-240	E	黒褐色粘質シルト。暗褐色粘質シルトが混じり、一部1~3cm大の丸い塊となっている。また、にぶい黄褐色シルトの1cm大の塊が混じる。粒状の炭化物が出土。		
SP-241	F	黒褐色粘質シルト。暗褐色粘質シルトが混じり、一部1~2cm大の小さなレンズ状の塊となっている。粒状の炭化物が出土。		
SP-242	F	SC-06とSK-08を切る。黒褐色粘質シルト。暗褐色粘質シルトが混じり、部分的にレンズ状の塊となっている。土師器の細片が出土。		
SP-243	F	SC-08に切られる。黒褐色粘質シルト。暗褐色粘質シルトの1~2cm大の丸い塊が混じる。		
SP-244	E	SC-05に切られる。黒褐色粘質シルト。褐色粘質シルトが混じり、部分的に1cm大の楕円形の塊となっている。1cm大の角張った炭化物片、土師器の細片が出土。		
SP-245	E・I	黒色粘質シルト。褐色シルトの1~3cm大の楕円形の塊で混じる。土師器の破片が出土。土質はよく締まっている。黒褐色粘質シルト。褐色シルトが混じり、一部、1cm大の丸い塊となっている。		
SP-246	E・I	0.7cmほどの角張った炭化物がごく少量出土。		
SP-247	I	黒褐色砂質シルト。褐色粘質シルトが混じり、部分的に3cm大の丸い塊となっている。1cm大の楕円形の炭化物片がごく少量出土。		
SP-248	I	黒褐色粘質シルト。暗褐色粘質シルトが混じり、一部2cm大の丸い塊となっている。炭化物を少量含む。		
SP-249	I	黒褐色粘質シルト。粒状の炭化物をごく少量含む。土師器の細片が出土。		
SP-250	I	SK-21を切る。黒色粘質シルト。褐色~暗褐色粘質シルトが混じる。細長い炭化物や土師器の細片出土。		
SP-251	A・E	黒色粘質シルト。暗褐色粘質シルトが混じり、一部1cm前後の丸い塊となっている。土師器の細片出土。		
SP-252	E	SC-06の主柱穴。黒色粘質シルト。やや黒みの強い黒褐色粘質シルトの1cm大の丸い塊や、暗褐色粘質シルトが多く混じる。土師器の細片や粒状の炭化物がごく少量出土。本文参照。		
SP-253	N	黒褐色粘質シルト。暗褐色粘質シルトが混じり、一部1cm大の丸い塊となる。炭化物や土師器の細片。		
SP-254	P	土質はよく締まっている。黒褐色粘質シルト。暗褐色粘質シルトが混じり、部分的に軽1~3cmほどのレンズ状の塊となっている。		
SP-255	P	SK-13に切られる。黒褐色粘質シルト。褐色~暗褐色粘質シルトが混じり、一部1~3cm大のレンズ状の塊となっている。粒状の炭化物がごく少量混じる。		
SP-256	N	SB-19を構成する柱穴。本文参照。		
SP-257	H	SC-12を切る。立柱痕跡はないが、柱穴と考える。本文参照。		
SP-258	E・I	SC-05を切る。		
SP-259	F	SC-07を切る。		
SP-260	N	黒褐色粘質シルトと黒褐色粘質シルトの塊が全体的にチョコレート状に混ざり合っている。		
SP-261	J	黒色砂質シルトで、0.5cmの大砂礫や、褐色~暗褐色砂質シルトの2cm大の塊が混じる。黒褐色粘質シルト。暗褐色シルトの1~2cm大的塊を少量含むとともに、焼土塊や、1~3cm大の角張った炭化物片が多く混じる。土師器の細片が出土。		
SP-262	J	SP-263	J・N	黒褐色粘質シルトに暗褐色粘質シルトが混じり、全体に灰色味を帯びる。
SP-264	J	黒褐色粘質シルト。暗褐色粘質シルトが混じり、部分的に長さ5cmほどの細長い楕円形の塊となっている。土師器の細片や、2cm大の三角形の炭化物片がごく少量出土。		
SP-265	F	欠番。		
SP-266	L	黒褐色粘質シルトで、砂礫混じり、明褐色~褐色粘質シルトの1cm大の楕円のブロックをごく少量含む。粒状の炭化物、土師器の細片が出土。		
SP-267	L	黒褐色粘質シルトで、褐色シルトが多く混じるために、やや灰色味を帯びる。土質は少しバサつき気味。1cm角の炭化物片、土師器の細片が少量出土。		
SP-268	A	SC-06の床面で確認。黒褐色粘質シルトで、やや灰色味を帯びる。		
SP-269	O	SC-02の主柱穴。焦褐色粘質シルトに黒色粘質シルトが混じる。炭化物に粒が少量出土。本文参照。		
SP-270	E	SC-05の主柱穴。黒褐色粘質シルト。明褐色~褐色粘質シルト、小さな焼土塊が多く含まれる。1~2cm大的細長い炭化物片や土師器の小片が少量出土。本文参照。		
SP-271	E	黒褐色粘質シルト。黒色~暗褐色粘質シルトが混じる。土質はよく締まっている。炭化物の小片が出土。		
SP-272	E	SC-06の主柱穴。本文参照。		
SP-273	H	SK-10を切る。撹立柱建物を構成する柱穴か？本文参照。		

調査書抄録

ふりがな	たるみいせき Ⅲ						
書名	樟味遺跡 Ⅲ						
副書名	樟味遺跡 3次調査報告						
巻次							
シリーズ名	愛媛大学蔵文化財調査報告第57集						
シリーズ番号	VI						
編著者名	田崎博之・吉永長則・宮崎直栄						
編集機関	愛媛大学蔵文化財調査室						
所在地	〒791-77 松山市道後橋又10番13号 TEL 089-927-9127						
発行年月日	西暦1997年3月28日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東緯 ***	調査期間	調査面積(m ²)	調査原因
たるみいせき 樟味遺跡 3次調査	松山市樟味 3丁目5番7号	38201			19930823～ 19931006	259	校舎(附属 図書館)建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
樟味遺跡 3次調査	集落	古墳	堅穴式住居址 7 掘立柱建物 2 講 1 土塁 7 ほか	須恵器 土師器	造り付け窓		

樽味遺跡 III

—樽味遺跡 3次調査報告—
愛媛大学埋蔵文化財調査報告VI

1997年3月28日

発行 愛媛大学埋蔵文化財調査室
松山市道後橋又10-13
TEL(089)927-9127

印刷 原印刷株式会社
〒791 松山市山越4丁目8-15
TEL(089)924-8823
